
LEGEND 『伝説』【輪廻の出会い】

上川 勲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEGEND『伝説』【輪廻の出会い】

【Zコード】

Z7016A

【作者名】

上川 勲

【あらすじ】

広大な宇宙。そこには、数え切れない数の星があり、惑星があり、命がある。そして、その命の数だけ、喜びが存在する。また、悲しみも・・・・・。『仲間』との絆が生み出す長編ファンタジー小説。

序章（前書き）

やや専門用語（作者が勝手に作った造語）が物語が進むに連れて多くなります。

序章

フニート暦1500年

「はああああああツ……」

「くッ・・・このつ……」

周りは戦争で倒れた兵士たちであるう死体が散乱し、土煙のうつすらと浮かぶ中

で、戦いは起きていた。

互いに武器である剣を互いの身体に斬りつけようとするが、お互い一步も引かない

互角の勝負。

片方は17歳前後の青年で、もう片方は15歳前後の少女だった。

「てやッ！」

「あまいッ！」

カキンッ、キンッ……と刃^やが交差するごとに金属音が鳴り響く。

周りに何もないでのその鋭い金属音がよく響く。

「はあ・・・はあ・・・。」

「はあ・・・・・はあ・・・・・。」

互いに息遣いが荒い。どうやら相手の間隔の間、戦い続けていたようだ。

「はあああああああああああああああああああああああああああああ

あ

「あ――!――!――!――!――!――!――!――!――!――!――!――!

「やああああああああああああああああああああああああああああああ

あ

「あ――!――!――!――!――!――!――!――!――!――!――!――!

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

ン

荒れた野全体に響き渡るかのような、金属音が鳴った・・・・・・・・・・

フェート暦2050年

世界は平穏だった。

特に大きな争いもなく、ただ同じような時間が流れている。

タイガ・ウナバラ。男性。

そんな平穏な世界を旅する17歳の流浪の剣士である。

これは、この青年を中心に繰り広げられる物語である。

この物語の先にあるものは、

笑いか、悲しみか、感動か・・・

それはまだ誰にもわからない。

序章（後書き）

初小説です。

文章的に、かなり雑&変な場所があるかもしれません。

また、このあとがきでは専門用語（作者が作った造語が多数）を主に説明していきたいと思います。

フェート暦
年表の単位。

第1話 プロローグ

フェート暦2050年。

大きな争いは表面上では起きていない時代

「・・・・・ふああう・・・・。」

澄み切つた青空の下でひとり、大きなあぐびをする青年。

軽装で、ジヤー

ジのスボンをはいている
そして、ジのヘリトはは僕の靴が
ぶら下がつてい
た。

L

青年オーリジナルソングを歌いながら草原の中を歩き続ける。

「おい、タイガ。ちよこと氣がぬけすぎなんじやねーのか?」

つて。 何にも起きないから気がたれる

青髪の青年、タイガに話しかけたのは、金髪の青年だった。

金髪の青年の名前はティレク。背中に槍を背負つていぬところから槍使いだらうと

想像できる。

「まあまあ、うーん、なーんに起きてないの?」とじや

「未だね」

ぬぼぬぼと町を田指して歩き続けるタイガとティレク。

・
・
・
だが

「…ん？」

「どうした？ タイガ。」

「いや、何か聞こえたような気が・・・。」

草原にかける風と共に聞こえてきた声。その声は次第にはっきりと
聞こえ始める。

「・・・・すけてくれ。

「行つてみよ。」

「いや、ねえなあ、ほんとくわけにはいかねーし

「・・・助けてくれッ！！」

そこには1人の人がいた

大きなリソースを背負っているところが、商業人が旅人の数だけではなく、おそらく戦えないところを見ると前者の可能性が高い。

「ハク君、ティレウツ!!」

「はいよシ！？」

タイガとテイレクは互いに得物を取り出す。

「アーティストがアーティストをアーティストにする」

タイガがそう言うと商業人はひとまずその場から逃走する。

ティレクはそつと口を緩ませる。

「アーティスト」たる心

タイガは一足飛ひで魔物の懷に入り込む。
魔物はタイガの足の迅さに完全に不意をつかれた。

タイガは大きく斬り上げで斬りつける。

まともに喰らつた魔物は激痛の悲鳴を上げる。

卷之二

「どうやつ
続けて突き攻撃を放とうとするタイガだが、

「かああッ！！！」

『 』と書いたところが。

だが、紙一重で攻撃から防御に変えたおかげで直撃は避けられたが、

物を通じて喰らつた。

〔 二 〕

大きくなればされるダメ

「烈空破ツ！！」

魔物の背後から剣の斬撃が放たれ魔物はその場で

「ティレク・・・・・・ありがとう。」

危うく大怪我をするところを助けられ、タイガはひと言礼を言つた

だ
つ
た

第2話～歴史～

「ティレク、ありがとう。」

タイガの間一髪のところを助けたのはティレクだった。

「いや、どうつてことねーよ。」

と、ティレク。

「…………あ、そうだ。おじさん、大丈夫ですか。」

戦場から離れていた商業者らしいおじさんは、でかい荷物を背負つてこちらに向かってきた。

「いやー、ありがとうありがとう。センキューべりーマッシュチョだよ。や、ホント。」

思いつくことをとにかく次から次へと言葉に出す商業者。さすがというべきか……。

「俺たちは人助けしながら旅してるから当然さ。な、タイガ。」

「まあね。」

「まあ、立ち話もなんだからわたしの町まで来てくれ。礼もしたいしね。」

そう言いつと、おじさんはタイガとティレクの腕を引っ張つて返答を待たずに町まで連れて行く。

（貿易の町 イクスピート）

（……来てしました。）

(それも強引に・・・)

と、互いに思うタイガとティレク。

「ああ、ぜひわたしのうちに来てくれ。」

と、ここに笑顔の商業人じいさん。

しかし、ここまでタイガとティレクをひっぱつてこれる・・・。かつ、ダッシュしてここまでこれる力と体力があるならば、別にあのとき助けを呼ぶ必要はなかつたのではないかと、切実に思う2人だった。

「や、どうも。」

おじさんから差し出されたお茶をすすすつと一服するタイガとティレク。

「いや、どうも。ちようどのびがからからだつたんですね。」（おじさんに引つ張られたせいで。）

途中、あえて言葉をにじらせるタイガ。

本人に悪気がないので言つのは失礼だと思つたのである。『そういえば、ここは貿易の町なんだな。』今までくるとき、貿易の船や宇宙船があつたし。』

と、ティレク。

「その通り。ここは、大陸間の貿易はもちろん、惑星間の貿易も盛んな町なんだよ。なにせ、文明が大きく変わつたからね。550年ほど前から。」

と、おじさんも自分で入れた茶を一服。

「550年前つて言つと、『崩壊戦争』が終わつたころか。」

と、ティレク。

「やうだよ。あの『崩壊戦争』を期に、世界は繁栄していくんだ。」

「『崩壊戦争』が原因で、人類のみならず生き物が全滅しかかつたときには登場したのが、『ルシア』と『ヴァイン』。今でも英雄とし

て語られている2人だよ。」

「へえ～。」

おじさんの話を素直に感心するタイガ。

「つてタイガ。知らなかつたのか？」

「だつて、僕が旅立つたのは10歳のときだよ。勉強もほとんどしてなかつたし……。」

「つたく、知つとけよ。ほとんど常識だぞ。」

呆れ顔で言うティレク。

「・・・・・まあ、この際教えといてやる。現在英雄とされている『ルシア』と『ヴァイン』だが、ある程度文明が栄えたのを期に、二人は互いに戦いを挑んだらしい。その戦いの場所がたしか・・・・・惑星『カムラン』だけ。そして、戦いの結果同士討ち。両者共倒れになつたらしいな。」

「なんで、『ルシア』と『ヴァイン』は戦いをしたのさ。」

と、タイガ。

「たしか・・・・・『ルシア』は民の意見を反映させて文明を築き上げようとして、『ヴァイン』は、自分の独断で文明を築き上げようとした。・・・・・要するに、互いに思想が両極だったから戦いになつたわけだよ。」

「そして結局両方の思想はかなわず・・・か。話しあえば、何とかなつたかもしぬないのに。」

と、タイガがつぶやく。

勝手に口から出てきたように。

「それで、残された民は、結局両方の思想に分かれてそれぞれに文明を築き上げた。それが今の現実だ。」

「ふ～ん。」

そう言つと、タイガは茶を飲み干すのだった。

そして夕方、

「で、これからあなたたちはどこに行くんかい？」

「僕たちは行き場所を決めてないからね。わからないよ。」

「そういうこと。」

と、タイガとティレク。

要するに、行き当たりばったり、適当に事件があつたら巻き込まれて解決していく・・・・・・・そんな感じである。

「それなら、惑星『スレイニア』へいつたらどうだ。宇宙船を使っての航海旅となるがいい経験になるだろうし。」

「そうしたいけど、あいにくラルクが底についてまして。」

と、タイガ。

「大丈夫だつて。まあ、今日は遅いしうちに泊まりなさい。何とか」といてあげるから。」

イマイチ理解できなかつたものの、とりあえず意味を理解しようとせず泊まることにした。

第2話～歴史～（後書き）

専門用語解説

ルシアンドヴァイン

550年前に終戦した『崩壊戦争』後の英雄。

2人は全く対極の思想をしており、のちに戦つて相打ちとなる。

崩壊戦争

フェート暦1400～1500年にかけて起きた大戦争のことで、この戦争のせいで危うく惑星『カムラン』の全生物が滅びかけた。

惑星カムラン

人類の故郷の惑星。今は生物がほとんどいない『死の惑星』となっている。

第3話～迫る影～

次の日・・・

「じゃあ、宇宙港はここから南に進むとあるから、それで受け付けうけてね。」

「はい、ありがとうございました。おじさん。」

「世話をなつたな。」

商業人のおじさんにそれだけ言つと、タイガとティレクは宇宙港へと向かつた。

「・・・・にしてラッキーだったな。」

と、ティレク。

「ホントだね。あのおじさんがこの宇宙港のオーナーだったなんてね。」

どうやらあの商業人のおじさん、この貿易の町『イクスピート』にある宇宙港のオーナーだったらしい。

また同時に、世界をまたにかける商業人でもあるらしく、商売を終えて帰ろうとしたところを魔物に襲われ、タイガたちに助けられたというわけだ。

「・・・・・さつてと、手続きも終わつたしついに宇宙の旅だぜ、

タイガ』

「ティレク。あまりはしゃがないでよ。・・・・・気持ちはわかる

けどさ。』

初めての宇宙旅。

それにわくわくと子供の心を蘇らせているのはティレクだけではなく、タイガもだった。

実は、フェート暦1700年程くらいから惑星『カムラン』を中心 に、文明が急速に発達し、滅びかけてた人類も戦争終結後、人口が一気に増加。惑星1個ではとても治まりきらないほどの人口爆発ぶりになつていた。

そこで人類は宇宙船をつくり、惑星『カムラン』から離れ、人が住める他の惑星を探してはその惑星を開拓しては、人口を増やしていました。

人が他の惑星に住み着くことによつて、惑星『カムラン』にいた人々もそれに釣られるように他の惑星に住むようになつてしまつたので現在、『カムラン』にはまったく人がいない。

・・・・・と言うのも、急速すぎる人口爆発のせいで食料となるものがなくなり、大地や水もかれてしまつたからである。

そのため人類の母星、惑星『カムラン』は、現在『死の惑星』となつてしまつた。

・・・・・話を元に戻そう。

とにかくそのような超高度経済成長が起きたため、惑星間を移動するなんてことは当たり前となつていた。

「ついにやつを発見しました。」

「へえ、やつと見つけたのかい。」

「はい。記憶は輪廻転生が原因で失つてゐるようですが、いくらかのショックを与える元に戻るかと。」

「それで、そいつがいる場所は？」

「惑星『スレイニア』へ向かう宇宙船に乗っています。」

「そうか……よし、その船を打ち落とせ。ショックで記憶が戻るかもしない。」

「もし失敗したらどうします？」

「そのときはそのときだ。そうなつたら、ボクの期待はずれだったといつことわ。遠慮なくしてくれ。」

「かしこまりました。」

世界の影で、この会話は成されていた。

第4話～船からの脱出～

（宇宙船 内部）

「うわあ。僕、宇宙船に乗ったの初めてだよ。」

「まあ、それは俺もないんだけどさ。今の時代じゃ、乗ってないやつのほうが少ないって話だぜ。」

童心に戻つてややはしゃぎきみのタイガにティレクは言った。
たしかに、タイガたちの生きている時代は、人々が宇宙に出るようになつてからだいぶ年が経つている。

値段的にも、もちろん距離にもよるが、現代（自分たちの住む）の電車代を少し上げた程度である。

「ま、まあ。それは仕方がないんじゃない？だつて、僕たち自分で言つのもなんだけど・・・・・・世間知らずだし。」

「おいおい。おまえはそもそも、俺はこれでも勉強してたほうだぞ。
これでも、学年成績で常にベスト10に入つてたくらいなんだからな。」

「え！？そ、そうなの？」

ティレクの意外な一面を聞いて驚くタイガ。

それも無理はない。普段、美人な女性を見つけるなりナンパをし、
チヤラチヤラとしているのだから・・・・・。

人は見かけによらないものである。

「あれが『スレイミア』行きの宇宙船か。」
「よつしゃー早速作戦開始だぜええええツツー！」

「作戦というより、破壊だがな。」

タイガたちが乗っている宇宙船より2万キロほど離れた場所に、3機の戦闘機がいた。

その3機の戦闘機が2万キロ先を航行している宇宙船に標準を定める。

「・・・・・よし。」

航行して10時間。乗客が疲れで眠っていたとき・・・・・

ドゴオツ

突然、船内が激しく揺れる。

その振動に乗客たちは強制的に目を覚めさせられる。

タイガたちも、当然ながら例外じゃなかつた。

「なんだ！？」

「さあな。ただ事じゃないことは確かだ。」

乗客たちが右往左往しているときに、アナウンスが流れる。

「乗客は、すみやかに非常用の小型船にお乗りください。繰り返します。・・・・・。」

いわゆる避難命令だつた。

そのアナウンスを聞くや否や、乗客たちは悲鳴を上げながらおののおの小型船に乗り込もうとしていた。

「と、とにかく今は指示に従おう。ティレクー！」

「ああ、しかたねーな。」

そう言つと、タイガたちも小型船に乗り込んだ。

（小型船 内部）

どうやらこの小型船は2人乗りらしい。タイガとティレクが席に着くと、操縦席側に座っていたティレクが小型船を発信させた。

「・・・ふう。ひやひやものだつたね。」

「まつたくだ。初の宇宙船旅行が台無しだぜ。」

「いや。旅行じゃないから。」

ティレクにツッコミをしてから『スレイニア』行きの宇宙船を窓越しで見ると、宇宙船のあちらこちらから煙が出ており、正直宇宙の塵となるのはほぼ確定的だった。

「・・・・・・・・・・・・」

「大丈夫だつて、タイガ。乗組員の連中だつて避難したはずだ。」「だといいんだけどね。」

宇宙船が宇宙の塵となつたのは、その後だつた。
乗組員たちの無事は、絶望的だつた・・・。

第5話「ぶらり遭難の果てに・・・」

広大な宇宙。

そこには、数え切れない数の星があり、惑星があり、命がある。
そして、その命の数だけ、喜びが存在する。

また、悲しみも・・・・・・・。

タイガたちは現在、『ワームホール・ドライブ空間穴転移移動』を使っての航行をしていた。
「ここのまま行くと、どこにつくの？ ティレク。」
「さあな。宇宙視点からしてみれば俺の知識や地理なんて1ミクロの点以下だろうし。正直、お前も知ってるだろう？ 宇宙に出たのは初めてだって。」

「まあね。」

今のタイガたちの乗っている小型船は、難破船当然。ある意味ぶらり旅なのだろうが・・・とにかく、ここのよつなぶらり旅は2人も望んじやしないだろう。

切実に救助、または適当な人の住んでいる惑星に着陸したい思いの2人だった。

「そろそろ『ドライブ・アウト転移移動解除』するぞ。」

「うん。」

『転移移動解除』して、再びもとの宇宙空間に出た小型船。

周りに惑星はあるが、明らかに人の手は入っていないような感じだつた。

「・・・ハズレ。」

「仕方ないからしばらく経つてからまた『空間転移移動』しようか。」

「

「だな。

『アーム・ベース』

『別空間』に入つての『空間転移移動』をせずに、普通に航行する

タイガたちの小型船。

惑星間を潜り抜けるように移動しながら、『空間転移移動』できるまで通常航行する。

と、そのとき。

バシュウウウウウン

突然、タイガたちの小型船から1000キロほど離れた場所に大型の船が現れた。

それは、タイガたちにも小型船に標準装備されているレーダーでわかつた。

「おッ！…船が突然でてきやがった。」

「その…・・・・さつき僕たちがしていた『空間転移移動』から『

転移移動解除』をつかつたからじゃないの？」

「あ、そつか。まあとにかくこれで…・・・。」

と、ティレクがいいかけたとき、突然通信が入つた。

通信相手は目の前の大型船だった。

「・・・・・はい。」

とりあえず、通信にでるタイガ。

「キミ達、どうしてこんなところにいるんだい？小型船でこんなと

ころに来るなん

て・・・。しかもその船、緊急用のシャトルじやないか。」

通信越しから聞こえる声は男性のものだつた。

「じ、実は僕たち、ちょっと事故にあつてしまいまして。」

「事故？」

「はい。それで、ここまでさまでよつてたんですけど……」「と、タイガ。

「…………わかつた。とにかく、そちらに船を出すからその船に従つて航行してくれ。」

「は、はい！」

そう言うと、通信は切れた。

「いやう。助かったなタイガ。」

「そうだね。これでたすかつたあ。」

そして、ものの数分後。男の人が言つていた船が…………というより戦闘機だつた。その戦闘機から通信が入る。

「はい。」

再び通信に出るタイガ。

「お待たせしてすいません。」

声は女性のものだつた。

どうやらさつきの男の人とは違つようだ。

「それでは、私についてきてください。」

「あ、はい。わかりました。」

そのタイガの声を聞くと、通信は切れた。

そして、言われるとおりにその戦闘機についていった。

また、これが始まりだつた。

壮大な冒険の幕開けの……。

第5話「ぶらり遭難の果て」・・・（後書き）

専門用語解説

ワームホール・ドライブ
空間穴転移移動

『空間転移移動』と書いてこの物語上では『ワームホール・ドライブ』と読む（長い＆複雑ですいません）。

宇宙空間とは別の空間を通りての長距離移動をする。この航行のメリットは、宇宙空間（通常空間）との干渉が特殊な方法以外では干渉されないとのこと。

デメリットは、『空間転移移動』する船の周りに星間物質（例としては小惑星、チリなど）があると使えないことと、一度『空間転移移動』から『転移移動解除』をすると、しばらく使えないという事。

また、『空間転移移動』はエンジンに大きな負荷をかけるのでずっと使うことはできず、船によって違うが小型船で最大10時間、大型船で1～2日程度である。

なお、速度の目安として10時間に1光年ほど移動が可能。

ドライブ・アウト
転移移動解除

『転移移動解除』と書いてこの物語上では『ドライブ・アウト』と読む。

『別空間』から通常空間へと移行すること。

『転移移動解除』は、周囲に星間物質があつてもつかうことが可能。また、ある程度なら星間物質にあたらないように転移場所の移動も可能。

ワーム・スペース
別空間

『空間転移移動』したときに移行する空間。

第6話～救助～

「ここから入ってください。」

タイガたちの小型船に田の前の戦闘機から通信が入った。戦闘機が出てきた大型船に、船の出入口が開いていた。入つてもいいということだらう。

「いいのかなあ、ティレク。」

「いまさら何言つてんだ、ダイガ。せっかく助けてやるつて相手が言つてるんだからここは話に乗るもんじょーよ。それともおまえはこの小型船で干乾びるまで乗つてゐつもりか?」

「それはさすがに・・・。」

「なら、ここはお言葉に甘えよ~ぜ、タイガ。」

「う、うん。」

ややしぶつていたタイガだが、たしかにティレクの言つどおり、干乾びるまで小型船に乗るのはごめんだと思い、大型船に入らせてもらうことにした。

「・・・・とこひでティレク。」

「ん? どうした?」

「キミは単にさつきの女の子に会いたいだけなんじゃないの?」

「・・・・・・・・・・・・・・。」

その問いかけに、ティレクはだんまりになる。

「図星?」

「つたりまえでしょーよー!! 世界中の女の子は俺のもの!! 世界中の女の子は俺様をまつてくれてるんだぜーーー!!」

ティレクの女好きっぷりには、7年以上行動を共にし続けているタイガでもついてはいけないものだつた。

「どうでもいいけど。あまり恥ずかしくなるような行動は慎んでよね。」

「俺がいつお前に恥じ欠かすような行動をしたんだよ。」
(ナンパの度に僕は恥ずかしいんだって。)

言葉に出すとどうなるかわからないので、あえて口には出さないタイガ。

そんな会話がなされている間に、小型船は大型船に無事収納された。

「ふいー。動けるつてすっばらし——ツ！！」

大型船に降りて開口一番、ティレクが放った言葉だった。
たしかに、タイガとティレクが宇宙船から脱出して約10時間以上。
2人はずっと席についてまったく動いてなかつた。

「うん、そうだね。正直ずっと座りっぱなしだったから尻が痛いよ。」

「そう言うとタイガは大きなあくびを1つする。
結構疲れが出てるようである。

「あの～・・・小型船に乗っていた人たちですよね。」

2人が会話していたときに、横から女性の声が割り込む。
女性はどうやらあの戦闘機に乗っていた人のようだつた。通信機越し
に聞こえていた声と同じである。

「あなたが、あの戦闘機に乗っていたのですか？」
と、タイガが尋ねてみる。

「はい、そうです。『コメット・カリバー』のパイロット、セルリ

ア・ハーベリアです。」

プラチナブロンドの髪で、パツと見た感じ16～17歳の少女、セルリア・ハーベリアがタイガの問いに答えた。

「やあ、ハニー。これから俺様とお茶し……」

早速ナンパをしようとしたティレクを鉄拳制裁をして黙らせるタイガ。

普段あまり力技で他人を黙らせようとしないタイガだが、相手は自分たちを助けてくれた恩人。いくらなんでもその恩人にいきなりナンパは失礼だと思ったのだろう。

制裁を受けた（この場合喰らつたといったほうが良いかもしない）ティレクはショックで気絶していた。

「あ、あの・・・。大丈夫なんでしょうか？」

と、ぱつたり地面にひれ伏しているティレクを指差して尋ねるセルリア。

「え、ああ大丈夫だよ。これくらいで大怪我するようなやわな鍛え方はしていないから、僕たちは。」

ハハハハハ・・・と最後に笑いながらタイガが言うと、セルリアはひとまず安心したようなため息をつく。

「あ、これから艦長にあつていていただくために私についてきてくださいますか？」

「へ？・・・・・ああ、うん。別にいいよ。」

「それではついてきてください。」

「うん。わかつたよ。・・・・・ティレクも寝てないで早く起きなよ。」

（・・・・・誰が寝かせたんだよ。誰が。）

タイガの言葉に素直になれないティレクだった。

第6話～救助～（後書き）

専門用語

コメット・カリバー
セルリアが乗っていた戦闘機の名前。

全長50メートル。全幅27メートル。全高25メートル。

『スペース・フォース』と呼ばれる戦闘機で、戦闘能力は、他の戦艦よりはかなり高いほうである。

また、『スペース・フォース』は誰でも乗れるわけではなく、適性がある者にしか乗ることが出来ない。

ちなみに現在『スペース・フォース』は3機確認されており、その3機ともタイガたちが救助された大型戦艦『ラグナエース』に収納されている。

スペース・フォース

宇宙各地から発見された高性能の戦闘機。

一般の軍が所有している戦闘機よりはるかに優れた戦闘能力を持っているが、誰でも乗れるわけではなく、適性があるものだけしか乗ることが出来ない。

現在発見されているのは3機で『コメット・カリバー』のほかにも2機発見されている。

ラグナエース

タイガたちを救助した大型戦艦。

『スペース・フォース』の母艦である。

第7話／艦長登場／

タイガたちは、自分たちの乗っていた小型船を誘導してくれた戦闘機のパイロット、『セルリア・ハーベリア』のあとについて行つている最中だった。

理由としては、艦長が呼ぶようにといわれているらしい。

大型戦艦『ラグナエース』の中は、外で見てわかつたとおりかなり大きく、かつ内部はやや複雑だった。

「…………ねえ、ハーベリアさん。」

「はい、なんでしょうか。」

「さつきから……というより、救助される前から思つていたんだけどこの船つて軍が所有している戦艦なの？」

「はい、そうですよ。でも、この戦艦の中は正直『戦艦』つて感じがしないんですけどね。」

と、セルリアがにこにこしながら言つた。

たしかに、たいていの人は『戦艦』と聞くと、内部は機械だらけでギッヂギチ、人の動けるスペースと言えば自分の座つている席範囲1メートルしかない……など、正直作者の勝手な想像かもしれないが、そんな感じがするものである。

だが、この戦艦内ははつきり言つて戦艦とは思えないほど広いかつゆつたりとしていた。

「カイルさん。連れてきました。」

タイガたちの連れて来られた部屋はこの戦艦の操作や、戦艦内の監視などを一手にまかなつてているブリッジだった。

「やあ、君たちがあの小型船に乗つていた人たちかい。」

「あ、はいそうです。この度は助けていただきありがとうございました。」

「いやあ。いいつてことよ。オレの名前はカイル・クロード。」

応、この『ラグナエース』の艦長であり、司令官だ。

「一応ではありますよ、カイルさん。」

セルリアにそう言わると「ハハハ・・・・。」と笑う艦長、カイル・

クロード。

「あ、ちなみに歳は21歳。」

「は、はあ。」

とりあえず頷いておくタイガ。

正直なところ、艦長であり司令官であるはずのカイルなのだが、威厳というものが全くとは言わないが、それに近いほどない。

「まあ、君たちは誰なのか。適当に自己紹介してもらえるかな?」
まずは親睦を深めようとしているのかカイルはタイガたちに自己紹介を頼んだ。

「えっと・・・僕はタイガ・ウナバラ。17歳です。流浪の剣士をしながら旅をしていました。」

「なるほど。タイガ・ウナバラくんか・・・。ところで、そこで寝ている人は誰だい?」

威厳ゼロの艦長さんが指差すところには鉄拳制裁で氣を失っているティレクがいた。

実はここまで来るまでの間、タイガが床に引きずりながら連れてきたのだ。

そのせいなのか、それもどどめになつてているようだ。まだに田を覚えます気配なしである。

「え~っと。この人はティレク・アーカイト。21歳。僕の親友です。」

「へえ~。じゃあ親友同士で今まで流浪の剣士をして旅をしてたんだ。」

「はい。」

ちなみにここで話しておぐと、タイガとティレクは7年間、旅をし続けているのだ。

「・・・・さて、それじゃあ自己紹介も済んだところで・・・」

あ、セルリアはちゃんと自己紹介したの？」「はい。」

「それじゃあ、他のメンバーは？」

「いいえ。私だけです。まっすぐここまで来ましたから。」

「そうか・・・じゃあ、あとで監にも一度顔合わせをせといてよ。」

「わかりました。」

そう言うとセルリアはブリッジから退室した。

「えつと何するんだっけ？・・・・・・ああ、そうだった！なん
でこのような辺境にさまよつてたか聞きたいんだ。教えてくれるか
な？」

「あ、はい。わかりました。」

その後、タイガはこれまでの経緯を説明した。

突然、自分たちの乗つていた宇宙船が攻撃されたことを・・・。

「なるほど。惑星『スレイミニア』行きの宇宙船に乗つてねえ・・・。
。それは災難だつたね。」

「はい。・・・・・・・・・。」

「まあ、そんなに氣を落とすこともないよ。きっと宇宙船に乗つて
た人たちは全員無事だつて。」

「そうだといいんですが・・・。」

タイガたちのさまよつていた理由を聞いてブリッジ内がやや重い空
気が漂う。

「・・・・・・・・さてツ！辛氣臭い話はこれで終わりツ！人生明る
くいこよー！」

(・・・・・この人、ティレクとそつくりだ。)

性格的に何かそう思つてしまふタイガ。

「まあ、それはそれとしてタイガ。これから行かないといけない場
所とかある？」

「え・・・、いいえありません。」

流浪の剣士ゆえ、別に目的地など存在しなかつた。

「それじゃあしばらくこの船で暮らさないかい？」

「え、ええッ！？で、でもこの船ハーベリアさんから聞いたんだけ

ど軍の船なんですね？あまり勝手なことをしちゃ・・・。」

「大丈夫だつて！オレの上司はちょっととした知り合いだから多少のことなら問題なしッ！なにより艦長であるオレの言ったことなんだよ？納得してくれるつて、絶対ッ！」

「で、でも・・・。」

「いいじゃないか、別に。朝晩3食ついていぬうえ自室もある。こんなにいいところで暮らせるんだよ。」

「よっしゃあ————ツ！—決定しようぜ、タイガツ！—。」

突然に復活したティレク。

そして、第一声がこれだった。

「だけどさ。」

「いいじゃないか。相手が厚意で住ませてやるつて言つてんだからのううぜ、ここはよ。」

「・・・・・・・わかつたよ。」

結果的にティレクに説得させられてしまうタイガ。

「よつし、けつてーいッ！！それじゃあ、セルリアに2人分の部屋を用意してもらつから、それまで艦内を自由に行動してもらつていよい。」

なんだかんだで、大型戦艦『ラグナエース』で住むようになったタイガとティレク。

この先の2人の行方は・・・。

第7話～艦長登場～（後書き）

今回はあとがきペースを使ってキャラクターの説明をしたいと思います。

タイガ・ウナバラ

年齢 17

性別 男

職業 剣士

一人称 僕

青髪の青年。

10歳のときより旅をする決意をして7年、親友のティレクと共に行動をしてい

る。
容姿は中性的。ボケつとした性格で旅をしてからまったく勉強をしていないため常識というものがあまりない。

お人よしで、正義感が強い性格。

ティレク・アーカイト

年齢 21

性別 男

職業 槍使い

一人称 僕

金髪の男。

年の割には若作りでパツと見た感じは17歳前後。
やや軽い性格で、きれいな女性にあつては時々ナンパをする。
だが、槍を操る能力は達人も舌を巻くほどの実力。

ちなみに勉強で社会と数学が得意で学校でも常に上位だった。

カイル・クロード

年齢 21

性別 男

職業 ラグナエース艦長＆司令官

一人称 オレ

黒髪で若くして艦長＆司令官となつた人物。

性格はティレクと同じでおちゃらけており、女性好き。

だが、いざ大事な局面に立てば冷静な判断でその場を解決する面もある。

いざというとき頼れる人物。

なお、セルリアの紹介はまた後ほどします。

第8話～艦内探索1　2人の女性～

「艦内を自由に動き回ってもいいって言われてもなあ・・・。」
と、ぼそりと言つタイガ。

この大型船で済むための手続きを終わらせたタイガとティレクは、ただ意味もなく船内をぶらついていた。

前にも述べたように、この船の内部は正直とても広い。
ちょっとした小型マンションとして経営できるんじゃないかと思えるくらいである。

・・・・・とは言え、艦内にある部屋全部が人が暮らせる部屋ではなく、24時間経営しているコンビニや、ちょっとした休息として使えるティーラウンジ、食事が出来る食堂、話し合ひの場として使えるピロティと呼ばれる場所や身体がなまらないよう身体を鍛えることが出来るトレーニングルームやのんびり散歩が出来る公園・・・・・などがあるため、住める部屋は結構少ない。ほとんどがひとつずの部屋を数人で使うようになっている。

「・・・・・ねえ、これからどうするティレ・・・・。

ティレクと呼ばうとしたとき、さつきまで隣にいたティレクが知らないうちに消えていた。

ちょうど通路の角を曲がったところから話声が聞こえていた。
ティレクの声も混じっている・・・。

(まさか・・・・)

いやな予感がしながらもタイガはティレクの親友としての責任を少し感じているので、こつそりと通路の角からのぞき見する。

「まあまあ、これから俺様と一緒にあつま~いひとときでも楽しもうぜ。」

「え、あ~でも・・・・。

「急にそんなこと言われたって・・・。

女2人をナンパするティレク。

ティレクの左手にはどこから用意したのかバラの花束が握られていた。

「そんなこと言わないでさあ、俺様この船に来たばかりで船のことよくわからないんだ。そして同じように、君たちのこともね。」

その台詞を言い終えた瞬間、ド「オツ！…とティレクの腹に強烈なパンチが繰り出される。（通称・鉄拳制裁）

「…………！」

突然のことに対応できなかつたティレクはその場に倒れこむ。

「すみませんね。うちの子が全く迷惑かけて……。」

まるで児の母親のような口調でその場を無理やりごまかそうとするタイガ。

通路の角から高速でティレクは前方に回りこみ、その勢いを殺さないままパンチをくりだした青年の口からはとても出せないようなものである。

2人の女性がその衝撃（ティレクのナンパ＆タイガの行動）に固まっている間に、タイガはティレクを荷物よろしく引きずつてその場を去つた。

「え～っと……ここがたしかピロティって場所か。」

ぶらぶらとして、行き着いた場所はピロティだつた。

大きく開けた場所で、大広間のような空間である。

このピロティを中心に12時方向、3時方向、6時方向、9時方向にそれぞれ通路があり、いわゆるこのピロティは、通路の分岐地点みたいなものだつた。

「あれ、人がいるみたいだよ、ティレク……………て。」

タイガのそばからティレクの姿がまたもや消えていた。

「やあ、お嬢さん。どうかこの俺様とベリーナイスな時間を楽しみましょ・・・・・グハアツ！…」

タイガが高速の鉄拳制裁をしようとしたところ、ティレクが大きく

蹴り飛ばされた。

蹴り飛ばした張本人は、ティレクがナンパしてた女性だった。

「なによあんた。あたしはそんなに簡単に落ちないのよ。」

「すぐに落ちただけだね。」

「だ、黙つててください！！」

蹴り飛ばした張本人はもう一人近くにいる女性にそう言った。

女性はオレンジ色の髪の色をしており、年齢はぱっと見た感じ16歳程度。

服装は女性の髪の毛の色と同じようにオレンジ色系統のものだった。そして近くにいたもう1人の女性は、髪の色が赤色で、女性の割にはあまり髪の毛を伸ばしておらずサッパリした髪型だった。

「す、すみません。」

その2人の前に初めから頭下がりっぱなしのタイガ。

「どうもこいつもティレクのせいである。」

「あんたがこいつのしつけ人？」

（しつけ人つて・・・。）

年齢的にはティレクのほうがお兄さんなのだが、精神年齢的にはタイガのほうが上なのかもしない。

「ねえ、どうなの？」

ややつめよるオレンジ髪の少女。

「どうつて言われても・・・・僕はティレクの親友だけど。」

「・・・・ん？ひょっとしてあんたたち、セルリアが言つてた人かい？」

ふと気づいたように赤髪の女性はタイガに尋ねた。ちなみにティレクは蹴り飛ばされた後、案の定氣絶していた。

「あ、はい。流浪剣士のタイガ・ウナバラです。そして、あそこでのびてるのがティレク・アーカイト。ナンパ癖をどうにかしてほしいと切実に思つている僕の親友です。」

「なんだ。あんたたちだったのか。この船で見かけないやつかと思つたら・・・・。」

そう言つと、オレンジ髪の少女は少し間を置くと・・・

「まあ今回のことは多めに見てあげるわ。」

「は、はい。ありがとうございます。えへっと・・・。」

「ん？・・・・・ああ、あたしの名前？あたしは//ハーディュ・オーラント。よろしく。」

「じゃあ、アタシも自己紹介したほうがいいかねえ。アタシはシャープ・エージェンシー。よろしく、タイガ。」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願ひします。」

そう言つとタイガは一礼をする。

「へえ～。あの変態と違つて真面目やうねえ～。」

「え・・・あ、ありがとうござります。」

たしかに真面目なタイガなのだが、学力的に言えば跳り飛ばされてのびてゐる変態男のほうが圧倒的に上である。

真面目＝学力上といふわけではなさそうだ。

「ところでアンタたちは何やつてたのさ。」

と、シャープ。

「実は、この船の中を散策していたといこますか・・・その・・・。」

「ああ、なるほど。広すぎでどこがどこだがわからないんだね。」「え、あ、はい。そうです。よくわかりましたね。」

シャープの鋭い洞察力に感心するタイガ。

「まあ、この船は広いからねえ。わからないのも無理ないさ。」

「じゃあシャープさん、こいつおしょりよ。あたしたちがこいつらに船の説明をするつて言つのは。」

「いいねえ。ちょうど暇だつたし、あんたらがよかつたらアタシらが艦内を説明してあげるよ。」

「いいんですか？」

「オーケー、オーケー。そうと決まれば着せ急げつて言つし早速出

発しました。」

「はい、わかりました。」

タイガはそう言つと、のびてるティレクを引きずつて2人に艦内の説明をもらつことにした。

第8話～艦内探索1　2人の女性～（後書き）

キャラクター紹介

ミラージュ・オーラント

年齢 16

性別 女

職業 スペース・フォースパイロット

一人称 あたし

オレンジ色の髪の少女。

負けず嫌いで男勝りな性格。

だが、人情に厚く他人に優しいのだがほめられるのが苦手。格闘術が好き。

シャープ・エージェンシー

年齢 20

性別 女

職業 スペース・フォースパイロット

一人称 アタシ

赤髪でさつぱりした髪型の女性。

髪型と同様性格もサッパリしており、行動が結構豪快なものが多いがちゃんとした考えがあるものがほとんどなので他人にほとんど害はない。

戦術も豪快。

武器全般を扱うことができ、趣味は武器磨き。
一番扱いに長けている武器は剣。

セルリア・ハーベリア

年齢 16

性別 女

職業 スペース・フォースパイロット

一人称 私

礼儀正しい白金髪の少女。
細かいことに気がよく利き、模範的な優等生。

第9話／艦内探索2 格納庫

「『こ』が格納庫。船や戦闘機を収納する場所よ。」
と、ミラージュが現在いる場所の説明をする。

タイガたちが、初めてこの『ラグナエース』に入った場所だった。

「ねえ、あの機体は何？」

そう言つたタイガの視線の先にはセルリアが乗つっていた戦闘機があつた。

「なんか、救助されるときからずっと気になつてたんだけど・・・。

「ああ、あれは『スペース・フォース』って言つ戦闘機だよ。」
タイガの質問にシャープが答えた。シャープはこの手の質問が結構得意だつたりする。

「『スペース・フォース』って、何なの？」

「『スペース・フォース』ってのは、宇宙各地に散らばつていた大型の戦闘機のことだよ。大型の割には小回りが利くし、速度も出て軍が所有している戦闘機よりも圧倒的に高性能なんだけど適性のある人間にしか乗れないのがデメリットだね。」

「なんで宇宙各地に散らばつてたの？」

「さあねえ・・・。『超高度先史文明時代』の遺産だつてことくらいしかわかつてないねえ。」

「それじゃあ、その『超高度先史文明時代』って何なの？」

再びタイガが質問をする。

「・・・あんたどこまで無知なの？」

「し、仕方ないじゃない！僕は10歳くらいのころから旅をしてて・・・。
成績も並以下・・・。」

最後の言葉が小さくなりながらそう答えるタイガ。

ちなみにタイガ、最初はミラージュたちのことを「さん」付けと敬語で話していたのだが、2人曰く「かたつ苦しい言い方はなしで！」

と言われたので、いつもどおりの口調で話す」と云ひはじめた。

「と、とにかくその言葉の意味教えてよッ！」

「よつしやあッ！－その質問には俺様が答えてあげましょーぞッ！」

「うわ。二つの間に復活したの・・・。」

いきなり復活していきなり会話に割り込んだティレク。
そのティレクに『ミラージュ』は少しだじろぐ。

「『超高度先史文明』のことだったな、タイガくん！－

「話の内容も氣絶してたのにわかつてるし・・・。」

実は氣絶していたふりをしていただけではないか？と疑問に思つてしまつシャープ。

「まあ、こんなやつだから氣にしないでよ。」

とりあえず忠告しておくタイガ。

復活したのに完全無視なティレクである。

「おこ！こり、タイガッ！－超高度以下略の説明してほしいんじゃねーのかヨロッ！！」

「え？ああ、うん。そうだよ。」

「それじゃあ、説明するぜ。『超高度先史文明時代』とは、現在の文明が発達するより前に栄えていた時代のことだ。学者たちに言わせると、今より文明が栄えていたらしくてその『スペース・フォース』・・・だけ？その戦闘機がその学者たちの意見が正しいことを証明しているらしいぜ。」

「あれ？ティレクって『スペース・フォース』のこと知つてたの？」
「名前だけな。実物とかは全く知らなかつたけど・・・。とにかく、説明は以上だ。」

ティレクの説明を聞いて、『ミラージュ』とシャープは驚いたような表情でティレクを見る。

「・・・・・なに？」

「いや、あんたがそんなに博学だつたなんて・・・・・と思つて。」「ちょっとどころか、かなり意外だね。」

「・・・・・ひどい言われようだ、俺様。」

「

これも普段の行いというものだろう。自業自得である、ティレク。「じゃあアタシが3機の『スペース・フォース』について、説明してあげるよ。」

シャープはそう言つと、近くにあつたコンソールを触つて、コンソールに標準装備されているモニターに『スペース・フォース』の画像を表示させた。

最初に映し出されたのはセルリアが乗つっていた黄色の横ラインが入つた戦闘機だつた。

「まずは、この機体。アンタたちを助けたセルリアの『スペース・フォース』である『コメット・カリバー』。性能のバランスは3機の中でナンバー1で、武装は中距離ビーム砲、レーザーファランクス、小型ミサイル。」

セルリアの戦闘機の説明を終えると、次は別の戦闘機の画像が映し出された。

戦闘機の形はさきほど戦闘機とあまり変わらないのだが、武装が大きく変更されているものだつた。

また、セルリアの機体と同じく今度はオレンジ色の横ラインがアクセントとして入つていた。

「これはミラージュの『スペース・フォース』である『アタック・セイバー』。近距離戦が得意な『スペース・フォース』だ。性能としては『スペース・フォース』の中でもっとも小回りが利き、敵からの攻撃をかわしやすい上に、スピードもトップ。ただ、装甲が他のに比べると弱いから耐久力は低いねえ。武装は近距離ミサイル、バルカン砲、小形ビーム砲。」

言い終えると再びコンソールをいじり、別の『スペース・フォース』が映し出された。

これも、基本的な形は同じなのだが、武装が大幅に変更されていた。「これがアタシの『スペース・フォース』である『クレイジー・スコーピオン』さ。性能は重装備なためスピードは遅く、旋回性能もやや劣る。が、その分は攻撃でカバーするのがアタシの機体さ。」

攻撃は最大の防御ってね。武装は、レーザーファランクス、中距離ミサイル、電磁砲、粒子砲、大口径ビーム砲。

最後の『スペースフォース』の説明が終わると「こんなもんでいいか?』と、シャープが言った。

「うん。けつこうわかつたよ。ありがとう。」

説明してくれたお礼を言うタイガ。

「そういえば、班長たちがいないわね。」

「ん? そう言われてみればそうだねえ。休憩かねえ。」

「班長つて?」

と、タイガが尋ねる。

「ああ、作業中はここにいるはずなんだけど・・・・まあ、後日会えるや。」

「まあ、ここでの説明はこれくらいだから次行くわよ。」

そう言つたミラージュが先導して次の場所へ向かうタイガたちであった。

第9話～艦内探索2 格納庫～（後書き）

専門用語解説

超高度先史文明時代

かつて大昔に栄えていた超文明時代のこと。

現在の文明よりも栄えていたと今まで言っていたのだが、『スペース・フォース』の発見により、その仮説が証明された。

アタック・セイバー

ミラージュがパイロットの『スペース・フォース』。

全長40'5メートル

全幅32'7メートル

全高20メートル

近距離戦が得意な機体。

クレイジー・スコーピオン

シャープが操る『スペース・フォース』。

全長65メートル

全幅35'2メートル

全高23メートル

重武装で近距離～遠距離が得意な万能型だが、動きがやや緩慢なため敵の攻撃はよけにくい。

「「」」がティーラウンジ。まあ、簡単に言えばみんな集まってわいわいがやがやするみたいな感じかな。」

卷之三

ティーラウンジの内部はさしづめ気品のいい喫茶店のようであつた。暇な乗員が暇つぶしにとばかり集まつてゐる場所である。

…………あれ？アイツかしたしみたしたねえ

レーベンハーゲンの「アーティストのための美術学校」

シャープの言つていいた「あいつ」の正体はものの数秒考えるとすぐわかつた。ティレクである。

しかもそのティレクが自分たちのいる場所から約3メートルほど離れて立つ。

!

ティレクの女性の口説き台詞が終わつた瞬間、タイガの・・・・ではなくミラージュの制裁跳び蹴りが発動し、ティレクを大きくぶつ飛ばした。

役目となつていた。

なあ、にナンバしてんのよ。この不良変態色魔男ッ！！」

その言葉を聞いたミラージュ。

瞬間的に頭の中の切れてはいけないような血管が怒りのあまり切れ、もう我慢や忍耐といった地層を突き破り爆発寸前・・・・・

と言つかるでに爆発した。

ティレクにそれはもうプロの格闘選手も舌を巻くほどの高速のジャブを機械的かつ事務的に連打していく。

[REDACTED]

女性が出す攻撃とは思えないほどの猛攻撃かつ突然の奇襲に攻撃の対応が遅れ、もはやサンドバック状態のティレク。

そして間もなくして

今日はこれからして貢弁しておけるれ
あたしもがれりし

そう言ったミラージュの近くには、ボロ雑巾と化したティレケの姿があった。息はかるべじてあるようだが音が「ヒュー、ヒュー。」と結構危険な状態。

「さて、ハーディの機嫌も復活したみたいだし次行ってみよ」

そして、次の場所へと向かおうとするシャープたちにタイガはボロ

新刊書記
一徳の力

「さて、ここが医務室よ。ちょうど怪我人もいるし、この部屋もついでに説明するわよ。」

怪我人を出した張本人がそう言うと医務室の自動ドアを開ける。

「おや、ミニーさんに、シャーリーさん、それと……」
医務室の中には1人の男性がいた。

白衣を着ているところから見ると、どうやら医務室にいる医者のようだ。

「あ、僕の名前はタイガ・ウナバラです。それと、これが僕の親友のティレク・アーカイトです。」

タイガはボロ^{ティレク}雑巾をその医者に見せた。

「おやおやはこれはこれは……。さてま//ハーディュさん、あなたの仕業ですね。」

「まあ、まあね。」

その医者から視線をそらしながら言つた。「ハーディュ。

「あ、そうだ。先に自己紹介をしておきませんとね。わたしはこの医務室で医者をしてじるゴルドー・D・ゼクターと申します。」

低く、落ち着いた声で自分の自己紹介をする医者ゴルドー。

「さて、早速その方の怪我を治しませんとね。」

そう言つとゴルドーはティレクが負つてじる怪我の部分に手の平を添える。

すると、手の平が光り出し、見る見るつむにティレクの傷を癒していった。

「す、すごい。ゴルドーさん、さつきのは魔術ですか？」

「はい、魔術です。わたしがれっきとした魔術師ですからね。とはい、わたしは攻撃系の魔術は使えませんけど。……はい、治りました。」

光が止むと、そこには傷ひとつ無くなっていた。

「ありがとうございました。」

「いえいえ、これがわたしの仕事ですからね。」

「じゃあ、変態の怪我が治つたところで次行くわよ、次。ミラージュから受けたティレクの怪我を治すと、タイガたちは次へと向かった。

第10話～艦内探索3 ティーラウンジ&医務室～（後書き）

ゴルドー・D・ゼクター

年齢 30

性別 男

職業 医者

一人称 わたし

『ラグナエース』の医務室で医者を務めている人物。

白色の髪は生まれつきで、比較的落ち着いて、温厚な性格。
常にニコニコしており、よほどの事態がない限り笑顔を絶やすことはない。

また、魔術師の家系で育つたので魔術は使えるが、攻撃系の魔術は使えず、治癒系の魔術だけである。

第11話／7年ぶりの再会

「…………ふう、一応一通り艦内を説明したわよ。」

ミラージュはそう言ひつと紅茶を一服した。

現在タイガたちはピロティにいる。

医務室に行つた後タイガたちは、コンビニ、食堂、トレーニングルーム、公園に行って、そのあとまたタイガたちとミラージュたちが最初に出会つたピロティへと戻つたのである。

ティーラウンジでもよかつたと言えばよかつたのだが、ミラージュの殺戮ショー（ティレクをハメ殴り）の傷跡がまだ残つていたのでピロティとなつたのだ。

「やっぱり改めて考えてみるとこの艦内って広いな。」

目の前の机に並べられた菓子をつまみながら言つたティレク。

「まあねえ。なにせこの『ラグナエース』も実は『超高度先史文明時代』の遺産なんだから。」

「へえ～。そうなんだ。」

と、誇らしげに言つシャープに頷くタイガ。

「この発見されたばかりの『ラグナエース』の中には『コメット・カリバー』があつたのさ。」

「『コメット・カリバー』…………ああ、ハーベ

リアさんの乗つてた戦闘機か。」

「まあね。だから『ラグナエース』は、もしかしたら『スペース・フォース』の母艦専用に造られたんじゃないかつて学者たちが言つてるんだよ。まあアタシも、その仮説はあつてるんじゃないかつて思つてるんだけどね。」

「へえ～。」

「ていうかあんた、タイガだっけ？」

「え、うん。」

不意にミラージュがタイガに話しかける。

「あんたセルリアの」と『ハーベリアさん』って言つたでしょ。」

「え・・・あ、うん。」

「IJの船ではよそよそしい態度は厳禁よ。あたしたちのことを名前で言つてるんだからセルリアのこともちゃんと名前で言つなれ。」「う、うん。わかつたよ。」

タイガは『リラージュ』の忠告に頷いた。

「あれ? そういえばセルリアはどうだい?」

「あ。ハーベ・・・・・・セルリアなら僕たちの部屋を用意するためにどこか行つたようですが。」

また『ハーベリアさん』と言つかけたタイガだが、今度はちやんと名前で言つてみせた。

「あの子は眞面目だからねえ。アンタと同じで。」

「ま、まあたしかに。第一印象は僕もそう思ひますけど・・・。」

「それがあの子のいいところで、悪いところだね。」

「あの、シャープ。眞面目が悪いところなの?」

「うへん。それはちょっと難しいねえ。アタシはどうちでもあるつて思つてゐし。」

どつちもあるとせ、良いでも悪いでもと言つ意味だらつ。

「でも時にその眞面目つてやつを断ち切らないとやりきれないことがあるんだよ。」

「・・・・・・?」

「まあ、あんたはまだ若いからね。じきにわかるわ。」

そう言つとお菓子をつまむシャープ。と、そんなところに

「お、シャープ! 『リラージュ』じゃねえか。・・・・・ん、それでいる2人は誰だ?」

3時方向の通路から人がやつてきた。

「お、格納庫の整備員じゃないか。休憩か?」

「まあな。そろそろ休憩も終わりだけど。」

「ちょうどここ。IJの子たちに自己紹介してやりなよ。さつき格納

庫へ行つたんだけど人がいなくてさ。」

「…………ああ、なるほど。おれが體の言ひたやつ

卷之三

整備員はティレクと目が合うと少し何かを考え始める。ティレクも
だつた。

アア-----シシ-----お

不意に大声で叫ぶ整備員。

「うへー」とせやつぱつおもえスパルかッ!」

「スバルつてまさか・・・・・ヴァルゲール会社の？」
タイガもわかつたらしい。

「知り合い、あんたたち？」

「うん。スピル・ヴァルギール、序曲をまたにかけるヴァルギール

会社の息子だよ。」

「じゃあ、おまえはタイガか？」
「うう。ノーブル君。

整備員・・・・スピルの問い合わせにタイガが答えた。

「うわー、久しぶりだな、おいッ！！7年だっけか？会つてないの

七八四

• • • • •

「あ！ヤバッ！！俺もう行かなきやなんねえッ！！じやあな、タイガ、ティレク！！」

ガ、
ティレク！！

アラーム音が鳴るとスピルは走つて格納庫へと向かつた。

「・・・・なんであいつがいるんだ?」

「さあ。」

不思議がる2人。

「スピルは2年ほど前からこの『ラグナエース』に入ってきたんだよ。それにしても、アンタたちが知り合いだつたとはねえ。」

「まあね。ただ、スピルの家の事情でなかなか会える日が少なかつたんだけど。」

そう行つたタイガは、7年ぶりにティレク以外の知り合いと会えた

せいか、どこかうれしそうだった。

第11話～7年ぶりの再会～（後書き）

キャラクター紹介

スピル・ヴァルゲール

年齢 18

性別 男

職業 船の整備員

エメラルドブルーの髪をした青年。

大企業ヴァルゲール会社の社長の息子で、タイガとティレクの親友。家の事情により、なかなか2人に会うどころか外に出ることも許されなかつたが、家の人々の目を盗んでは勝手に外に出て2人と遊んでいた。

そんな家がうつとおしくなり家の邪魔が入らない場所を就職場所を選んで軍に入隊。やがて船の整備員になる。

格闘や剣術が得意で、よくタイガとティレクと一緒に稽古をしていた。

性格は軽いがティレクのようにナンパはしない。また、仕事はちゃんと真面目にする人物である。

第1-2話「襲撃」

「ふう〜。疲れたあ〜。」

タイガはどさつとソファーに座り込んだ。

現在、タイガはセルリアが用意した部屋にいる。7年ぶりに友人と再会した後、セルリアがやってきて部屋が用意できたことを知らせに来たのだ。

用意してくれた部屋は、4・5人ほど座れるソファーが1セツト。それにベッドや洗面器、風呂もあった。

そのほかにも住むために必要なものはほとんど揃つており、「他に必要なものがあるのでしたら、コンビニで買ってください。」とセルリアが言つていたが、買い足す必要は特にない。

あえて言つのなら、洗面器に用意されている歯ブラシや、歯磨き粉、石鹼や、風呂にあるシャンプーやリンスといったものがけつこう小さのことである。

歯磨き粉も石鹼もそつぱくは持たないだらう。ちなみにタイガとティレクはそれぞれ別々の部屋が用意されていた。

「・・・・・・・・これからどうなるんだる。」

ソファーに座つたまま考え込むタイガ。

なんだかんだ言つても、スレイミア行きの船が襲撃されたことを忘れてはいない。

他の乗客は逃げ切つたのだろうか、乗務員は脱出できたのだろうか。

・・・・そんなことを考えると、自分たちのおかれている状況ははつきり言つてとても良いほうで、こんなことをしていいのだろうか、とか考えてしまつ。

「・・・・・・・・。」

しばらく黙りこくつて考えるタイガ。

じつとしているといふることを考えてしまつ・・・・・・。
(とにかく、ブリッジに行ってみようかな。)

そう思つとタイガは自室を出た。

ブリッジに行く理由は特にない。ただ、じつとしているところ落ち着かないからだ。

タイガがブリッジへ行こうとしたそのとき

ドゴォオオオオオオオンッ

何かがぶつかつたような音と共に、艦内が大きく揺れ出した。

「な、なんだッ！？」

さつきまでブリッジに行つても話題のなかつたタイガだが、さすがに何が起きたのか気になつてブリッジに向かつて急いで行つた。

「失礼しますッ！」

「ん？ タイガか。」

「艦長、さつきの揺れは？」

「カイルでいいよ。まあ今はおいといて、揺れのことかい？ 現在解析中だから、なんともいえないね。」

「そうですか・・・。」

だが、ただ事ではないと思つてゐるのかどこか緊迫したような雰囲気を漂わせていた。

「クロード指令ッ！」

『ラグナエース』のオペレーターがカイルを呼んだ。そうとつあせつてゐるようになつこえた。

「どうした？」

「格納庫に小型船が激突し、こからドリルで穴を開けたみたいですね！」

「なんだつてッ！ 侵入する気かッ！！」

大型モニターに映し出されていた格納庫には、すでにドリルの先端

が見えていた。

そして、ある程度ドリルが格納庫に入ると先端がドアのよつに開いた。

「あッ！ドリルの先端がドアになつていて、そこから・・・・・魔物がツ！！」

「魔物だとツ！？くそ、中からこの船を落とす氣かツ！！戦闘員を向かわせろツ！！なんとしてでもこの船を守り抜くんだツ！！」

「わかりました！」

オペレーターは、大急ぎで艦内中に放送を流す。

「タイガは安全な場所に隠れててくれ。」

カイルの言葉に少し考えるタイガ。

せめてこの船の人たちのために・・・・・。

「艦長・・・いや、カイルさんツ！僕も剣士です、だから・・・・・僕も戦いますツ！！」

「タイガ・・・・。」

少し意外だったのか考えるそぶりを見せるカイル。そして・・・・・。

「わかった。実を言うとこの船にいる戦闘員は実戦経験がほとんどないんだ。少しでも実戦経験のある人がいてくれると心強い。」

そして、

「タイガ・ウナバラ。この艦内に侵入した魔物たちを片付けてくれツ！」

「はいツ！！」

第13話～艦内戦闘～

タイガは、現在格納庫へ向けてとにかく全速疾走していた。走るのはタイガの専売特許である。

この船は全5階層になつており、一番上段が第1階層で一番下が第5階層だつた。

ブリッジはその中で第1階層にあり、格納庫は第5階層にあつたので、走つても結構な時間がかかる。

ちなみにタイガたちの部屋は第2階層だ。

「あツ！！」

第4階層目に移ろうとしたとき、ようやくタイガは進入してきた魔物の姿を見ることが出来た。

全身鎧で中身がわからないほどの大重装備をした魔物だつた。

「リビングアーマーか・・・。」

リビングアーマーとは、全身を鎧でまとつており、その上で剣や斧といった武器を装備している魔物で、中身はない。かわりに、鎧の中に紋様がありそれを破壊する事でこの魔物は倒せるのだが、正直表面から見てもその紋様はどこに書かれているのかわからず、ほとんどマグレ勝負だつた。

幸い相手は1体のみだつた。他にもいるだらうが他の場所に散らばつてゐるらしくここにはいない。

タイガは腰にぶら下げてゐる鞘から剣を抜いてかまえた。

（一度鎧をばらばらにしてから紋様を探すか・・・。）

そう思つたタイガにリビングアーマーが自分の得物である剣を大きく振り下ろした。

（思つたより動きが緩慢だ、簡単にかわせる！）

攻撃をかわしたリビングアーマーの背後に回るタイガ。

「はあツツ！！」

大きく剣を腹部付近に横殴りに振るつ。

ガシャアツと音と共にリビングアーマーはバラバラになる。

今のうちにとばかりタイガは紋様を探すが突然武器を持つたままリビングアーマーの右手がタイガに襲い掛かってくる。

「なッ！…」

瞬時に剣で受け止めるが、そのままタイガは弾かれてしまつ。

「つ・・・。」

そのまま壁に激突したタイガは少しよろめきながら立ち上がる。外傷は無いようだつた。

だがさつきのことでの紋様を探す暇はないと言つたタイガ。じつくり紋様を探してたら攻撃されてしまつ。

（だつたら僕の長年の勘で勝負するしかない。）

そう思うとタイガは急に田にもとまらぬ俊足で敵に近づく。
「幻影突ッ！」

その俊足を維持したままタイガは背後に回り人間で言つ心臓部分に突き攻撃を放つ。

すると、それが当たりだつたのかリビングアーマーはピクリとも動かなくなり、やがて砂となつて消えていった。

「ふう。」

ほつと一息ついて座り込んだそのとき、背後に殺氣のような気配を感じ取つたタイガ。

「しまッ・・・。」

殺氣の正体は別のリビングアーマーだつた。しかもすでに武器を振り上げており、確実にタイガに向けて振り下ろすことがわかる。（やられるッ！…）

一撃喰らうこと覚悟するタイガ。だが・・・

パンパンパンッと、銃の音が響き渡つたかと思うと、リビングアーマーは先ほどのものと同じように砂となつて消えていた。

「・・・・・・・？」

唐突だつたため、何が起こつたかわからないタイガ。

「なかなかの剣術だけど、最後の最後まで氣を抜くんじゃないよ。」

「シ、シャープ・・・」

銃を放つたのはシャープだった。

シャープはリビングアーマーを倒すと拳銃を右腰に引っ提げた。

左腰側には剣がぶら下がっていた。

「よお、タイガ。アンタもやつぱり戦つんだねえ。」

「あんたもつて?」

「さつきティレクのやつが『もつすぐタイガがくるはずだからおまえさんは待つてやつとこしてくれ。』て言われたんでね。待つていたのサ。」

「いつからそこにいたの?」

「あんたが1体目のリビングアーマーと戦っていたときからずっと。少しばかり見物させてもらつたよ。さすがは7年間流浪剣士をやつてることがある。が、ほつとして敵に背を見せるのはどうかと思つよ。」

褒めたかと思うと喝を入れるシャープ。

正直、厳しい・・・・・・。

「まあ、それはおいといて急いで格納庫へ行くよ。この辺の敵は全滅させといたから。」

「うん。わかったよ。」

そう言つシャープに、タイガは再び全力疾走で追いかけるのだった。

第13話～艦内戦闘～（後書き）

技紹介

幻影突げんえいつい

神速で相手の死角に入り、瞬時に突きを放つ技。

第14話 Space force is stolen

「くそッ。」

「おらおらあッ！…ゼンゼン攻撃があたつてねえぞ！」

ティレクは現在、小型船を操っていたパイロットかつ、魔物たちを操っている張本人と対峙していた。

茶髪の長髪で白いハチマキを頭に巻いている男性……もとい女性だった。

言葉遣いが男性（それも不良っぽいと言つか荒い性格の人）に似ているので声だけを聞くと男性にしか聞こえない。声の高さは別としてだが・・・。

その女性にティレクは悪戦苦闘していた。

「しんくうしょうげきは 真空衝撃波ッ！！」

ティレクは一度剣を鞘に収め、一気に鞘から剣を抜くと衝撃波がその女性めがけて一直線に飛んでいく。

「動きが直線的過ぎるってのッ！…！」

女性は放たれた衝撃波をたやすくかわした。

「おれも暇じやねえんだ。用をとつとと済ませたらトンズラさせてもらうぜ。」

「その用つてのはなんだ？」

「まあ、単刀直入に言わせてもらうとあそこにある『スペース・フォース』とやらを1機もらしてきたんだ。本当は3機とももらいたいんだが、お前みたいに邪魔なやつがいるからな。」

「お邪魔虫で俺様は大いに結構だけど・・・・・なッ！」

ティレクは言葉を言い終えると同時に一気に最高速度まで走る速さを上げ、その女性に一太刀あびせようとする。

「烈空破ッ！！」

「ふ。」

渾身の一撃をその女性は瞬時にかわした。

「なッ・・・・・。」

かわされると思つていなかつたのか、ティレクは一瞬無防備になる。
その隙を見逃す氣はない女性。

女性の武器である短剣を取り出し、そして・・・

「斬影突牙劍ツ！」

ティレクを真正面から斬り下ろし攻撃を喰らわせると、瞬時に背後に回り突き攻撃を喰らわし、とどめに斬り上げ攻撃をする。

「い・・・つう・・・・・。」

ティレクは斬り上げで空中に浮かされた身体を重力に逆らうことなく床に向かつて激突、そしてそのまま動かなくなつた。だが、斬られたはずなのにどこにも斬り傷は無かつた。

「みねうち・・・・・と言つたが、この短剣、刃を磨いてねーんだよなあ。」

氣絶しているティレクに向かつてつぶやくようになつた女性。たしかに、その女性の持つている短剣には刃がついてなかつた。どうにも斬り傷がつかないわけである。

が、人を氣絶させるくらいは出来るようである。

「よし、これで通路の敵は全滅したはず。」

現在タイガとシャープとミラージュは第5階層。ミラージュは途中で合流していた。

通路には当事者シャープが言つてたように魔物はいなかつた。

「よし、いそゞ・・・・。」

急いで、と言おうとしたタイガだが言葉が止まる。

「どうしたのよ、あんた？」

「・・・なんか、起動音が聞こえない。」

と、タイガが言うのでシャープは耳を澄ませる。

「・・・・・たしかにするね。この音は・・・まさかツ。」

シャープは、きなり格納庫を目標として猛スピードで走つていぐ。

「ど、どうしたんですか、シャープさん。」

ミラージュは疲れているのかふらふらとながら格納庫へと向かおうとする。

タイガはと、シャープと一緒に全力疾走で駆けていった。

「しまつたッ！！」

シャープが目にした光景は小型船が『スペース・フォース』、それも『メット・カリバー』をワイヤーでつなげて逃げようとしているところだった。

「あせるかッ！！」

シャープがワイヤーめがけて銃をぶつ放そうとしたが・・・（しまつたッ。さっきの戦闘で銃弾がゼロ・・・・。）

思わず自分のおなかに白くなつて燃え広げるシャープ。たしづめ、明日の。ーのとあるワンシーンのよつである。

「そここの姉さん。『スペース・フォース』とやらは、いただいていくぜッ！！」

そう言葉を残していくとその女性は追突させた小型船に乗つて、『メット・カリバー』を盗んでいった。

「シ、シャープさん・・・・も、燃え広げてる。」

シャープからは、「燃え尽きたよ、真っ白にな・・・。」と、言葉をぶつぶつぶやいていた。

「ふう・・・・やつと追いついた。」

後から来たミラージュ。そこでタイガはひとつのことに気がつく。

「あれ？ そう言えばセルリアは？」

そのタイガの一言に、ミラージュはついえはッ！－て感じの表情になるのだった。

第14話～Space force is stolen～（後書き）

技紹介

真空衝撃波

一度剣を鞘に収め、一気に鞘から剣を抜くと同時に衝撃波を発生させる技。

烈空破

剣の刃に『氣』をまとわせ、通常以上の威力で剣の斬撃で攻撃する技。

斬影突牙劍

最初敵を真正面から斬り下ろし攻撃を喰らわせ、瞬時に死角に回り突き攻撃を喰らわし、とどめに斬り上げ攻撃をする技。

第15話／セルリア奪還戦1

「正直、とてもたいへんなことになつたな。」
それが艦長カイルから発せられた一言だつた。

現在タイガたちはブリッジにいる。

カイルが言った「たいへんなこと」とはセルリアのことだ。
盗賊と思われる女性が『ラグナエース』から去つた後、タイガたちはセルリアを探したが、どこにも見つからなかつた。

ブリッジに装備されているレーダーを使っても見つからない。

そうくると、導き出せる結論はただひとつ・・・。

「セルリアがあの盗賊に誘拐されたってわけかい。」
燃え尽き状態から復活していたシャープ。

「だけど、なんでセルリアが誘拐されるのよ。」

「たしかに。俺様がやつから聞いたのは『スペース・フォース』を
盗む、くらいしかあの女から聞いてねーよ。」

「・・・・・まさか。」

ティレクのその言葉で、タイガがわかつたように言った。

「なんなの、タイガ。あんた何かわかつたんでしょー。」

「え、うん。あくまで仮説だけね。」

「今はそれでもいいよ。話してくれないかな?」

と、カイル。

「うん。まあさつきも言ったように仮説なんだけど、セルリアがそ
の・・・盗まれた『スペース・フォース』の中に入つていていたとした
ら。たしかあの『コメット・カリバー』ってセルリアがパイロット
なんでしょう?」

「なるほど。一理あるかもね・・・。

と、シャープ。

「それが正解だとして、問題は場所なんだけど・・・。」

「ああ、場所なら大体わかるよ。」

「本当にですか、艦長！」

「ああ、『スペース・フォース』には識別コードがあるから、それを追つていけば場所はわかると思うよ。現在、ブリッジのオペレーターに頼んでるんだけど……どう？ 調子は？」

カイルはオペレーターに現在の調子を確かめる。

「今はまだわかりません。結構の速さで逃走しましたから……。」「ううか……。」

オペレーターからの返答を聞くと再びタイガたちに振り返った。

「まあ、そういうわけだから君たちはゆっくりとしてよ。」「ゆっくりしとけって……だつて、セルリアが……！」

「ちょいまち、ミラージュ！」

食つてかかるミラージュをシャープがためよつとする。

「セルリアのことは心配だけど、ワーワーアタシらが言つたところで事態は変わらないだろ。少し冷静になつたほうが多い。」「…………はい、すみません。」

理解したのかミラージュは食つてかかるそぶりをやめた。

どつむミラージュは、シャープにだけ敬語を使つようである。

「わあわあーー！ シャープの言葉を納得してくれたと言つことで解散。各自休養をとるよ。」「

カイルがそう言つので、タイガたちもひとまずブリッジを出た。

「…………わあ、艦長殿が言つてたよつてアタシらは休養とするよ！」

シャープはそう言つと、ブリッジのドア前から解散した。

（休養とれつて言われてもなあ……。仲間が誘拐されたと言

うるさい、そんな音楽はやめなこ。

第16話／セルリア奪還戦2 傭兵ジークフリート／

タイガたちが、『スペース・フォース』の識別コードで盗まれた機体を探しているころ、盗賊の女性は正直なところ、困っていた。現在、盗賊の女性は渓谷にできた洞窟にいた。

(・・・やべ。とんだアクシデントだぜ。)

と、つい思ってしまう盗賊の女性。

『スペース・フォース』を盗んだのは良かつたが、なんとその中に人が入っていたのだ。

さすがの盗賊の女性も想定範囲外である。

その『スペース・フォース』の中に入っていた人はセルリアである。どうやら、タイガたちの予想が当たっていたようだ。

そのセルリアはと言つと現在、女盗賊特製の眠り薬で眠っている。(さてと・・・これからおれはどうしようか・・・)

洞窟の壁にもたれて座る女盗賊。

この女をどうにかしてあの船に帰さねえと・・・と思つ女盗賊。どうやら、必要なもの以外は必要ないようだ。

女盗賊は考える。さっきの手で帰そうとするとき度は捕まる可能性が高いだろうし、いつそのこと宅配便で送るか、とも考へるがあまりにも非人道的だと女盗賊は考へ直す。

そもそも、他人のものを盗むこと自体、非人道的だが女盗賊はそのことに気づいていない。

「だあーッ！くそッ、面倒なことになつちまつたあーッ！－！」

髪をくしゃくしゃさせる女盗賊。

ザツ

「ん？」

突然足音が聞こえたので洞窟の外の様子を見る女盗賊。近づいてく

るものは人だといふことがわかつた。

こんな渓谷の洞窟まで来る人間。道に迷つたのか、あるいは盗賊である自分に用があるのか・・・・・、とりあえず武器の短剣を腰にぶら下げる。

ある程度までの距離になると、人影は男と言つことがわかつた。
蒼い長髪をし、腰には長剣を装備していた。

「・・・・・おまえは？」

「どうやら女盗賊に気づいたらしい。開口一番名前を聞こいつとする。
「おれか？おれはラピス。ラピス・レイニアだッ！おまえさんこそ、誰だ？」

「私はジークフリート・フルード。傭兵だ。」

「ジークフリート・・・どこで聞いたような

「ひとつ聞く。」

女盗賊 ラピスが考へている最中にもかかわらず、自分の用を済ませようとする傭兵ジークフリート。

「あ、なんだ？こっちが思い出そうとしているってのによ。」

「『スペース・フォース』とパイロットがそこにあるだろ？。」

「ん？なんでおまえさんがそれを知つてんだ？」

「答える義理は無い。」

淡淡と語つジークフリート。

「あつや。悪いがわたせつてんならお断りだぜ。これはおれが危険をかえりみず、手に入れたモンなんだからな。」

「どうしてもか？」

「どうしてもだ。」

渡す気はないとはつきり宣言するラピス。

「そつか。・・・・・なら、仕方ない。力づくでもいただこう

か。」

ジークフリートはそつと長剣を鞘から抜き出す。

「へッ。上等……」

ラピスもジークフリートが得物を抜くのを見て、短剣を構えた。

「あんた、傭兵って言つたな。」

「ああ、そうだ。」

「誰に雇われたんだ?この『スペース・フォース』と奪い返しにでもきたか?」

「少なくとも『スペース・フォース』の所持者から依頼されたわけではない。」

(　　と言うことは、おれのほかにもこれをほしがってるやからがいるつて事か。)

「今なら間に合うが。退いてそれを渡すか、戦つて痛い目を見てからそれを渡すか。」

「悪いがその両方にも当てはまんねえな。なぜなら、このおれが勝つからだああああああッ!!!!!!」

その言葉と同時に、ラピスは戦いの火蓋を切った。

第16話～セルリア奪還戦2 傭兵ジークフリート～（後書き）

ラピス・スレイミア

年齢 16

性別 女

職業 盗賊

一人称 おれ

茶色の長髪、そしてハチマキを頭に巻いている女性。

性格は男勝りで言葉遣いが荒い。

とても身軽く、また走る速さもそこそこ速い。

修羅場を切り抜け続けたせいか、戦闘慣れしている。

ジークフリート・フェルド

年齢 25

性別 男

職業 傭兵

一人称 私

とある依頼人に雇われた傭兵。

蒼い長髪をし、腰には長剣を装備している。

非常に名の知れた傭兵であり、剣客の中では知らないものはほとんどない。

冷静沈着で、氷系の技を多用することから『冷氷のジーク』と言う2つ名を持つ。

第17話 セルリア奪還戦3 無情の長剣

紅く輝く夕日が沈もうとしているころ、とある渓谷で2人がにらみ合っていた。

互いにそれぞれの得物を構え、隙を見せないようしている。

(・・・できやがるな。)

茶髪の女性 ラビスの長年の盜賊の勘だった。

一度は猪突猛進しようとしていたのだが、気配に押され一度踏みとどまつた。

ラピスに睨みをきかせている傭兵ジークフリート・・・どこかで聞いたことのある名前のようなが、ラピスはそれを思い出せずにいた。だが、気配で只者ではないことがラピスにはわかつていた。（まあいい。名前なんぞわからなくつたって、おれが勝つに決まっているんだ。）

硬直状態が続く。あれから30分は経っていた。が、互いに動こうとはしない。

夕田もほとんど沈み、星空が見え始めた。いつのまにかぱりぱりとあつはく。

（くわー。）このおやじがうまいわねえなあ。（くわー。）

状態は苦手である。

(えツーー)

ついに我慢できなくなつたのか、ラピスはジークフリートとの距離を一気につめる。

さすが盗賊といつべきか、みじと盗賊といつべきか、ラピスの速や

は常人の域を超えるものがあつた。

「もうつたあツー！」

その俊敏な速さで、ジークフリートの背後を取るラピス。そのまま逆袈裟に斬りつけようとする。

「あまい。」

ジークフリートの低い、かつ重みのある声がラピスに聞こえたかと思つと、ラピスの短剣の斬撃がさばかれる。

「…！」

確實に背後を取つたと感じ取っていたラピスだが、それをさばかれたことにより隙が出来る。

「零圧剣。れいあつけん」

攻撃をはじかれ、隙を見せていたラピスに冷氣をまとつた衝撃波が襲いかかった。

「ぐあああああああああああああッ！…！」

短剣ではさばききれず、衝撃波を喰らつたラピスは、そのまま壁に激突した。

壁にもたれ、ややぐつたりぎみのラピスに立ちなおす暇をとらずに続けて『零圧剣』を浴びせる。

ドゴンッ、ドゴオッ・・・・・と、痛烈な音が渓谷中に響き渡る。衝撃波の影響で、戦場に砂煙が発生していたが、間もなく煙が晴れよつとしていた。

とどめをさしたかどうかを確認するためにジークフリートは煙が晴れるのを素直に待つ。

やがて、砂煙が止んだのだが、さきほどまでラピスがいた場所にはその姿がなくなっていた。

「おれならここだああああああッ！…！」

ジークフリートがラピスの声に気がついたときにはすでに遅かった。背中を大きく斬られるジークフリート。

「へ、どうだッ…さつきの砂煙の間におまえさんの背後に回りせてもらつたんだぜ。」

「なるほど。私としたことが、少し油断しすぎたか。」

斬られたにもかかわらず悲鳴ひとつあげず、淡々と自分の言いたい

」と述べるジーグフリート。

「何余裕ぶつこいてんだよ！そりゃあおまえさんの技はおれ的に結構喰らつたが、擦り傷程度だぜッ！」

「そうか。なら今度は、その傷程度ではすまない技でおまえをしとめよう。」

ジーグフリートはそいつと剣を構え直す。

「へッ。どんな技仕掛けでこられようと、おれは負けねえぜーーー！」

「なら・・・・受けてみよッ。」

次の瞬間、ジーグフリートの姿がラピスの視界から消える。

「なッ。」

さすがのラピスもあせるのだが・・・

「遅い。」

すでに背後に回られていた。

「殺戮氷舞剣ツ！！」

長剣に冷気を宿し、剣技の乱舞攻撃をするジーグフリート。

「ぐわああああああああああああああああああああああああああああツツツ！」

「――――！」

静かな渓谷に、絶叫の悲鳴があがつた。

第17話～セルリア奪還戦3 無情の長剣～（後書き）

技紹介

零圧剣

冷気をまとった衝撃波が襲う剣術。

殺戮氷舞剣

剣に冷気を宿らせ、剣技の乱舞攻撃をする。

第1-8話／セルリア奪還戦4 目指す場所

「…………う。」

1人の少女が目を覚ますと、そこにはベッドの上だった。
なんでこんなところにいるのかと、少女は考えるがわからなかつた。
確かに自分はジークフリートとか言つた傭兵に斬りつけられてそのまま
ま氣を失つた……それくらいしか思い出せなかつた。

「目を覚ましたか？」

どうやら人がいたらしい。白髪の男性に声をかけられた。

「…………ここはどこだ？」

「医務室ですよ。『ラグナエース』の。」

「『ラグナエース』…………どこかで聞いたような気が……。
少女が考へているとき、医務室に人が入つてきた。

「おー、目が覚めたんだね。」

「誰だ、おめえは？」

「オレかい？ オレはカイル・クロード。一応、この船の艦長だ。」
艦長と言つわりには、威厳っぽさが全く感じられないと少女ラピス
は思つた。

「こまえはどうも。盗賊さん。」

医務室に入つてきた人の一人、ティレクが一言ラピスに言つた。

「…………ああッ！ おまえはあんときの……」

一度戦つたことのある顔を見て、ラピスはこの場所を思い出す。
自分が襲つたことがある戦艦だと……。

「さあて、傷も癒えたみたいだし、ここで話を聞かせてもらいたい
んだ。」

一言カイルは言つと、テーブルにおいてある紅茶を一服した。

現在、タイガたちはピロティにいる。

医務室から場所を移したのだった。

「話を聞いていいかな？」

「別にかまわねえよ。…………つうかおれに拒否権なんてねえだろ。それに聞かれる内容も大体はわかるしな。」

「そうかい。それじゃあ……『スペース・フォース』はどこにやつたんだい？」

「『スペース・フォース』…………ああツ！…そうだつたツ！！あの場所に無かつたのか、カイルツ！！」

「へ？ああ、うん。無かつたけど……」

その言葉を聞いて、ラピスはしまつたとばかりの表情をした。

「どうしたんだい？」

「いや……おまえたちがおれを助けたときボロボロだつたろ。」

「うん。てっきり魔物にでも襲われたんだと思つたけど……。「…………実は、おれ以外にも『スペース・フォース』とやらを狙つてた輩がいたんだよ。」

それを聞いて、カイルのみならず、その場にいた全員が驚いた。

「…………だれなんだい？それは。」

「たしか…………ジークフリートつつてたな。」

その名前に、その場にいたシャープの眉がピクリと動く。

だが、何もその後言葉を発さなかつた。

「誰かに雇われたとか言つてたな、そいつは自分の職業を傭兵つて言つてたからな。」

「そうか……。それじゃあセルリアも……。」

「セルリア？誰だそれ？」

「君と一緒に誘拐していつた女の子のことだよ。」

と、タイガ。

「誘拐したんじやねえッ！勝手にあの機体ん中に入つてたんだッ

！！！」

今にも噛み付きそうなくらいの勢いで、ラピスは反論した。

「まあまあ、落ち着いてよ。」

2人の間で火花が散つてゐるよつだったので、カイルはとにかくその場を落ち着かせようとする。

「…………それで、その女がどうしたつて？」

「うん。実はいなかつたんだ。周辺を探したんだけどね。」

「そつか。つてことは、あの野郎が連れ去つたと言つわけか。」

「そう言つことになるんだけど、そのジークフリートって言つ男はどこにいつたんだい？」

「しらねえな。あの男に聞しちゃあな。」

『スペース・フォース』ならびに、セルリアの行方すらも手がかりゼロになつたカイルたち。

下手をすれば、この広い宇宙をしらみつぶしに探すことになる。

「ジークフリートの居場所なら、だいたいはわかるよ。」

そう言つたのは、シャープだつた。

「本当かい？ シャープ。」

「ああ。やつはたぶん惑星『ファーメル』にいるはずだ。」

「そつか。だけど、なんでシャープはその男の事知つてるんだい？」

「ぐ。あ～いや……昔、一度会つたことがあつてねえ。そのときにはやつが自分の居場所が『ファーメル』だつていつてたんだよ。」

少々怪しかつたが、下手に聞けばただでは済まないだろう。

「まあ今は、シャープの言つとおりに惑星『ファーメル』に向かうとしよう。」

カイルはそう言つとラピスへの聞き取りを終わつた。

第19話 セルリア奪還戦5『色々』

(・・・ったく、あの艦長。何考えてんだ?)

そんなことを考えながら、盗賊ラピスは『ラグナエース』の艦内をうろついていた。

ラピスはあのあとカイルに「あ。もう艦内を自由にしていいよ。」と言わされたのである。

盗賊を捕まえたんだから普通は牢屋行きとかだらうにうろついてかまわないと言われてラピスは正直なところ、とまどつている。

盗賊を牢屋に入れないなんて、逃げてもかまわないと言つてているものである。

とにかく、そんなわけで艦内をぶらついているラピスなのだが艦内は広くて何があるのかなんて格納庫くらいしか知らないので、しかたなくちょうどラピス視点から見て暇そうなタイガに艦内案内をさせている。

(なんで僕がこんなことを・・・)

一方のタイガはそんなことを考えていた。
だが艦長が「友好的にいこう」と言つたので仕方ないとばかりに案内をしている。

正直、元々敵だったラピスと仲良くなんてそういう簡単には出来ない。
「えへっと。さっきまで僕たちがいたところはピロティと言つてみんなの憩いの場所として普段は使用しているんだ。」

タイガも実のところ、最近ここに来たばかりで実はほとんど何も知らなかつた。

なので、説明的にも簡略のことしかいえない。

「そう言えば、タイガだっけか?」

「ん、なんだい?」

「おまえは何でこの『ラグナエース』にいるんだ?」

「何でいるって・・・・。」

ちゅつとした事故と言つか事件にあつて、とつあえずいの船に住ませてもらひ事になつたなんて……

(いえない・・・)

「おいッ！聞いてんだけどよ。」

「それは・・・まあ、色々あつてね。」

「なんだ？その色々つて。」

「まあ色々だよ。それより、なんでラピスは盜賊をやつてるの？」

タイガの質問に、ラピスも先ほどのラピスと同じく言葉が詰まる。

「・・・・・それは、その・・・・・色々だッ！」

「なんだよ。その色々つて。」

「色々だから色々なんだよッ！」

「は、はあ・・・。」

頷くくらいしか出来ないタイガ。

追求をすることは今のタイガにはできない。

もし追求したものならラピスのことである。「なら先におめえの『色々』の内容を教えやがれつてんだッ！」とか言つてしまつである。

自分が『色々』の内容を話せないので、相手に『色々』の内容を教えてもらおうなんて、タイガ自身むしのいい話だと思つていた。

「まあ、とにかく。艦内の案内の続きをするよ。」

「おそらく変な話の転換の仕方だな。」

「ま、まあいいじゃない。」

とにかくこの話題から切実に逃れたいと思つて居るタイガであった。

第20話 セルリア奪還戦6 忍び寄る脅威

現在時刻は草木も眠る丑三つ時。・・・・・と言つても宇宙なので恒星の近くを通るとき以外はほとんど真っ暗なのだが。

戦艦『ラグナエース』を操作するオペレーターや格納庫の一部の整備班の人たち以外の人はほとんど就寝していた。

とは言つても、オペレーターたちも24時間完全無休養と言つわけではなく、時間で常に交代していた。

朝や昼間や夕方のときの『ラグナエース』内にぎやかさは、この間だけなくなる。

しづかな『ラグナエース』といつのは、なんとも妙と言ひつか変な感じがしてしまう。

「『ラグナエース』。あいつが乗つてる船か。」

そんな『ラグナエース』から距離2万～3万キロほどの先に、戦闘機が一機。

全体的なフォルムがなんだか『スペース・フォース』に似ていた。「命令なんでね。悪く思わないでくれよ。」

戦闘機のパイロットはそう言つと、注射針のように先が鋭くどがつた長さ5センチくらいの針・・・と言つたカプセルを『ラグナエース』に向けて発射する。

その針に似たカプセルは『ラグナエース』の表面に突き刺さると、謎の液体を『ラグナエース』に注入する。

「24時間後が楽しみだなあ。船内がどんなになるのか。そしてあいつがどうなるのか。」

独り言のように戦闘機のパイロットはつぶやくと、その場で『空間穴転移移動』をしてその場から姿を消すのだった。（正しくは『別空間』へ移動した。）

午前8時。

タイガはベッドから起き上がった。

いつもはもつと早く起きるのだが、ベッドに入ったのはいいもののセルリアのことが気になって眠れなかつたのだ。

今頃はどうしているだろうか・・・。

ジークフリートという人は、どうして『スペース・フォース』と一緒にセルリアをさらつたのだろうか・・・。

そう言えば、シャープは何がジークフリートのことを知つてそつたけど・・・。

グキュウルルルルウウウウウウ

・・・・・お腹減つたなあ。

食堂の飯は美味しかつたなあ。

流浪時代のティレクのつくりてくれた料理は核兵器並だつたなあ。

・・・・などと、お腹がなつた後は完全にセルリアのこととは関係ないことを考へたタイガ。

(とりあえず食堂に行こう。腹が減つてはいくさができぬつてね。)ベッドから起き、服装を着替えた後タイガは食堂へと行くのだった。

「お、タイガじゃないか。アタシらと一緒に朝食食べないかい?」食堂に入ってきた早々、シャープとミラージュとティレクに出会つ。

・・・・あれ?

「ねえ。ラピスの姿が無いようだけど・・・。」

「ああ、ラピスならもう朝食済ませてどつかいつたらしいわよ。」

「俺様がラピスにあつたとき、そつ置つてたからな。」

「ふ〜ん。」

「あ、そういうえばラピスのやつ『なんか嫌な予感がするからちよつ
とばかり気をつけたほうがいいぜ。おれの盗賊としての勘がそう言
つてやがるんだ。』とか言つてたな。」

「なに? その『嫌な予感』って?」

「さあ。俺様に聞かれてもなあ。そんなことよりめし食つに行こう
ぜ。」

『嫌な予感』というのが少し気になつたものの、朝食を食べたがつ
ているティレクに、タイガはとりあえず贅回することにした。

第21話 セルリア奪還戦7 テイレクの災難（笑）

「…………と書つ」とがあつました。艦長に連絡しようと考えたのですが、相手も何もしてきませんでしたし……。

「うん。報告ありがとうございます。」

「失礼します。」

カイルと深夜の当番のオペレーターが会話をしているとき、タイガがブリッジにやってきた。

「ん、タイガか。どうしたんだい？」

「え？ あ～・・・。」

艦長を田の前にして、言おうとしていたことをためらうタイガ。

「・・・・・ああ。なるほど。セルリアのことだね。」

すばり当てられて、タイガは「違います。」とは言えなかつた。

「そうだなあ」。はつきり言つて、今のところはなんとも言えないね。無事か無事じやないのか・・・。もちろん、無事であつてほしいじね。

「そうですか・・・。」

収穫、ゼロだったので、少し氣を落とすタイガ。

「まあ、そんなに氣を落とさないでよ。オレだつて仲間のことだから心配なんだから。」

「は」。・・・。ついこねば、つい何か話してたみたいですけど・・・。」

「ああ、のことか。たいしたことではないとは思つんだけど、深夜3時じろ何か不審な船がこの『ラグナエース』を偵察してたようなんだ。」

「それで何かされたんですか？」

「いや。何もされてないんだ。敵なら何か妨害とかしてくるはずなんだけど・・・。」

「じゃあ何のためにその船は・・・。」

その言葉の続きを言おうとしたとき不意にティレクが言った……
・と言つからラピスが言つた言葉を思い出す。

『なんか嫌な予感がするからちょっとばかし気をつけたほうがいい
ぜ。おれの盗賊としての勘がそう言つてやがるんだ。』

「…………」

「ん、タイガ。どうした？」

急に何か考え出したようなタイガを見て、カイルは声をかけた。

「あ、いいえ。なんでもありません。」

まさかそんなわけない…………。

「それじゃあ、艦長。失礼しました。」

「うん。何か情報があつたらいうから、それまではリラックスして
なよ。」

カイルのそんな言葉を背に受け、ブリッジから出た。
だが、ブリッジから出たといふものの、タイガはやることがない。
ティレクはおそらくティーラウンジかそこらで女性のナンパをして
いるだろ？

そしてその光景をミラージュに見られて制裁を受けているだろ？
(ティレクはたぶん暇じゃないな。)

そんなことを考えながら第3階層までさまよつていると、通路でテ
ィレクがナンパをしているところを見た。相手はちなみに2人。
「やあ、麗しきお嬢さん方。どつかこの俺様と、練乳より甘いひと
ときを楽しみませんか。」

そう言つたティレクの左手にはバラが一本握られていた。おそらく、
『ラグナエース』にあるコンビニで買ったものだろ？
ナンパされた女性たちは、見た感じまんざらでもない様子だった。
なぜなら頬を赤らめていたからだ。

「かわいいねえ、キミ達。その赤く染まつた顔。リン」「みたいに食べちゃいたいよ。グフオアアアアアアアアツツ！－！－！－！」

とどめの台詞を言つてゐると、ティレクは背後から後頭部へ跳び蹴りされた。

そしてそのまま地面とキスしながら顔スライディング・・・・。

「めんなさいねえ。この色魔は女を遊び道具としか考えていないし、男失格の人間だから。」

飛び蹴りしたやつ・・・・ミラージュはそう言つてティレクを引きずつてどこかにいくのだった。

（ああ。僕の思ったとおりの光景がついさっき発生した。）
（うつ思つど、タイガは再びぶらぶらと艦内を散歩するのだった。）

第22話 セルリア奪還戦8 真夜中の侵入者

現在、草木も眠る丑三つ時。

今、『ラグナエース』に危機が訪れようとしていた・・・・・。

ここは、ブリッジ。現在、2人のオペレーターが艦内監視と船の操縦を分担で行っていた。

ピピピ・・・

「ん？」

「どうした？」

「いや。倉庫に何があつたみたいで・・・。」

そう言いつとブリッジに搭載されている艦内モニターで確かめる。すると、何者かが倉庫でうろうろしているところをモニターで確認できた。

暗くてわかりにくかったが、少なくともこの船の人間でないことはわかつた。

そして、それだけがわかつた次の瞬間、モニターが壊されたのか何も映らなくなってしまった。

急いで緊急の放送を流すオペレーター。

「緊急事態ッ！倉庫に何者かが侵入しているッ！！繰り返す！倉庫に・・・・・。」

「なんだってのよッ！？」

それがミラージュの第一声だった。

髪がかなりぼさぼさなので寝相が悪いようだ。

タイガ、ティレク、シャープ、ミラージュは現在倉庫に向かっている。

タイガたちの部屋は第2階層。そして倉庫は第5階層があるので結構長い道のりだ。

「なんだっていいセツ！？ それにしても何でこんな真夜中に侵入者なんか・・・。」

「そういえば艦長が昨日の真夜中に誰かがこの船を監視してたっていつてたけど、まさか今回の騒ぎの原因って・・・。」

「たぶんそいつの仕業だろうね。」

「とにかく、早く倉庫へ行けッ！」

第5階層・・・。

倉庫付近で、茶髪の女性が侵入者と交戦していた。

あの放送の後、真っ先に駆けつけたのがラピスだった。

「はッ！？」

元盗賊ラピスが短剣を振るつて衝撃波を繰り出す。・・・が、相手に全く効いていない。

侵入者は、簡単に言つてしまえばスライムだった。あの某国民的ゲ

ームやRPGゲームにはお約束の雑魚敵・・・・のはずなのだが、どういうわけかラピスの攻撃が全く効かないのである。

アメーバみたくはつきりした形状と言つものがなく、衝撃波でふつ飛ばしてもすぐ再生するやつかいな魔物だった。

はつきりした形状・・・・つまり自由に形を変えられるので、おそらくこの能力を生かしてこの船に進入してきたのだ。う。

「ラピスッ！」

そんな相手と戦つてゐるとき、背後から自分の名前が聞こえたラピス。

振り返ると、タイガたちがこちらに走つてくる姿だった。

「おせーぞッ！おれがせつかく時間稼ぎしてやつてるのにッ！」
「グチは後で聞いてあげるから、・・・・それより、あれが侵入者だね。」

タイガの視線の先にはスライムがいた。

「ああ・・・正直、厄介な相手だぜ。」「

「だけど、こいつを倒さない」この船は確実に・・・・」

タイガは得物を構えた。

同様に、他の一行もだ。

「よし・・・・行くぞッ！」

第23話 セルリア奪還戦9 スライム撃退作戦

「ぐりえツ！ 爆裂斬ツ！！」

タイガは得物である剣に魔力を込めて、スライムに大きく振りかか
つた。

ズバアアツと景気よくスライムは斬れて、通路にゼリー状の物体が
飛び散つた。人で例えるなら・・・・いや、けつこうグロテ
スクなのでやめておこう。

「やつたか？」

「いや、たぶん無理だろうな。」

そのラピスの言葉の理由はすぐにわかつた。

飛び散つたゼリー状の物体は、一度散乱すると再び元の一つのゼリ
ー状の物体に戻つたからだ。

「ならこれでどうだいツ！！」

シャープは腰にかけていた拳銃を構えると、

「連射ああああツ！！」

バンバンバンバンバンバンバンバンバン・・・・・・

とにかく弾切れになるまで撃ちつづける。

だが、スライムには効果なし。ゼリー状の身体の中にはシャープが
撃つた銃弾が空しくふよふよと浮いていた。

「なら俺様の攻撃はどうだいツ！！」

3番手ティレク。

「くらいやがれツ！ 疾槍突ツ！！」

スライムとの間合いが広すぎるにもかかわらず、ティレクは槍を構
えると刹那の間にスライムとの間合いをつめ、加速を保つたまま突
きを放つ。

ドッゴオオオオオと、車が壁に激突したみたいな音と一緒に、ス

ライムは大きくぶつ飛ばされてゼリー状の物体を飛び散らせる。が、これも効果なし。再び元の姿（と言つても合体するだけ）に戻るスライム。

「ダメか・・・。」

「次はミラージュ。アンタの番だよ！」

とシャープが振り返るが、元いた場所にミラージュはいなかつた。そしてそこにはこんな置き手紙。

『あんな見た感じでわかるヌルヌルしてそうなやつと戦えません。タイガ、シャープさん、ラピス、・・・ついでに色魔男、がんばってね』

・・・・・逃げ。

ついでに言つとミラージュは格闘術で戦う。のだが、相手はスライム。

剣や槍や拳銃や短剣と違つて、もろに相手と接触しないといけないのでなおさら逃げたくなつたのだろう。

「・・・・・あとで懲らしめないとね。」

ボソリと呟いたシャープの手には・・・・・拳銃。

それにもいつの間にこんな置き手紙を書いたのだろうか・・・。

そんな疑問を抱くタイガだが、そんな場合ではない。

「それにしてもどうすんだよ、この魔物。」

さつきからスライムの攻撃をかわしているラピスが言つた。ちなみに、ティレクも。

というか、スライムが攻撃しているのを見たのはタイガたち初めてである。

ゼリー状の身体の一部を伸ばして、鞭のようにして攻撃するのがこのスライムの攻撃方法だった。

・・・・・と、説明している場合じゃない。

「でも、僕たちの攻撃が全く通用しないんじゃ……。」

「水みたいに攻撃しても手^じたえゼロだからねえ。」

・・・・・水？

シャープの言葉で、タイガはひらめいた。

「そうだ！相手が水なら、いつそ凍らせればいいんだッ！！」

「でも凍らせるって、どうやんだよ。」

「あ・・・。」

ラピスの言葉で、思考が停止するタイガ。

現在、この場にいるメンバー全員魔術は使えない。

よつて、氷系の魔術も使えないのである。

「いや。方法はあるよ。」

と、シャープ。

「本当？」

「ああ。この5階層には冷凍食品とかを保存する冷凍庫があるんだよ。そこまでおびき寄せれば・・・・・。」

倒せるかもしねりない・・・・。

「どこにあるの？」

「ちょうどあそここの角を曲がつてすぐだね。」

シャープの指差す方向には・・・・・スライム。そしてその先に曲がり角があつた。

「・・・・・よし。」

そう言つとタイガは先ほどから攻撃をかわしまくつてゐる、もしくは受け流している2人に、

「これから僕がスライムの後ろ（？）にいくから2人は注意をひきつけておいてよ。」

「ん？ああ、わかつた。・・・て、ことだ。金髪、ミスんなよ。」

金髪・・・・・ティレクのことであろう。

「わかつてゐるつて。そんなに俺様ドジじゃないぜ！」

そう言い終ると、いつそう避けるのに磨きがかかり始める2人。

そして、タイガは隙を見つけようとする。

一瞬でも隙ができれば背後に回ることはタイガにとつて造作もないことだつた。

そして・・・・・そのときがくる。

(・・・・・・・・・いまだッ！－)

次の瞬間、タイガの姿が搔き消える。

と、思つたらスライムの背後に回つていた。

(疾いッ！－)

例えるなら疾風のじとき。肉眼で捉える事はほぼ不可能だつた。

「はあッ！－」

挑発にタイガは背後(?)から一発斬りつける。

すると、まんまと挑発にのるスライム。タイガに攻め寄る。

釣りで例えるなら餌に魚が食いついた・・・・と言えばいいだろう。

タイガは角を曲がると、そこに『冷凍庫』とプレートに書かれていた部屋を開けた。スライムが確實にタイガに迫つてきていた。

だが、タイガにとつてはこれこそが狙い。

ある程度距離が近づくとタイガは冷凍庫に入った。

それにつられるように入つてくるスライム。

そして、スライムが攻撃にかかるうとしたとき、スライムの目の前からタイガが搔き消える。

スライムを出し抜いたタイガはそのまま冷凍庫の扉を閉めた。

中でバンバンと、なにやらたたく音が聞こえるがおかまいなし。

やがて2～3時間ほどすると何も聞こえなくなつたので、扉を開けてみると、そこには氷のオブジェとなつたスライムがいた。

スライム氷付け作戦、成功ッ！！

第23話～セルリア奪還戦9 スライム撃退作戦～（後書き）

技紹介

爆裂斬
ばくれつざん

剣に魔力をともらせ、相手に大きく振りかぶる技。

疾槍突
しつそうつい

刹那の間に相手との間合いをつめ、加速を保ったまま突きを放つ技。ある程度の遠距離からの攻撃も可能。

第24話 セルリア奪還戦10 魔女風の少女

「」はブリッジ。

「みんな。侵入者の撃退、お疲れさん。」

「まだ冷凍庫ん中にいるけどな。凍つちまつてゐるけど・・・。」

ラピスの言つように、現在『ラグナエース』の冷凍庫にはスライムのオブジェ（と言つても謎の物体が変な形で固まつてゐるだけだが）がある。

問題はこのスライムをどうするかだ。

「艦長。あのスライム、どうするんですか？」

少しばかり気になり、タイガがカイルに尋ねてみる。

「うへん・・・。凍つてゐるなら、凍らせたままどつかに捨てようと思つてるけど。」

たしかに。普通に戦つて倒せないならそのままどつかにせたほうが身のためだ。

「それよりオレも聞きたいことがひとつあるんだけど。」

「なんだい？」

「シャープの後ろで転がつてゐる『ワーディ』は・・・何かあったの？」

カイルが指を指してゐる場所には、どこかの戦争に備り出されいたのか?と思うくらいボロボロになつていた。

頭にはいくつものたんこぶが出来上がつており、なにやら銃弾の穴らしきものがミラー・ジコの羽織つていたマントにはあつた。

虐待の域を超え、もはや殺人未遂の域である。

「気にしないでおくれよ、カイル。」

そういうシャープの手には、ちょうどタイガとティレクの死角になるように構えられた拳銃が、カイルに向けられていた。

本気でやりかねないのがこのシャープの恐ろしさ。

「そ、そう言つんなら気にしないでおくよ。・・・それより、

もつすぐ着くよ。」

「着くつて・・・・・・まさか。」

タイガにカイルはうん。と頷く。

「惑星『ファーメル』さ。」

「・・・・・・ん？」
「やつほーッ！－ジークくん 元気にしてますかな？」
蒼い長髪の男に向かつて比較的高い声がかけられる。
黒い衣装に黒いマント、そして魔女のようなデカく黒いとんがり帽子をかぶっている少女・・・・といふか『魔女のような』ではなくくぱつと見た目だれもが『魔女だ！』と思わせる身形だった。
「・・・・・なんだ？」

「なんだって言われてもねえ。私はただ、その機体を取りに来ただけ・・・・・うおおッ！－オマケも一緒！？」

「ああ。『スペース・フォース』のパイロットだと思つて連れてきた。今は氣絶せである。」

プラチナブロンドの髪をした少女。さらわれてからろくに目覚めたことがない。

目覚めたと思つたら氣絶。睡眠。そのくり返しである。

「いやあ、それならジークくんにはなあさら感謝しないとね。あ、そうそう。約束のブシはちゃんとキミの口座に振込んだから。」

口座といつことは銀行だろうか。どうやら約束のブシとはお金のようである。

「そうか。」

短く答える長髪の男。

「それじゃ、もういいくな~」

魔女風の少女はそう言つと『スペース・フォース』と呼ばれる機体とプラチナブロンドの髪の少女を、手下と思われる人たちに運ばせる。

「それじゃあ、縁があつたらまたねー」

それだけ言つと、魔女風の少女と手下は、頂ぐものを頂いてその場を後にした。

第25話 セルリア奪還戦 11 対面

惑星『ファーメル』。

5・5の割合で陸と水がある惑星だ。

さらに50%の陸地が岩石砂漠であり、人が住むには少し不便だ。レーダーが示していたところより少し離れた場所に平らな地形があつたのでそこに『ラグナエース』を着陸させた。

見渡す限り砂色の大地。ところどころに柱のように立つ岩もあつた。「ここにジークフリート……だけ? その人がいるんだね。」「ああ。たぶん……だけね。」

たぶん……とか言いながら、シャープの田はここに必ずいると言つていいように思えるタイガ。

「さて、行こうッ!! ジーク……なんとかの人の場所に!!」「しまらねえな、タイガ。相手の名前くらい覚えとけよ。」「う、うるさいなあ! 長い名前だからちょっとばかり忘れしだけだ!」

「はいはい、タイガにラピス。その辺にしどきなよ。」

そういうシャープはつかつかと早歩きで前へと進む。

それに続くよう、ティレクと傷がゴルダーの手によつて癒されたミラー・ジユ。

「あ、まつてよ。」

「おれを置いてくなよー今度こそやつにぎゃふんと言わせてやるんだから……。」

2人の言い合いを完全無視する3人に、急いで着いていくタイガとラピスだった。

「ペペペ・・・

シャープの持つている通信機が鳴り出した。

「あいよ、こちらシャープ。」

『あ、シャープかい？ 実は『スペース・フォース』が移動し始めたらしいんだ。』

「移動だつて！？ ディに？」

『わからない。ただ、動きが遅い。急げば追いつくかもしれない。』
「わかったッ！」

シャープは通信を切る。

「シャープ、『スペース・フォース』が移動し始めたつて？」

『語幹のまま思えばいいさ。急ぐよッ！』

「あ～・・・。それは企業秘密。私の一存では口には出せないねえ
」。

「そつか・・・。」

「 真空衝撃波あツ！！」

殺氣を感じたジーグフリートはさすに鞘から剣を抜くと、

「 零圧剣ツ！！」

冷氣をまとった衝撃波を後方に放つ。

ドゴンと衝撃波同士が直撃し、消える。

「うわあ。なんスか？なんスかあ！？」

突然の出来事に、ややわざとらしく驚くあたふたする魔女風の少女。

ジーグフリートの視線の先には、5人の男女がいた。

そのうち1人は自分が一度やりあつた人物。

「おらあツ！！この前の仕返しと、ついでにその機体と女をかえしてもらあうゼツ！！」

ラピスがジーグフリートに向かつて大声で言った。

だが、ジーグフリートはラピスとは別の人物を見ていた。

「・・・シャープ、見られてるよ。」

「わかつてるつて。」

タイガの忠告も本人にはすでにわかっていたようだった。
そして一言。

「久しぶりだねえ、ジーグ。 5年ぶりか。」

「やはりシャープか。もしやとは思つたが・・・。」

「え？え？なになにジーグくん、あの年増と知り合い？」

『年増』と言う女性にとつてバッドな響きを持つ単語を聞いて眉をピクリとシャープが動かす。

その行為に、「ああ、やっぱり気になるんだ。シャープでも」と

つい思つてしまつタイガ。

「まあな。」

魔女風の少女に短く答えるジークフリート。

「それより、おまえたちは先に行つてろ。ここは私が引き受ける。」

「アイアイサー！」

敬礼をしてから魔女風の少女は再び作業を手下たちに開始させた。活動を開始したのにもかかわらずタイガたちはその場から追おうとしなかつた。いや、できなかつた。

ジークフリートから放たれる異様ともいえる殺氣にタイガたちは動けない。

「・・・・・アンタ、なんで『スペース・フォース』とセルリアをさらつたんだい？」

一時期の静寂を破つたのはシャープだつた。

「別に。仕事だからだ。」

「・・・そうだつたね。アンタは昔からそんな事務的で機械的なやつだつたよ。他人に仕事を言われるとどんなことでもアンタはしていた。」

「私のことをわかつているのなら、それでいいだろ。私はそういう男だ。仕事なら盗みでも人殺しでもやる。」

「そうかい。・・・・・なら。」

シャープは拳銃・・・・ではなく、剣を取り出す。

シャープはもともと拳銃より剣を扱うのに長けているのだ。ただ、よほどのときしか使わないのだが・・・。

「ここでアンタを殺すよ。」

「・・・・・どうしてだ？」

剣を構えて、シャープは言ひ。

「仕事だからだ。」

第26話～セルリア奪還戦12 2つの戦い～

「アンタたちは早く『スペース・フォース』とセルリアを取り返しちゃな。こにはアタシが引き受ける。」

シャープは剣を構えたままタイガたちに言った。

「でもシャープさん。知り合いなのかどうかはわかりませんけど、あいつはたぶん手加減はしませんよ。」

ミラージュは、気配でわかつていた。

相手は例え知り合いでどうと仕事なら容赦なく殺す。そんな冷酷な男なのだと。

だが、それはシャープ自身が一番良く知っていることである。まだタイガたちには話していないが、自分とジークは知り合いで。

そして、知り合いであるからこそ、はつきりと言えることだと。

「手加減なんて、戦場には無用さ。・・・・・まあ、早いいきな。

タイガは、シャープが本気だと言つことがわかると、他を引き連れて『スペース・フォース』とセルリアを取り戻しにいく。敵が自分の横を通るが、微動だにしないジークフリート。行くなら行けと思っているのだろうか。

やがて、タイガたちの姿が見えなくなる。

「・・・・・話してないのか？おまえが私の知り合いでと話す。」

「ああ。会う」ともないだろうと思つてたからね。・・・・・しかしまあなんだ。こんな感じの再会なんて本当にあるんだねえ。偶然とは恐ろしい。」

間。

そして、ジークフリートは剣を抜く。

「・・・・・本気かい？」

「さあな。」

ジークフリートの言葉を聞き終えると同時にシャープは大地を蹴る。

戦闘開始の合図であった。

「いやー、らくしょーらくしょー も、私だから当然か。

余裕を表面に全開している魔女風の少女。

少女の目指す目的地まであと少しである。

「まてえええええッ！…」

遠くから声が聞こえたので後ろを見る魔女風の少女。

そこには、ジークフリートが足止めしているはずの人たちがいた。

「げッ！？マジ？もう追ってきた！」

手下たちに早く運ぶように指示を出すが、いくらなんでも限度があった。

なにせ鉄の塊をワイヤーで、しかも縛引きの要領で引っ張っているのだから。

このご時勢、なんとも原始的であった。

やがて、完全に追いつかる。

「はあ・・・・・はあ・・・・・。ああ、おとなしく返してもら

うよ。」

ここまで猛スピードで走ってきたのか、息切れしているタイガ。後に続くように息を切らして他の3人が到着する。

「うわあ～。ホントに追いつかれちゃったよ～。」

「今なら危害は加えない。おとなしく返してくれれば。」半ば脅しだとわかっているタイガであったが、それでもしないとわざないだろう。

「にやははははははッ！私を脅しても無駄だよ。これはもう私のものなんだから。」

タイガの脅しに笑ってみせる魔女風の少女。

「キミのものじゃなくて、元は僕たちのものなんだ。」

「いいや。違うよ。私のものは私のもの。私が一回でも手を触れたものも私のもの。よつて元キミたちのこの機体とこの子は、私が一回手を触れたから私のもの～」

恐ろしいほどに自分勝手なジャイアニズムを言つ魔女風の少女。

「いや、僕たちのだ。」

「いや、私のもの。」

「僕たちのだ。」

「私の。」

「僕たち。」

「私。」

「ぼ。」

「わ。」

「。」

「。」

最後は略しすぎて何が何だかわからないことを言つていたタイガと魔女風の少女。

というか、言い合いがもはや子供の物の奪い合いに似ていた。大人に近い人たちが情けない。

「タイガ、今はそんな低次元な言い合いをしている場合じゃないで

ショッ！

「そうだぜ、タイガツ！」

女2人に言われ、一度冷静になるタイガ。

「と、とにかく。痛い目を見たくなければ返してよー。」

「ヤダ。」

2文字で簡潔に言われ、タイガはついに剣を抜く。

普段温厚なのだが、今は早いとこ返してもらつてシャープの援護をしないといけないと言う考えが、タイガを動かしていた。

「ふつふつふ。この私と戦うの？」

「素直に渡してくれないならね。」

タイガの目は据わっていた。

「にやつはつはつはつは・・・。よからう。このウイズ様が相手をしてあげよう。」

相手をまるで小バカにするような口調で、魔女風の少女ウイズは戦いの火蓋を切つた。

第26話 セルリア奪還戦12 2つの戦い（後書き）

キャラクター紹介

ウイズ・M・フィアリス

年齢 15

性別 女

職業 魔術師

一人称 私

黒い衣装に黒いマント、そして魔女のような『力く黒いとんがり帽子をかぶつて、いかにも魔女な感じの服装をしている少女。ムードメーカー的な人物で、かなり明るい性格。

魔術師としての腕前も幼いにもかかわらず一人前で、容姿からは想像ができないくらいの実力がある。
相手を小バカにしたような口調で話したりするので、恨みをかう事もしばしば。

第27話 セルリア奪還戦13 知人同士の戦い

ガキンッ、キンッとたたつ広い岩石砂漠で、金属音が響き渡つていた。

互いに刃と刃を交差させ、金属音を響かせる。

「おりやあッ！…」

シャープがジークフリートに剣を振り下ろす。が、難なく受け止める。

「・・・・・ふんッ。」

ジークフリートは交差している剣を力づくで振り払い、シャープとの距離を強引に広がせる。

飛ばされてややひるみ気味のシャープに、容赦ない一撃を加えようとするがシャープは体勢を瞬時に立て直すとその攻撃を真正面から受け止めた。

「ほう。腕を上げたな、シャープ。」

「アンタこそ、悔しいけど腕を上げてるねエ。」

短く互いに言葉を交わすと再び互いの間合いを大きく広げる。

「零圧剣ッ！」

間合いをとると同時にジークフリートは冷氣をまとった衝撃波をシヤーフめがけて放つ。

「はああッッ！…」

シャープは剣を一度、バットを持つように構えると野球ボールを打つように、衝撃波を雲散霧消させる。

その刹那、ジークフリートはシャープとの間合いを一気につめる。衝撃波は注意を引き付けるためのおとりだったのだ。

ジークフリートは剣を下部から斬り上げる。

「くッ。」

とつせに反応し、回避しようとしたシャープだが、左腕を斬られる。さらに一撃。

「があツ。」

さう。

ズバアツ

さらー。

ズシャアツ

「ぐあああああああツ！－！」

最初の一撃でひるんだシャープに容赦なくジークフリートは連続で斬りこんだ。

そしてさらー。

キイン・・・

もう一撃攻撃しようとしたが、シャープは4度目の攻撃は受け止めた。

「・・・4度目の正直ってね。」

「・・・・普通は3度目だがな。」

ジークフリートは受け止められると一度シャープと間合いを置く。その間にシャープはよろよろと立ち上がる。

左腕1ヶ所、腹部に交差で斬りつけられ計2ヶ所。

その傷跡からは絶え間なく紅く、そしてやや黒い血が流れ出ていた。

よほど深く斬りつけられているようである。

並の鍛え方をしている人間なら、ここで立ち上がることは不可能だ
る。」

（さあて、これからどうしようかねえ。）

シャープは考える。

せめて一撃でもいい。一撃でもくらわせてやりたいと思つていた。
だが、その一撃でさえやつは攻撃を許さない。

「……これで終わらせてやるう。」

低く、重い声がシャープの耳に入る。

やつにどうやって一撃を打てるかといつ考へ。シャープがあの短い
時間で考えたのはひとつ。

そして、それをする絶好の機会が訪れようとしていた。

やつが攻撃した直後に一気に間合いをつめ、体勢が取れていなしジ
ークフリートは一撃を打てる。

うまくいったら次は2撃目、3撃目……。

「終わらせることができるなんやつてみな。」

「……わかった。」

シャープの挑発っぽい言葉につまくのつたジークフリート。

ジークフリートは剣の刃に魔力で冷氣を集中的に発生させる。

「氷龍剣ツ！」

冷氣を集中させた後、ジークフリートはそれを龍の形にし氷の龍を
シャープめがけて放つた。

（今だッ！）

シャープは一気に距離をつめる。

氷の龍はそんなシャープに向かつて攻撃をしに来るがシャープはお
かまいなしだ。

とにかく今がチャンス。そのためなら、腕の一本くらい氷付けにさ
れてもかまわないと思っているのである。提案の定、ジークフリートは隙だらけだった。

氷の龍を放つ際、大振りだったのと当然である。

そんなジークフリートにシャープは渾身の一撃を放った。

ズバアッ

紙がはさみで切られる音と共に、ジークフリートの背中は豪快に斬られた。

「…………」

悲鳴や苦痛の一言も漏らさなかつたが、ジークフリートの表情は苦悶によつて歪んでいた。

(さりに一撃ツ！)

もう一撃背中を斬りつけようとするが、2撃目は止まなかつた。瞬時に振り返り、シャープの一撃を受け止めるジークフリート。

「なツ・・・・・」

2撃目を防ぐことができず、シャープは一度距離を置く。そして、剣を構える。

だがジークフリートはそのシャープの姿を一度見ると、剣を鞘に収めた。

「????」

その行動に、思わずシャープは頭の中が『?』になる。

「なんのつもりだい?」

「別にもう先へ行つてもかまわんぞ。」

「はあ！？」

驚きを隠せないシャープ。

このまま戦い続ければ確実にジークフリートの勝ちだひつ。

「早く行け。私の気が変わらないうちにな。」

そつぬづギークフリートに、シャープはどうあえず従うこととする。そして、タイガたちのもとへと急ぐ。

第27話 セルリア奪還戦13 知人同士の戦い（後書き）

氷龍剣
ひょうりゅうけん

剣の刃に魔力で冷気を集中的に発生させた後、龍の形にし氷の龍を相手めがけて放つ技。

第28話 セルリア奪還戦14 2対50

一方、シャープたちの戦いが始まったときタイガたちのほうも戦いが始まるとしていた。

相手は魔女の服装をした少女。

それプラス魔女の手下数十人。

「さて、まずは小手調べだにゃん ・・・・ みんなのもの、かかれえー」

魔女ウイズが指示すると、手下たちは一斉に襲つてくる。

「ウイーツ！」

「ウイ ッ！」

「ウイ ッ！」

それが手下たちの気合（？）を出すための声だつた。

「こんなザ「ども、おれ一人で十分だぜ。」

「みるからにバカそうだしなッ！」

ラピスとティレクはそう言うと数十人・・・・50人ほどいる手下たちに突っ込んでいく。

5分後・・・・・

「我が人生に、悔い・・・・・・・・あり。」

最後に倒された手下はそう言つと、バタリと倒れた。

ラピスとティレクの背後には、魔女の手下の山ができていた。

（（弱ッ！））

そう思わずにはいられないタイガとミラージュ。

50人ほどの魔女の手下は5分で片付けられたのである。

1分で10人ペースで・・・。

「ありやあ～。倒されちゃったかあ～。」

がっくりと肩を落とすウイズ。

「て言うか弱すぎだぜ。こいつら。」

「数だけって感じだな。」

余裕余裕とばかり言つてのける2人。

そのままタイガたちのもとへと戻る。

「さあ、これでも戦うつもりかい？」

何もやつてないタイガがウイズに聞く。

「・・・・まあ、倒されちゃったものは仕方ないしね それに、私がまさかあんなに弱いなんてこともないし。」

ウイズは得物を何もない空間から現せた。

先端に丸い水晶を飾った杖である。

「キミたちにこの私が倒せるかな～」

タイガたちも得物を構える。

相手に退く気がないという意思がないことがこれではつきりとした。

はつきりした以上は正面から戦いを挑むまで。

タイガたちとウイズの戦いが始まる・・・・・。

第29話 セルリア奪還戦15 魔女の恐怖

「ふつふつふ」

戦いが始まっているのに、余裕といった感じの微笑を口に浮かべているウイズ。

「いくぞッ！」

そんなウイズに向かつてタイガは地面を蹴る。

「無駄だにや〜ん」

ウイズは杖に魔力を込める。すると・・・

バチイツ

「ぐわッ！」

空が晴れているにもかかわらず、突然タイガに一筋の雷が落ちた。

「な・・・」

「にやはははは〜 私の力、思い知ったかね？」

ちなみに今ウイズがした魔術は『ライトニング』と呼ばれる魔術である。

魔術師の初歩の魔術のひとつである。

普通魔術は『詠唱』と呼ばれるものを唱えなければいけないのだが、この少女は無詠唱で『ライトニング』を発動させた。

「無詠唱で魔術を発動させるなんて・・・」

思わず声にしてしまつマージュ。

初步の魔術とはいえ、無詠唱で発動させるのを見たのはマージュ自身、見たことがなかった。

「どう? すごいしょー。私は初步の魔術くらいなら、無詠唱で発

動させることができるのだ』』

にやはは～、と後で笑うウイズ。

だが、これでひとつはつきりしたことがわかった。

言葉遣いはふざけていて、なおかつ外見は少女だが、並の魔術師ではないことが。

「なら次はおれが相手だツ！！」

ライトニングの攻撃を受けて体がしごりれてうまく動けないタイガに続いてラピスが短剣を持ってウイズに立ち向かう。

「キミはこれでどう？」

再び杖に魔力を込める。

すると、ウイズの周りに氷柱が発生し、ラピスめがけて発射される。

「なツ！！」

計5発。

3発までは持ち前の盜賊としての技量なのか、アクロバティックな動きでかわした。

だが4・5発目は左足と右脇腹をかすれる。

「くわッ。」

足をやられ、バタリとその場に倒れてしまつラピス。

先ほどの魔術は『「ワールド」「ードル』である。

「にやはははは～ 次は誰かね？」

「なら俺様が相手をしてやるよツ！！」

ティレクはそう言つと槍に魔力を込める。

「真空衝撃波ツ！！」

ティレクは一度剣を鞘に收め、そして一気に鞘から剣を抜き衝撃波をウイズめがけて飛ばせた。

「なかなかなんだけねえ～。」

杖に魔力を込めると、ウイズに当たるかどうかといつといつで不可視の壁に当たり消えうせた。

「『シールド』だと！？」

「何も攻撃するだけが能じやないからね～。」

そう言つと、ウィズはティレクめがけて雷を落とす。タイガと同じ

『ライティング』だつた。

「つう！」

身体を電気が伝い、うまく動けなくなつたティレクはその場で倒れる。

「次はあ～・・・・・キミだけだね。」

ウィズはミラージュを捉える。

ミラージュはすでに戦闘体勢に入つてた。

「こくわよッ！..！」

ミラージュは一気に踏み込んでウィズめがけて走り出す。

「・・・・・ふ。」

ウィズは口を緩ませると、再び『シールド』を展開する。

「はあああああああッ！..！」

渾身のパンチッ！..！

ガツキイイイイイイイ

だが、ミラージュの渾身の一撃はウィズに届かなかつた。

不可視の壁『シールド』を破るだけの威力が足りなかつたのだ。

「女の子なのにすごいパンチだね。すごいけど・・・・私にはか

なわないみたいだね」

「く・・・。」

苦虫を噛み潰したような表情になるミラージュ。

「コールドーラルウー

とつさに下がるミラージュ。

だが無情にもその攻撃はミラージュの身体を裂く。

両腕、右脚、頬、そして右脇腹に氷柱が直撃こそしなかつたもののかされる。

「こつづく・・・。」

全身を襲う痛みにミラー、ジユはその場に倒れこむ。

「いやははは～ やっぱり私って強い～」

自分で自分をほめるウイズ。

だが、この圧倒的強さ。ウイズの行動もわからなくもない。
4対1であるにもかかわらず、ウイズは4人とも地面にねじ伏せた
のだ。

「いやはッ 痛いのももう嫌でしょ?だから、とどめをさしてあげ
るヨ～」

ウイズは田の前に倒れている一行に、そう言つのだつた。

第29話～セルリア奪還戦15 魔女の恐怖～（後書き）

ライトニング

雷系初級魔術。

対象の敵に一筋の雷を落とす。

コールドニードル

氷系初級魔術。

自分の周りに計5本の氷柱を発生させ、相手に向かって飛ばす。

シールド

補助系初級魔術。

自分の周りに不可視の壁をつくり、敵の攻撃を防ぐ。

魔女、ウイズはそう言つとタイガたちとの間合いを少しどる。そして、ウイズは杖を構えると足元に魔法陣を展開させる。呪文の詠唱をする気だ。

詠唱をする気だ。

三
二
〇

「それもこの魔女の能力から見てかなり強烈な一撃を持つ
净化の光よ。我が前に立ちはだかるものを聖の檻に閉じ込めよ。
・・・・・シャイニング・プリズンツ！！」

1

ウィズが詠唱を終えると、タイガたちが倒れている場所に魔法陣が現れ、無数の光がその魔法陣の中に降ってくる。

1

絶叫。それも断末魔にはるかに近い。

尽くすほどの熱があつた。

その熱に身体を焼かれる痛烈な痛みをタイガたちを味わった。

強いなんてレベルじゃなかつた。

どう考えても現在のタイがたちは歯が立たない相手だつた。

あります。お

う う う う う

からうじてタイガはまだ意識があつた。

が氣絶している。

「でも、まだ意識あるんだねえ）。体力は見かけによらずバリバリあるつて感じ？」

その言つばイズ生

「そう言うウイズも見かけによらず恐ろしく強い。」

アリが一匹になつても象に立ち向かおうと立ち上がり得物を構える。

「へえ～。おまけに立っちゃつたりもできるんだ～。」「へえ～、とばかりウイズは感心する。

「はああああああああああツツ！！！」

タイガは走る。それも並の速さではなかつた。

肉眼で追いきれるかどうかといつぶらこの速さ。

「つを！…」

その速さに驚きを隠せないウイズ。

やばいと思ったのかシールドを身の回りに展開させる。

「爆裂突刃破ッ！！」

ウイズ・・・のシールドに渾身の爆裂斬で攻撃する。

ピシ・・・

(にやんとお！…)

シールドにひびが入りやや冷や汗を流すウイズ。

そこに間髪入れずに突き攻撃を放つ。

パツキイイイン

ガラスが割れたような音がすると同時にウイズは突きの衝撃波で大きく吹き飛ばされる。

「うわああああああああああ

！…！…！」

そのまま『「メット・カリバー』に激突。衝撃波のせいで砂煙が発生。

「はあ・・・はあ・・・・。」

肩で息をするタイガ。

体力がギリギリの状態でタイガの持つ技の中で高威力を持つ剣術を使つたので、そのせいであろう。

やがて、砂煙が晴れると

「いつたあー。さつきのは効いたあー。」

「ウイズが腰をさすりながらよれよれと立つていた。

パツと見た感じ外傷はほとんどない。

「そんな・・・。」

自分の手持ちの技の中で高威力の技を受けてもあの程度。アリがアリ専用のバズーカ砲を撃つたところで象にはかすり傷程度のものなのか。

絶体絶命。そう思ったタイガ。

一方ウイズは『コメット・カリバー』を見てなにやら考へている様子。

そして・・・

「このまま叩きのめしてあげたいけど、こんなデカイの私一人で持ち運べないから今回は引き返すね~」

そんな一言を言うと、ウイズは突然その場から消える。

『『空間移動』か・・・。』

だが助かつた。感謝すべきは『コメット・カリバー』の大きさと言つたものか。

おーいッ！タイガーッ！！

遠くで自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

振り返つてみるとシャープが走りながら手を振つてこちらに向かってきているところだつた。

やがてタイガのところへ来る。

「はあ・・・はあ・・・まつたく、こちらも大変だつたんだねえ~。」

「

息を切らしながら言うシャープ。

シャープの身体にはいくつもの傷跡があった。

「シャープこそ、あのジークなんとかって人に苦戦していたようだね。」

未だにジークフリートの名前を覚えていないタイガ。

「まあとにかく。通信で『ラグナエース』を呼ぶからちょっとまつといてくれ。」

シャープは通信を『ラグナエース』に入れ、艦長と話し始めた。

(あ、そうだッ！)

タイガは思い出すとすぐさまセルリアの元へと駆け出す。

セルリアは『コメット・カリバー』の中にいた。

『コメット・カリバー』とセルリアと分けて運ぶのは面倒だったのだろうか。

幸い、セルリアに何にも外傷は無い。

「・・・・ふう。よかつたあ。」

無事を確認すると、タイガは安堵の息を吐いた。

第30話 セルリア奪還戦16 奪還（後書き）

シャイニング・プリズン

詠唱文：浄化の光よ。我が前に立ちはだかるものを聖の檻に閉じ込めよ。

説明：光系中級魔術。

対象の敵の足元に魔法陣が現れ、無数の光を魔法陣内に降らせる。

爆裂突刃破
ばくれつついじんぱ

最初爆裂斬で攻撃し、その後突きの衝撃波で大きく吹き飛ばす。

第31話／真夏のミステリー／＼

あの後、セルリアを念のため医務室へと連れて行つたが特に異常はないらしいとのゴルドー。

セルリアはあれから数日がすでに経つてゐるが、特に変わったこともないので「ああ大丈夫だ。」と誰もが思つていた。

それとタイガたちはジークフリートを雇つた人物は魔術師ウイズだということを艦長であるカイルに言つた。

そのときウイズは一度戦つて『空間移動』で逃げたことも同時に伝えた。カイルはその人のことを調べると言つてタイガたちの報告は終わつた。

それはそうと、今回の話に入る。

開かずの扉。

学校の七不思議とかにもよくあるものである。

そして、この『ラグナエース』にも、そんな場所はあった。

「・・・・・。」

『ラグナエース』第4階層。そこにそれはあった。

そしてその前に現在タイガが立ち止まっている。

扉の前にはなぜか『開けてはいけません』ではなく『艦長ヴァ力』と書かれた紙が貼られており、艦長にその部屋について聞いてみると・・・

「艦長。第4階層にある『艦長ヴァ力』って書かれている部屋はなんですか？」

「あの扉は開けてはいけないよ。あの扉を開けるなり警報装置が作動して謎の魔法陣が現れた後女装をした50歳サラリーマンの男性が現れ『何見てんのヨツ！』と言われた後自分も女装への道を歩まなければならなくなるぞ。」

と、むちゅくちゅなことを言つたので今は開ける気がしない。

それともちゅくちゅ・・・・・・というよりはおかしなことがもうひとつあった。

この艦内、広いことは広いのだが乗員がけつこう少ないの普段はガラーンとしているのだが、なぜか食事・・・・それもちゅうど朝食、昼食、夕食のときだけやたらと多いのだ。

別に食堂が狭いわけではない。

タイガの知る限り、十分すぎるほど広い・・・・はずだが、ある程度の時間がくると満員。それ以上。

これは、そんな疑問を感じるタイガ・ウナバラの勇気の体験談である。

第31話～真夏のミステリー～（後書き）

空間移動

魔術師じゃなくても使える技。

空間に穴を開け、別の場所へ一瞬で移動できる。

例えるならドラ もんの通り抜けループみたいな感じである。相当な強者でないと使えない。

第32話／真夏のミステリー②

とつあえずお腹が減ったのでタイガは食堂に入る。

現在時刻は12：00。食堂はややがらんとしていた。
乗組員はタイガの知っている限りこれをもう少し足したくらいだった
ので気にしない。

「お、タイガじゃねーか。」

「ん、ラピスか。なんだい？」

「おまえ腹減ったからここに来たんだろ？一緒に食べようかと思つてな。」

「あ、うん。別にいいよ。」

「・・・ねえ。ラピス。」

「あ、なんだ？」

ここにタイガは、『ラグナエース』で暮らしていく気になつてこのことをラピスに言つた。

「ふうん。確かに妙だな。言われてみれば確かに食堂に来るやつら、
やけに多いよな。」

ラピスは注文した蕎麦をすすりながら言つた。

「でしょ。現に今だつて・・・。」

タイガは周りを見渡すのでラピスもそれにつられて見渡す。

現在12：30。タイガたち食べている間に、いつの間にか食堂は人であふれかえっていた。

「・・・・どこにこんなにいるんだよ。ホントに。」

「居そつな場所なり、心当たりがあるんだよ。」

「え？」

「いじだよ。」

第4階層。『艦長ヴァ力』と書かれた紙が貼つてある扉の前へとラピスを招待する。

「・・・んで、なんでおめえはあけねえんだ?」

「いやあ。艦長が言うには『あの扉を開けるなり警報装置が作動して謎の魔法陣が現れた後女装をした50歳サラリーマンの男性が現れ『何見てんのヨツ!』』と言われた後自分も女装への道を歩まなければならなくなるぞ。』らしいから・・・。」

「意味わっかんねーけど、実際にそうなつたら確かに嫌だな。」

「て言つからラピスは女でしょ? 女装させられても別にいいんじゃないの?」

ド「オッ

女性からくじだされたとは到底思えないほどの痛烈なパンチがタイ

ガの腹にヒット。

「バツカ野郎ッ！！おれは他のやつらがはいているような『すかあと』とかそういうのは着ねえ主義なんだよッ！！」

確かに、この暴力的かつ雑かつこの男のようなしゃべり方・・・・。それに『スカート』なんざはかせた田にはそれこそ男性が女装しているように見えてもおかしくない。

幸い、このラピスにはそんな純粹かつピュア（意味がかぶつてる気がするが）な乙女心というものは皆無と思える。

「だいたい、そういうおめえこそ姿容が女みてーじゃねーかよッ！おめえこそ女装しやがれッ！！！」

「な、僕は男だッ！！」

「男だから女装しろっていつてんだよッ！！『艦長ヴァ力』とやらがこの扉を開けるなり女装させられるって言つんならとっとおめえが開けやがれッ！！！」

「僕は女装なんてしたくなあああああああああああああいッッ！！！」

「おれだつてガラジヤねえゼッ。」

結局、ラピスに開けさせようと少しばかり考えてたタイガの計算は大きく狂わされたのであった。

（ひなつたら今日の夜、この扉を開けてやるッ。気になるし。女装せられるのはいやだけど死にはしない。・・・・たぶん。）

第33話／真夏のミステリー 3)

23：00。

第4階層を目指して一人の青年が立ち上がった。

優男で女性のような顔立ちをした青年、その名もタイガ・ウナバラ。彼は、女装への道を歩むために、『艦長ヴァカ』の扉を開けようとしている！！

ドゴッ

・・・・彼は、その扉の秘密を知るために、『艦長ヴァカ』の扉を開けようとしている！！

通路は節電のためか蛍光灯があまりついてなく、薄暗い。

真夜中の病院の通路のようである。

その通路をツカツカと歩むタイガ。寂しく通路にタイガの足音が響く。

そして第4階層に足を踏み入れようとしたそのとき、

「おい。」

「…………！」

突然背後から声をかけられ、大きくビクウ、と身体を震え上りせる。心臓バツクンバツクンの状態のまま後ろを振り返ると、

「よお。」

懐中電灯を自分の顔に照らしている女性が一人。

「・・・・ラピスか。なに？」

「けつ。少しぐらい驚けよ。」

「背後から肩をたたかれたときのほうがよっぽど怖かつたけど。」

そう言わるとラピスは自分の顔を懐中電灯で照らすのをやめる。

そして、タイガが驚かなかつたのがよつぜんまらなかつたのが、

「そうこうおめえこそ、何してんだよ。」

やや突つ張つて言つラピス。

「僕は第4階層の『艦長、ヴァ力』の扉を開けようと思つて。」

「お。女装する気になつたか。」

「いや、ならないって。」

ツツコ!!。

「まあ、実をいうとあれもその扉を開けようと思つてな。」

「ラピスこそ、つこにスカートでもはく気になつたのかい？」

「なつてねえよ。」

ツツコミの代わりに顔面パンチ。

「・・・・とにかく、僕たちの考へてることとは一緒か。」

「よし、だつたら一緒にいこうぜ。どつちが女装させられても恨みつこなしこう条件付きで。」

「いいよ。本当に恨みつこなしだからね。」

こつじして2人が合流して、例の扉の前へと向かつ。

(へへつ。女装させられそつこになつたらこつを身代わりにおれは逃げてやるぜ。)

(ふふつ。ラピスには悪いナビ、女装させられそつこになつたら身代わりにしてやあつと。)

2人の腹黒ヤ、ここに在つ。

『艦長、ヴァカ』と書かれた白い紙が暗い通路の中でなぜか輝いて見える。

艦長の前で言つたらどうなるやう。

「よし。開けるぞ。」

「うん。」

ラピスが扉を開ける。そこには・・・・・

ズラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

يُ يُ

• • • • •

・・・・・と、全身黒タイツに黒マスクをかぶつている人間がッ！

! • ! • ! • ! • !

真夏のミステリー。

第34話「ガスマスク」

「何事だッ！」

「すゞい悲鳴が聞こえましたけど・・・。」

タイガたちの元へと駆けつけてくるカイルとセルリア。タイガたちはと言つて、衝撃的なものを皿にして腰を落として口をパクパク。

「あれ？この部屋って開かずの扉じゃないですか。」

「あゝ。開けちゃったんだ。」

「開けちゃったんだ、じゃないですよー艦長、これはなんなんですか？」

よつやく言葉にするタイガ。

部屋には全身黒タイツに黒マスクをかぶった人々。まるで戦隊モノの番組でよくワラワラ出てくるザ「敵のような人々が全員同じポーズのままこちらを向いているのである。

「なにがあるんです・・・・・・か。」

部屋の中を覗き込むセルリア。

「・・・・・。」

バタン

「うわッ！セルリアが倒れたあ！！」

セルリアにとつてよほど衝撃的だつたのである。彼

ものの数秒で現実から田をそらすために自ら気絶した。

「おいおい艦長さんよおッ！そんなことよつこれはホントになんなんだ！－」

ラピスもよつやく言葉を出す。

「おいおいーどうしたんだい、みんな。」

「つたぐ、目が覚めちゃつたじゃない。」

のちにシャープとミラージュもタイガたちの元へやつてくる。

「つて、なんでセルリアは気絶してんの？」

タイガの腕の中で倒れているセルリアを指差して言つたミラージュ。

「セルリアってこんな役ばつかだねえ。・・・・・といひで、開か

ずの扉が開いてるじゃないか。アタシにも見せてもらひよ。」

「あツー！シャープ！！！」

止めようとするタイガ。だが時すでに遅し。

「・・・・・・・」

その後、停止。

「どうしたんですか、シャープさん。」

ミラージュも中を覗き込む。タイガとラピスはもう何も言わない。

バタン

覗いてコンマ一秒で倒れるミラージュ。

残念なことにタイガはセルリアを抱えているので受け止めるものがおらず、そのまま後頭部を床に激突。

「・・・・・あ、艦長。」

タイツ人間の1人がカイルに話しかける。

抑揚がなく、ほぼ棒読み。

「艦長！これで3回目ですけど本当にこの人たちはなんなんですか？」

「ん~。・・・・・簡単に言えば、戦闘員だね。この船が危なくなつたら出動するんだけど。」

「危なくなつたらつて、じゃあ前のスライムが侵入してきたときと

か、ラピスが盗賊で侵入してきたときはどうしてでてこなかつたんですか？」

「スト中だから、俺たち。」

タイツ人間がタイガの疑問に答える。

ストリーチ

「それで艦長、俺たちの望み、聞き入れてくれるんですか？」

批揚がなく、かづ棒読みでカイルに聞こ。タイツ人間先ほどから同じタイツ人間がしゃべっているのだが、リーダーなのだろうか。

「いふて何なげた」

いや、この戦闘員の人たちが、ガスマスクかほしい。さて言つて聞かないんだ。

ガスマスク！？

「ガスマスクは俺たち戦闘員のロマンです。ガスマスクあつてこそ、戦闘員は初めて戦闘員を名乗れるのです。タイツにガスマスク。これぞ戦闘員のロマン。」

（（で、それだけのために））いつらストライキしてんのかよ！）
ばかばかしい理由にラピスは心中でツッコむ。

「ガスマスクは口マサ。」

「ガスマスク最高。」

「ガスマスクGreat。」

ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！

ガスマスクコールが『艦長ヴァル』の部屋の中で響き渡る。

「・・・・・」

無言で扉を閉めるカイル。

中で無情に響くガスマスクコール。

「・・・・・さて、寝よう。」

「あの、艦長。」

「寝よう。」

「・・・・はい。」

有無を言わさないカイルにタイガたちは従うこととしたのだった。

第35話 次の目的地

「ふああ。よく寝たあ。」

それにもしても昨日のアレはすごかつた。
部屋にみつちりとかつ、ズラ～と同じポーズで並んでいる戦闘員。
あれがクローン人間のなれの果てかと思えるくらいだつた。クローンじやなかつたけど。

タイガはます 朝食を食べるため そしてその後ブリッジへと入る。

「ああ、うちはひ。タイガ。」

背を向けていたので振り返つてあいさつをするカイル。

オペレーターの1人がカイルに何かを問う。

「二ちゃん、そうたなあ。」

「まあね。」

やや深刻そうな顔をするカイル。

「実は、『テケナエース』の燃料が切れかけてたね。」

道具・・・その他もうもう。

オペレーターも揃つて深刻そう。

そこに敵がやつてきたら・・・。

(· · · あれ?)

ここでタイガは一つ疑問を抱く。

「艦長、質問があるんですけど。なぜ艦長たちはこんな母艦を引き連れて旅をしているのだろ？」

「ん? なんだい?」

「艦長は何をするためにこの母艦で旅をしてるんですか?」

「あ～・・・・・。時期が来たら話すよ。」

結果的に答えになつてなかつた。

「よほど他人に言えないことなんだらうか。」

「艦長。どうします?」

「え、ああ。近くの惑星で補給をするしかないね。この辺りで一番近い惑星は?」

「え～と・・・・。惑星『スレイニア』ですね。」

惑星スレイニア・・・・・ タイガとティレクがかつて行こうとしていた惑星だ。

「よし。じゃあそこで補給をしよう。田的で惑星『スレイニア』にセント。」

「了解。」

オペレーターの様子を見てから、タイガへと振り返る。

「まあ。何度も言つよつだけど気にするなよ、タイガ。」

「え?」

「少しばかりつらい顔してたぞ。」

「この人はすごい。」

タイガの心情を振り返った瞬間、いや振り返る前からわかっているようだつた。

タイガ自身も、もうあのことは気にしないでいるつもりだったのだが、カイルの前では通用しなかつた。

「・・・・・大丈夫です。もう。」

「そうか。なら、船はもつみんなのところへ行つたらどうだい? ちよつびこにこに来るとき、ピロティ辺りで見かけたけど。」

「はい。やうします。」

過ぎたことをいつまでも後悔してられない。

せめて今自分にできることとは、もう2度とあんな悲劇を起こさないように行動することじやないのか。

そう思いながら、タイガはブリッジを後にした。

第36話～ちよつとした会話～

「ていうかおめえらの仕事楽すぎねえか？仕事のとき以外はいつもやつておしゃべりとかよ。」

「まあねえ。言われてみれば確かにね。でも楽なことはいいことサ。

」

（あ、本当にいた。）

ピロティにはティレクを除く全員がお菓子をつまみながら会話をしていた。

「あ、ウナバラさん！よかつたらこっちに来ませんか？」

セルリアがタイガがいることに気づくと、他のメンバーもタイガを見る。

「そ、う、よ。レーティの誘いにのらないなんて失礼よ、タイガ。「いや、まだ断つてもないんだけど。」

ミラージュにツッコむ。

「それで、アタシたちの誘いにはのるのかい？」

「まあね。暇だからのらせてもらおうかな。」

タイガは、手ごろな空いている席に座ると机の上に並べられているお菓子をひとつ食べる。

「それでは私、ウナバラさんの紅茶を入れてきますね。」

「うん、ありがとう。」

タイガにそう言わるとセルリアはスマイル〇円をしてから紅茶を入れに一時その場から離れた。

そして、完全にセルリアの姿がピロティから見えなくなる。

「・・・・なあ、タイガ。」

「なに？シャープ。」

シャープは紅茶を一服すると、

「单刀直入に言つけどサ。」

「…………うん。」

タイガはお菓子をひとつまみいただく。そしてそのまま食べる。
「セルリアの」とビリビリ思つてゐるんだい？」

ブ

！――ゴホガヘ・・・

「ちゅッ！汚いわよ、タイガツ！――」

ミラージュ一喝。

タイガはそのままなぜかむせこむ。

「な、なんでいきなりそんなことを！？」

「いやあ～。セルリアってわあ、タイガのことずっと『ウナバラさん』だろ？タイガとしてはビリビリ思つてゐるのかなあ～てサ。」

「べ、別に。どうにも思つてませんけど。」

「それはそれでどうかと思つぜ、おれ。」

「たしかにね。」

「だつて、実際そつなんだからしようがないでしょ――」

「ふ～ん。あつそ。」

シャープはやや意地悪つぽく口元をゆがませる。

「それじゃそのこと、セルリアに報告してもいいんだねえ？」

「あ、いや・・・。それは困るッ――とこつか・・・。」

徐々にじどるもどるになるタイガ。

それをみてなぜか満足そうなシャープ。

「ま、それは止めといてやるだ。いい反応見れたしね。」

「ひ、ひどッ――まさか初めっからからかうつもりだつたんですか
あ――？」

「『』答へ――」

そんな会話が終わったとき、ちゅうびセルリアがタイガの分の紅茶とお菓子を持って来た。

「おッ！セルリア、おしかつたねえ。」

「え、何がですかシャープさん。」

「いやあ。ついさっきまでタイガがね

「わあああああああ！！ストップウウウウウウウツツ
プライバシー侵害だああああああああ！！！！！」

ピロティ中に響くタイガの声。

いやあ、実に平和である。

第37話／スレイミニア

（ふう、なんとか話をそらすことができたあ。）
心の中でほつとひと息なタイガ。

さきほどまでの【タイガはセルリアのことをどう思つてるのか?】
といふ話をタイガの華麗な話術・・・・ではなく超強引な会話の
そらし方によりなんとかセーフだつた。

ちなみに現在のテーマは【戦闘員】である。

「いやあ、すごかつたよな、アレは。」

「アレつてなんですか？」

ラピスに聞き返すセルリア。

一度誘拐された身だったが、もつ大丈夫らしい。

「アレつて言えればアレだよ。昨日の夜中の第4階層の『開かずの扉』

。

「『開かずの扉』がどうかしたんですか？」

・・・・・じうやうあまりのショックで記憶が消去されていくよう
である。

だが、そのショックな出来事を強引に思い出させるのはかわいそす
ぎるとセルリアを除く一行が思つたのか、『戦闘員』の話題は黙認
で終了となつた。

「あ、そうそう!次の目的地が決まつたらしいよ。」

【タイガはセルリアのことをどう思つてるのか?】といふ話題に変
えられないように即座に次の話題に切り替えた。

「へえ、で、どこのよ。」

「惑星『スレイミニア』だつて。艦長が言つては物資の補給と燃料補
給のために行くらしよ。」

「物資の補給か。言われてみれば確かに、最近食堂で泣かれるお
かずが少しばかり少なくなつてたよな・・・。」

「そうなの?僕は気づかなかつたけど。」

「ほら、ミラージュはねえ、ああ見えて大食漢なんだよ。」「シャープさん。何か言いました？」

「いんや。べつにいー」

ミラージュの目がキランと光ったのでシャープはそれ以上言わなかつた。

続いてタイガにその目が向けられたが、タイガも目で「いや、何も聞いてないって！ 本当だつて！ 信じてよ……ミラージュが大食漢だつたなんて話聞いてないからッ！！」と訴える。

「タイガ。後でトレーニングルームまでいらっしゃい。」

にっこり笑顔・・・・・そしてこめかみには血管が浮き出で・・・・。

「・・・・・・・・。」

「返事は？」

異様なミラージュの迫力に、タイガは首を縦にぶんぶん振る。それはもう首が取れるんじゃないかってほど。

そのあと、よろしいとばかりに満足げな表情になるミラージュ。

「や、それより『スレイニア』って、ラピスさんのラストネームと同じですね。」

「・・・・・！』

セルリアの言葉にピクリと眉を動かすラピス。

「あーそう言えばそうだね。」

「ぐ、偶然だろ。」

「実は王女・・・・・とか？」

「だから偶然だろ！ そんな惑星『スレイニア』となんて、おれは縁もゆかりも無い！！ 断じてッ！！」

力説で否定しまくるラピス。傍から見れば怪しき100%である。

「ほんとかねえ～。」

疑り深い目でラピスを見るシャープ。

「ほんとだつーのツ！ しつけーぞ！ ！」

「やうやつて思い切り否定しまくるから怪しいんだつて。」

「・・・・・！」

タイガに言われ、黙るラピス。

「でも、久しぶりにこの船から外に出られるってわけよね。」

「え？・・・・・うん。たぶんね。」

出られるかどうかはまだわからないが、あの艦長の性格からしてそうなる確率は高いだろ。」

「やつたあッ！…それじゃあたし、ブランド『品買』いまくるわよ…！」
「だったらアタシも、久しぶりに武器でも買こあせつてみようかねえ。」

「み、みなさん。まだおりれるって決まったわけじゃないですよ。
「な」に、言つてるのセルリア。あのカイルの性格から考へるとほぼ100%おりられるわよ。」

「・・・あれ？氣づいたんだけど、ティレクはどう？」

「ここまで会話してようやくティレクがないことに氣づくタイガ。
「ああ、アイツなら格納庫じゃないのかい？スピルと色々話したいつて言つてたし。」

スピルか・・・・・。そういうえば一度会つたきり会つてないなあ。

「それじゃあ僕も格納庫へ行くよ。ぼくもスピルと話したいし。
「ああ。行つといで。」

第38話／襲撃任務

「……てな感じで『スペース・フォース』を盗むのを失敗しましたあははは……。」

と、反省をしているつぼさゼロの口調で魔女ウイズは報告を済ませる。

「まあいいよ。タイガ・ウナバラをおびき出すための餌だつたんだからね。」

と、銀色の髪をした少女が言った。

惑星『カムラン』。あたり一面が砂で覆われ、水一滴すらない死の惑星。

また、かつての人間たちの母星もある。

母星を捨て、別の惑星に移住するようになった人間たちにとって、この『カムラン』ははつきり言って用済みだった。

その『カムラン』にひとつ大きな塔が建てられており、そこに彼らはいた。

「餌にしても、随分とでかい餌でしたけどね。」

「まあ、セシル。でも、残念ながら記憶は戻ってないようなんだ。」

「だつたら、もつとどでかい衝撃を『えたらどうです?』

紫色の髪をし、背中に槍を背負っている青年セシルが銀色の髪の少女にそう言つと、

「そうだねえ。……ジン、現在タイガ・ウナバラが向かっているさきはどー?..」

「『スレイミア』だ。」

淡々とした口調でそう述べる黒髪の青年ジン。彼の両手にはガントレットが装備されていた。どうやら格闘術士のようだ。

「『スレイミア』かあ。そう言えばこの前墜した船も、『スレイミア』行きの船だつたね。」

「はい。そうです。」

と、セシル。

「よし。今度は『スレイミア』に着陸したときに攻撃でも仕掛けようか。今度は前よりでかいのをね。」

「ルシアちゃん、私行きたい！」

小学一年生みたいに、はいはいはーいとばかりに手を上げるウイズ。

「いや。ウイズは今回はお休みだ。」

「ふー。」

「オーガナイト、セシル。」

銀色の髪の少女が名前を呼ぶ。

「はい。」

「俺たちの出番か、ルシアさんよおおおおおおおおおおおおおおツツ！！！」

「オーガナイト。少し黙りなよ。・・・・・それでルシア様。ぼく

たちにその任務を？」

「うん。まかせるよ。タイガ・ウナバラだけは殺さないでよ。ショックが足りなかつたらタイガ・ウナバラの仲間を殺してもかまわないよ。」

「はッ！」

セシルと全員鎧で身体を装備された男オーガナイトはそう言つと『空間移動』で姿を消した。

魔女ウイズ。

人斬りセシル。

豪腕のオーガナイト。

疾風のジン。

それら4人の上にたつ者の名を、彼らはルシアと言つた。

550年前、『崩壊戦争』の英雄と謳われた者の名前と同じ。

第38話「襲撃任務」（後書き）

セシル・レイス

年齢 20

性別 男

職業 槍使い

一人称 ぼく

とある機関の最高幹部の1人。

紫色の髪をした青年で、槍使い。

通称「人斬りセシル」。

オーガナイト

年齢 30

性別 男

職業 大剣使い

一人称 俺

とある機関の最高幹部の1人。

全身鎧で装備をしている。身の丈は2メートル。

通称「豪腕のオーガナイト」。

紅 ジン(くれない じん)

年齢 17

性別 男

職業 格闘術士

一人称 オレ

ウイズ、セシル、オーガナイトと同じ機関の最高幹部の1人。

冷静沈着で、淡々とした口調で物事を言う黒髪の青年。

通称「疾風のジン」。

ルシア

年齢 15

性別 女

職業 ???

一人称 ボク

ウイズたちを従えている銀色の髪の少女。

タイガを狙っているようだが、現在その目的は不明。

第39話（脳味噌筋肉野蛮）怪力女・・・

「」は格納庫。

そこでは現在、『スペース・フォース』のメンテナンスが行われているところだつた。

「お、タイガじやないのよ。」

タイガを呼ぶ声。そこにはティレクとスピルがいた。ちょうど、他の整備員たちの邪魔にならないような場所に。

「やあ。ティレクにスピル。」

歩み寄つて話すタイガ。

「全く、いつ来てくれるのかと思つてたぜ。同じ船の中にいるのになかなか顔ださねーもんなあ。」

「いやあ、それは仕方ないよスピル。だつて、」のところ盗賊侵入してくるわ、セルリア誘拐されるわで会える時間が無かつたからね。」

「ははは・・・。たしかに言われてみりやあそだよな。」

「ところでタイガ。さつきまでどこ行つてたのよ?」

と、ティレク。

「え?ああ、さつきまでみんなのところにね。」

「みんな?・・・・あ~。シャープお姉さまとセルリアちゃんとラピスと・・・・あの怪力女のとか。」

「ティレク。セルリアはギリギリOK、ラピスは普通と考えて・・・・なに?その呼び方。」

シャープお姉さまに・・・怪力女。

怪力女は、消去法で考えてミラージュのことであろう。

「いやあ。だつてよおシャープつて姉貴つて感じじゃねーか。そんで怪力女はそのまんま。本当は脳味噌筋肉野蛮怪力女だったんだが、おまけにおまけして怪力女になつたんだよ。あえて言つなら(脳味噌筋肉野蛮)怪力女だな。」

（）をつけただけだが。

「……こまのを//ハーディに書つたらどうなるだらうね、ス

ピル。

「あの姉さんのことだ。ティレクをそれはもう・・・・・例えよ
がないくらいにボコボコに。」

「してあげるわ。」

男たちの会話の中に突然乱入してきたミラー・ジユ。

「……………」

驚くタイガ。そりやそつだわ。

「まああんたに用があつてね。・・・・・それより、色魔男。やつ

さあてのあなたじの叫び名には、セリム

それも殺氣立つ。

「え？ あ～…………【H耳】でしょーか、// ハージュ様。

冷や汗を滝のように流すティレク。どうやら本人の前では言ったことがなく、陰口で言つてゐに過ぎないようだ。

さて。楽しいショータイムを始めましょうか、ティレク。タイトルを付けるなら『ブリッジ・バー・ティー』を。

それを聞いてどんどん顔を青ざめていくティレク。それから震えだすティレク。

だがそんなことはおかまいなしに、震える子猫の首根っこをつかむ
よしにティレクを引きずつていぐ//ワーディ。

そしてそのまま格納庫から姿を消していった。

「あ、ああ。暇があったらティレクの様子を見てやってくれよ、タ
イガ。」

「תְּנוּנָה」、「עַמְּלָה」

タイガはそう言つと格納庫から出て行つた。

そう言えば、ミラージュの用件ってなんだつたのだろう？

第40話～「リージュさん、性格変わつてますよ。」

トレーニングルームの中からすさまじい叫び声（しかも断末魔っぽい）が聞こえてくる。

その叫び声と一緒に「オーッホツホツホツ！！！！泣けッ！！喚けッ！！自分がいかに馬鹿な呪詛を言ったのかとくと反省するがいいッ！！」と、言葉遣いが存分に変わっているマーティンの声も聞こえてくる。

到底入れる雰囲気じゃないと思つたタイガは、リハーサルの用件とやらを後回しにする」とこじよつとするとき、

「ふははははははははははツツツツツツ。呪詛を。呪詛を言つた」とをとくと後悔するがいにツツツツツツ。」

תְּנִינָה תְּנִינָה תְּנִינָה תְּנִינָה

・・・・ズシヤ、メキメキ、・・・・ボキツ

「かんちょ～。」
「お、タイガか。」

(ニヤ～！？)

他の音はわかるとして、『ニヤ～』はなんのだらうか？
中をのぞきたい気もするが下手をすると自分が自分でなくなるような
な気がして仕方がないタイガ。

謎の物音（？）を気にしつつ、トレーニングルームの扉前から去る
ことにした。

・・・・ニヤ～。

シャープは剣術の修行。セルリアは倉庫の当番。ラピスは自分の得物の手入れ。スピルは『スペース・フォース』のメンテナンス。ゴルドーはさまざまな医療器具の点検をしており、ティレクとミラー ジュは……現在大変な状況。

結果的に行き着いた場所がブリッジ。

ちなみに、カイルが艦長なのに一番暇そうだからここに来たというのはふせている。

「ちょうどよかつた。あと10分ほど惑星『スレイニア』に着く よ。」

「へえ。そなんですか。」

「…………ところで、みんなはどうしてるか知ってるかい?」

「えうつと……。」

かくかくしかじか……。

「ふうん。他はともかくティレクはたいへんだねえ。」

それだけで済まされるのか。

「それじゃあ僕はちょっとミラージュに用がありますので……。」

「うん。せいぜいティレクの一の舞にならないようだ。」

たぶんならない。

きっと……たぶん……願わくば……。

第40話～//ワーディーさん、性格変わつてますよ。～（後書き）

スレイミア

惑星の名前。

5：5の比で陸と水があり、陸の70%が草原。

気温は1年を通して最低10度前後、最高25度前後といった感じ。

経済的にも豊かで、貧富の差がほとんどない。

貧しいものには、この惑星を統治している王様がじきじきに手を差し伸べているので、民間人から絶大な支持を集めている。

第41話／サンドバック

再びトレー一ングルーム前。

先ほどの騒がしさがうそのように静まり返っていた。

・・・・・終わったのだろうか。

終わつたつて何が?と聞かれるとそれはもう・・・・ミラージュのサディスティックモード(タイガ命名)とか、ティレクの命とか・

・・その他もろもろ。

「し、しつれ~します~す。」

おれるおれる扉を開けると、

「あら、タイガじやない。どうしたの?」

と、運動に適した服装に着替えたミラージュが、トレー一ングルームの中心にぶら下がつているサンドバックをボ「ボ」口と殴つていた。

「え、あ~いや。じつは・・・・・・・・・・・。」

と言いながら部屋を見渡すと、ちょうど部屋の端っこにやや黒ずんだ赤い液体が付着した服が無造作に置かれていた。

「・・・・・あれ?」

そのいわくありげな服を指差すタイガ。

「ああ。あれね・・・・・・・・・トマトジュースがこぼれたのよ。」

そのトマトジュースが入つていたと思われる容器がないんですけど。再び部屋を見渡すと、いわくありげなミラージュ曰く、『トマトジュースがかかつた服』のちょうど逆の隅っこにサンドバックが置かれていた。

・・・・・あれ?

サンドバックつて、真ん中にぶら下がつて・・・・・。

「のうわああッ!――!――!――!

突然大声を出すタイガにびくつとするミラージュ。

「ど、どうしたのよ。急に大声なんが出しちゃって。」

「あああああああああああああれ・・・。」

口をパクパクさせながらぶら下がっているサンドバックを指差すタ
イガ。

サンドバックの中には本来砂かその類が入っているものだが・・
・・なぜか人の形が。

「ああ、あれね。人型サンドバックよ。」

ミラージュが言つてゐる矢先から人型サンドバック(ミラージュ曰く)
はもぞもぞと動いていた。

「あの。サンドバックつて、動かないよね?」

「・・・・・電動式なのよ。」

「お~い。」

サンドバックの中から弱々しい声が・・・・。

「サンドバックって、しゃべらないよね?」

「・・・・・音声付きなのよ。殴ると・・・。」

ドゴオツ

「・・・・・品種改良してつくりられた血味のトマトで作られたトマトジュースだからよ。」

「・・・・・・・・・。」

「」

「」

「」

「」

「」

ピンポーン

「まもなく、惑星『スレイニア』に到着します。まもなく・・・・・。

「」

と、放送が流される。

「もう着くのねえ。それじゃあ、あたしはちょっと自分の部屋に戻るわね。」

そう言つてラージュは逃げるよつにトレーニングルームから出て行つた。

「・・・・・・・。」

気になつてサンドバックの中を調べてみると、虫の息のティレクが中からじょりと出でてくるのだった。

第41話～サンドバック～（後書き）

サディスティックモード

タイガ命名。

ミラージュがティレクをボコボコに殴っているとき性格が変わつて
いるときのことを言いつ。

トマトジュースがかかつた服

ミラージュ曰く。

だがほぼ100%血である。

サディスティックモードでティレクをタコ殴りにしてたときに付着
したものと思われる。

第42話～スレイミア到着、そして災難～

「ウイーズ。」

「はいはーい なになにルシア様。」

銀色の髪の少女ルシアに呼ばれ、返事をしながら傍へ寄つてくるウイーズ。

「キミにちょっと頼みがあるんだカビ。」

「なんですか？」

ルシアは耳を近づけるように手で顎図をする。

そして小声でその頼みを伝えた。

「りょーかいりょーかい もーまつかせけりゃつてくださいルシア様

」
そう言つとウイーズは『空間移動』でその場から姿を消した。

「さあて。どう出るかな、元英雄さんば。」

呟くように言つとルシアは砂塵が吹き荒れる外の景色をなんとなく見るのだった。

一方タイガたちは現在、惑星『スレイミア』に着陸していた。

『スレイミア』の首都『グリーンヴェル』。そこにタイガたちはいた。

建物はレンガでできたものが多く、ちょうど東西南北に首都の出入り口がある。

その出入口からそのまま直進していけば王様が住んでいる城へ直行できるよう、道路が整備されていた。

「いやあ～。この大地に立つ感覺、ひしひしひだねえ～。」

『スレイミア』の大地に足を踏み入れたシャープの第一声。

今まで『ラグナエース』の中にいたので生の大地の感覺が久しぶりに味わえてうれしいのだろう。

「まあね。それより早いとこ王様と面会に行こうよ。」

「全く、カイルのやつ。こんなときに限って仕事があるんだから。こういう仕事こそ艦長のカイルがやるべきでしょッ。」

やや不満&怒り気味のミラージュ。

「アンタが言うな。だいたいアンタのせいなんだから。ティレクを虫の息まで叩きのめしたせいでアタシたちが代わりに面会する羽目になつたんだからね。」

なるほど。要するにサンドバックから救出されたティレクは着陸と同時に病院送り。

その連れとしてカイルが行つたというわけか。

「まあとにかく。早いとこ終わらせればいいだけのことだつて。じ

やあ、行こうか。」

「いかねえ。」

そう言つたのはラピスだった。

「な、なんで？」

タイガが尋ねるが、

「行きたくねえんだよ。」

「いや。その理由を聞いてるんだけど。」

「だから行きたくねえから行かねえんだよッ！」

怒りながら辺りを先程からきょろきょろ見渡しているラピス。

はたからみればそれは・・・・

「アビス 何あんた変な行動とてんのよ

「アーティストの世界」

二二六

見一にたそヽヽ

「はい、お仕事始めがござります。」

用まる。タイガたちも。

え、ええ！？なに、何なのさ？僕たち何か悪いことしたつけ？心

「まがりかれる」とれにまがりかれていたが、

「つてアンタ真面目人のくせにそんなことしてたのかよッ！！」

ちなみにそのあとそのバチが当たったのか、タイガが腹痛になつた

卷之三

「抵抗はして居無駄ですよ。王女様。」

この兵士たちを率いている隊長であろうその人がラビスに言う。

「おのれたちがいはるか？」

「ヨーロッパの文化は、日本文化の発展に大きな影響を与えた」といふことは、間違いない。

数十秒思考が停止したラピスを除くタイガたち。

そして次の言葉を叫ぶ。

王女様あああああああああああああああああああああああああああああああ

？」

第42話～スレイミア到着、そして災難～（後書き）

【グリーンヴェル】
惑星『スレイミア』の首都。

第43話～ミラージュ大活躍～

ガチャン

「ちよつとーーなんであたしたちが捕まらなきゃなんないのよッ！」

「！」

ここは城の地下。

じめじめと湿気があり、おまけに蒸し暑い。

そんな地下にある牢屋にタイガたちは放り込まれていた。

「だまれッ！王女様を連れまわしていた曲者どもがッ！－！」

見張りからそう怒鳴られる。

「王女って、やっぱりあのラピスのことですか？」

「まだに信じられないタイガが見張りに質問してみると、

「そうだ。あの方こそ惑星『スレイミア』の王女、ラピス・スレイニア様だ。」

「でもアンタたちのこうその王女様とやらば、この惑星を出てから盗賊まがいのことをしてたんだけじねえ。」

「だまれッ！－王女様がそんな下賤なまねをするわけないだろッ！」

「！」

「実際にしてたのよッ！－ビームで頭固いのかじりのデカブツッ

「！」

「だまれッ！－見るからに暴力そうな女がッ！－」

「！」

「ブチイイーン・・・・・・

なにか切れてはいけないものが切れたような音。

「暴力」、「怪力」、「バカ」、「阿呆」、「クソ」、「脳味噌筋肉」などの言葉をミラージュに言うと相手を破滅へと導くのだ。その中で「暴力」、「怪力」、「脳味噌筋肉」の3つはその確率が最も高い。

「ふつふつふ・・・・・。」

突然含み笑いをしだすミラージュ。

「最近は死に急ぎたがる若者が増えてホント困るわねえ。」

「お、おいミラージュ。さすがに今の状況じゃまずいって。」

シャープが言うが、ミラージュは聞いてもよいようだ。

ふらふらと鉄格子をつかむミラージュ。

「ふん。所詮牢に入れられたネズミもがこの見張りである俺に何ができるというのだ。」「・・・・・。」

グニ・・・・・・

そんな音と共に、鉄格子がぐにゃりと左右に曲げられ、人一人通るには十分すぎる隙間ができた。

「な。なんて怪力だ。」

怪力・・・・。

その言葉に眉をピクリとさせるミラージュ。

破滅の言葉を2つも言つとは、よほど死にたいようだ・・・・・・。

ポキポキ・・・・・ゴキッ

見張りに近づきながら手を鳴らし始めるリバージュ。最後だけに重い音が聞こえたが気にしない。

「お、おいッ！－おまえたち2人ッ！－この女をどうにかしろッ！」

11

見張りが叫ぶが、タイガとシャープは座禅を組んで手を合わせていた。

ご愁傷様。・・・・・という意味を込めて。

右手で見張りの顔を往復しながら、シツと見張りの胸倉を左手でつかみ、タ。

事務的かつ機械的に、それでいて無表情のままビシバジビシバシとゾンタをする姿はいろいろな意味で怖い。

それも日にちとまらぬ速さ！1秒につき往復5回のペースで。

第44話 城を出る王女

地下でそんなことが起きていたとも知らず、現在ラピスは王様と応接間で面会をしていた。

「さてラピス。聞かせてもらおつか。この城を去ったわけを。」

「なんでクソ親父にいわなきゃなんねえんだよ。」

眼を付けながら王様・・・・実の父親に言うラピス。

「それでは、何が気に食わないのか。話してくれぬか。」

「何が気に食わないか気づいてもいねえやつに、なんでそんなことを言わなきゃなんねえんだよ。」

「でも言わなければ、何も事が進まないとと思うがな。」

「それで結構だ。クソ親父に話すことなんざなんにもねえ。」

堂々通り。

先程からこの会話の繰り返しである。

そんなところへ、1人の兵士が割り込んできた。

「王様ッ！！」

「なんだ？」

「牢に閉じ込めておいた者が暴れて今こちらに・・・。」

ドゴォツ

応接間の扉を蹴破つて入ってきたのはミラージュ。それにタイガとシャープ。

「な!? 今は面会中だぞッ！」

応接間にいた兵士たちがタイガたちを囲んだ。

「やめろッ！ そいつらはおれの連れだぞッ！」

「ラピス。おまえが何も言わなければ、この者たちに少しばかり痛

い目を見てもらうや。」

「そんなのただの脅しだろッ！－！」

「他の惑星の者など、どう扱おうとわしの勝手だ。」

「だったら何が気にくわねえのかを教えてやるよッ－－おめえのそ

の自分の惑星の住民だけを助ける精神が気にくわねえんだよッ－－」

「王が自分の場所を守るのは当然のことではないか。」

「だからもつと大局を見渡してだなあ・・・・・。」

「他の惑星の者などどうなるひとかまわん。わしは自分の惑星だけを守ればいいのだ。」

「・・・・・！－！」

怒りを全面的に出すラピス。

そして・・・。

「わかつたッ！－－だつたらおめえの好きにすりやあいいだろッ－－！

おれはこんな場所はとにかく嫌なんだよッ－－！」

そう言つとラピスは入り口は兵士でふさがっていたので窓から飛び降りる。

「・・・・つヒラピス！－－」（こは3階だつてッ－－）

囲んでいる兵士たちを退けて窓の下見ると、城の外へと走つていくラピスの姿があつた。

「タイガッ！－追うよッ－－！」

「わかつた！－」

そういうとタイガたちも窓から飛び降りて、ラピスの後を追つのであつた。

一方こちらは病院。

5

ベラエドリなれでレモテイレク

その傍にはカイルとハートー

オレンジで 果物のことでしょうが？」

いや不思議と感心がま
く黒柴だ。

で語りこむ。

バックの中に砂の代わりとして入れ、再び殴り続けていたらしい。

レンジイイイイイ
ツツツ！――！――！」

カイルはだいたいわかっているのだが、ほんとに付き添いのみでやつて来たゴ尔ドーにとつては何を言つてゐるのかさっぱり。

讀書二法

「やつほーっ！…ジークくん、元氣してた？？」
「・・・・・おまえは。」
とある洞窟。
そこに「冷氷のジーク」と「魔女ウイーズ」がいた。
「何用だ？」
「いやあ～。実はもう一度私たちに力を貸してくれないかなあ～、
なんて思つてね。」
「・・・どんな依頼だ？」
「この前戦つたやつらのこと思えてるよね？」
「ああ・・・。」
「そいつらの抹殺つて感じ この前は盗みだつたけど、今回の人殺
しだから、ジークくんも得意つしょ？」
「・・・・・。」
「頼むからさ～、ね？」
色仕掛けのつもりなのか最後にウインクをするウイーズ。

「……………わかった。」

「さうすがジークくん じゃあじゃあ、私と一緒にレッシゴー
ハイテンションなウイズについていくジークフリート。どうやら依
頼に乗るようである。
…………色仕掛けのせいいかどうかは知らないが。

第46話 王女の・・・

「おいッ！ラピスッ！」

「ついてくんなタイガ！！」

町の中をひたすら適当に走り続けるラピス。それを追うタイガ。城を飛び出してからすでに30分ほど経つており、その間ずっとこの2人は走り続けていた。

ちなみにミラージュは途中でダウン。

そのミラージュを『ラグナエース』へ連れて行くためにシャープもラピスを追いかけるのを止めた。

表通りを駆け抜け、建物と建物の間から裏通りへと行き、とにかくタイガを撒こうと必死のラピス。

だが、全く撒かれないように追いかけるタイガ。

「ハア・・・・ハア・・・・。し・・・・しつけ　ぞッ！！」

「しつこくて結構だよッ！！」

「女に嫌われるタイプだなッ！・・・だッ。」

足を蹴き、派手にすつころぶラピス。

本気で走ってただけに、見事といえるほどのヘッドスライディングである。

「うえッ、土が口に入っちゃったよ。」

起き上がるうるとすると、ラピスの目の前にタイガが立っていた。それを見上げるラピス。

「・・・・・やつと、追いつい・・・・たあ。」

ゼエハアと息を肩でしながら言つタイガ。

身体からは汗が出ており、タイガは額から出でてくる汗を手で拭う。そこまで必死だったのだろうか。

たかだか仲間1人のために、30分間追いかけができるのかこの男は。

「・・・・・ラピスって・・・」の惑星の・・・王女だったんだね。

「…………ああ。まあな。」

走るのをあきらめたのか、逃げる様子もなくその場に立ち上がる。

「なんで……家から逃げたのさ。」

「…………嫌だったからぞ。」

「嫌？」

「ああ。あのクソ親父は自分の惑星しか頭に入つてねえ。そのせいでこの惑星『スレイミア』の軌道上にある衛星が貧しさで大変だつてのに、あのクソ親父は何にも対処とかしねえのさ。だからおれは、城を出て、その衛星を少しでも豊かにするために外で働いた。」

うんうんと、タイガが頷く。

「だけど、所詮子供の仕事なんてたかが決まつてんだろ？ とてもじやないけど、仕事の稼ぎだけじゃその衛星を救えないと思つてな・・・」

「…………それで盗賊になつて、盗んだものでその衛星を救おうとしたのか。」

「まあな。」

なるほど。これがラピスの盗賊になつた理由。

私欲のためではなく、ひとつ衛星を貰しさから救つたためにした行動であり選択。

だけど・・・。

「だけどラピス。他人のものを盗むなんて、やつぱりダメだ。その衛星の人々が貧しさで苦しんでいるように、盗まれた人たちだって、盗まれたことで苦しんでいるかもしれないじゃないか。」

「わかつてゐるさッ、そんなことくらいおれにだつてッ！ だけど、あのクソ親父がどうにも動こうとしねえんなら、おれが動くしかねえだろッ！ 他人が頼れねえなら、自分を頼るしかねえだろッ！」

うつむきながらラピスが叫ぶ。その叫びは、裏通りに響いた。

タイガしか聞くものがいないうのに・・・。

「…………だけど、今は僕たちがいる。」

はつとした表情でうつむいた顔を上げる。

「昔は自分ひとりだったとしても、今は僕たちがいるだろ。仲間なんだから・・・・・もう少し頼ってくれいいんだよ。」

そう優しく言葉を言うタイガ。

仲間・・・今までラピスにとって、そんなものお飾りかと思っていた。

だけど・・・・・・。

「・・・・・・ツ・・・ウウ・・・。」

「ラ、ラピス？ないて・・・・・。」

「うつせ

ツツ！おれは・・・・・おれはなあ・・・

ツ！・・・・・汗が目に入っただけだツ！・・・

そう大声で言うと、ラピスはタイガから顔をそむけ、再び顔をうつむけるのだった。

うつむいてわからないが、顔からは水が落ちていた。

汗なのか、・・・・・それとも。

第47話／襲撃開始

「セルリアさん。物資の補給がもう少しで終わります。」「はい、わかりました。」

セルリアは今、物資の補給の手伝いをしていた。

物資を保管しておく倉庫の管理はセルリアが主に担当しているからだ。

「セルリアさん！のこり足りない物資は何ですか～？」

遠くからセルリアを呼ぶ『ラグナエース』の乗員。

「あと医療関係の物資をお願いします！」

「わかりました！」

嫌な顔ひとつせずにその乗員は医療関係の物資を仲間と一緒に運びに行つた。

あわただしく過ぎていく時間・・・。

そんなとき、町中がやや騒がしくなっていくのがあかつたセルリア。

「・・・？何かあつたんでしょうか？スピルさん。」

ちょうど近くを通りかかったスピルに尋ねるセルリア。

「ん？いや～、俺に聞かれてもなあ。」

そりやそうだ。

スピルはそれだけ言うと他の荷物運びを手伝いに行こうとするが・・・。

ドゴオオオオオオオオ・・・・・・

突然強烈な爆発音が聞こえたかと思つと、音の発生源付近から煙が出ていた。

「・・・・なんだか知らんが、ただ事じゅあなさそうだな。」

「な、なに？今の音？」

一方こちらはタイガとラピス。

恥ずかしい話、現在道に迷つていてる。

表通りと裏通りを適当に突つ走つたために完全に迷つてしまつてい
た。

「わからんねえけど、嫌な予感がするぜ。」

「うん。行こうッ、ラピス！！」

「わかつてらあッ！！」

「ハ ハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ
あツー！！貴様らの実力はその程度がああああああああああああ
？？もつと俺たちを楽しませろおおおおおおおおおツー！！！」
巨人を思わせるような大きな体格、全身を鎧で身を包んだ男が周り
の人々に言つた。

「ホントだね。どうせなら、城の衛兵100人ほど呼んできなよ。
そしたらおまえたち一般人はしばらく殺さないでやるからさあ。ま
あ、その衛兵がザコだつたら3分以内で片付けてやるけどね。」

槍の先端に大量の血を滴らせている青年が言った。

そして、その青年の足元には10人ほどの人が血まみれで横たわっていた。息はないだろう。

一方、鎧の男の周りには、見事なまでに上半身と下半身を真つ二つに切断された死体がごろごろ転がっていた。男が持っている大剣には、青年の持っている槍と同じく血で染まっていた。

あからさまに危険人物な2人に、人々は2人から距離を離す。

「おつと。ぼくたちの工サが逃げないでよ。」

スッパアアアン

次の瞬間、人々から悲鳴が上がる。

逃げようとした適当な3人ほどの首を槍で刎ねたからだ。

そのままバタリと倒れる。周りからは今もなお悲鳴を上げるもの、人によつては失神、気絶するものまで現れた。

「・・・・・お、おまえたちの・・・、おまえたちの目的はなんだ。」

「なんとか声に出して言う1人の男性。

「俺たちの目的かああああああああああああああ？」

「そうだね。何も知らないあの世に逝くのも不憫だしね。いいよ、教えてあげる。ぼくたちの目的は・・・・。」

青年は男性に向かつて槍を構える。

「・・・・『タイガ・ウナバラ』さ。」

言い終わると同時に、青年は男性の胸を串刺した。

第48話『人斬り』と『豪腕』

「
・
・
・
かまあ。
」

男性は一度血を大量に吐くと、槍で串刺しにされたままぐつたりと動かなくなつた。

用語集

青年は槍を振るひて男性を槍から無造作に引き抜いた。

タイガ・ウナバラ』を連れてくるんだなあーさもないと・・・。」「

卷之三

その女性は突然のことに何が起きたかわからないまま永遠の眠りにつく。

「モチシ」

人名

「……………」

槍使いと大剣使いは声のした方向へ振り返る。

「おのれに仕事」の本質

ラピスが2人に吼えた。

「なつて殺人さ。ぼくたちの周りに見えるでしょ？」

「アーリン、アーリン、アーリン」刀の刃が机に向かって笑った。

次はタイガが吼えた。

レトロ・モードの「アーティスト」

「！」

タイガは驚きの表情を見せた。

タイガだけじゃない。ラピスもだ。

「僕を・・・？」

「あ。やハパツキミがそうなのかな。よかつたよかつたあ。こやあ

あ。

「当たり前だ!! 僕に用があるなら「んな」としないで普通に僕を探せよツ!!」

「それじゃあ面白くないんだよね。こんなに人が町にいるとかあ、人所リコレ・としての血が強ぐつささ。」

「軒にセシル」としての血が駆くれにさ

自分ではまだあつて、セシルの周りには大量の血と死体があつた。

! ! ! !

いちいち大声で叫ぶ大剣使い『豪腕のオーガナイト』。

「…………それで、僕に用というのは何なのさ。」

怒りを押し殺したような声でタイガは問う。

て思つてるわけ。「

「断る。

即答するタイガ
考えるまでもない!

「うわああ～。そりや残念。

即死ではなかつたが、その場に倒れこむ斬られた人々。

「あー、『めん』『めん』。手が滑っちゃったよ。」

ハツハツハツハツハツハツ！－！おまえの手は何
回滑りせりゃ 気が済むんだよおおおおおおおおおおッ！－！

次の瞬間、青年が叫ぶ。

第49話「タイガの選択」

タイガはもう我慢の限界だった。

怒りが我慢や忍耐と言つたものでは抑えきれないでの、後先考えずにタイガはその2人に突っ込んで行く。

「バカ！－！タイガまでッ！－！」

ラピスが言つてもすでに遅かつた。

得物まで抜き、タイガは混信の限り斬りかかる。

「ふ。」

口元を緩ませるセシル。と、同時に攻撃対象をタイガに変更する。

「爆・烈・斬ツ！－！」

刃に魔力をまとわせ、混信の限り振りかぶった剣を振り下ろす。

キイイイイイイイイ

そんな金属音がしたかと思うと、タイガの攻撃はセシルの槍によつて受け止められていた。

「このッ！」

「子供だねえ。」

「なんでさッ！」

「感情のままに行動するなんて、知能の発達していない子供、・・・

・・いや、ガキのやることだよ。」

交差した状態からそのまま押し返すセシル。

「感情のまま動いていると

槍を構えなおし、そして・・・

ズバアアアア・・・

「痛い目を見るのさ。」

袈裟斬りで、右肩から斜めに左わきの下まで斬りつけられ、吹っ飛ばされながら、

その苦痛のあまり絶叫する

「アーヴィングの死」

ハア
・
・
・
ハア
・
・
・
。

傷口を押さえ、苦痛の表情をしているタイガ。

一頼むからさ、ほぐたちの仲間になつてや。仲間になつたら、一

だから・・・・・断る二て・・・・言二たじやなし加」

一〇六

「… おじいちゃんの戯うのか。」

「そうだねえ。タイガがおとなしく来てくれないなら、タイガの仲

間であるヨリを窺うじがなしねえ

「タイガ、キミが来ないなら仲間に痛い目をみてもうつよ。」

言ふ給わぬ也。豈に一氣にハビスめかにて突き起る。

卷之三

「避けたつもりかい？」

槍をそのままテビスの避けた方向へと振る(+)。

一
く
あ
あ
ッ
！
！

今度はかすり程度ではない。

ラピスの腹部一直線に槍で斬られた痕ができた。

そしてそのままセシルは突きの体勢をとると、
にどぎめの突きを入れた。 体勢が崩れたラピス

ノツ

声にならない悲鳴を上げるとラピスはぐつたりと動かなくなる。恨みながら、胸二丘の部分をうぱーんはづくが、八二二の二。

限りなく脳は近い部分をテピアは突かれたのた
ク、ガラスのまゝのソファ二
譯アガルキ二八

「…………ね、タイガ。他の仲間たちにもこんな目に遭わされたくなかったら、ぼくたちの仲間になつてよ。」

・・・・・死んだのか?

そう思ふと 夏イカは頭の中が真っ白になつた

おまけにこいつらは自分が仲間にならないと他の仲間もラピスと同じ目に遭わせると言った・・・・。

セシル

なんだし？」

「僕が仲間になつたら……他の中には手を出さないんだね。」

一
四

モード

仲間に自分を追つてこないよう言えれば、仲間に危険はない・・・・

「…………わかったよ。あなたたちの…………仲間になるよ。」
うつむき氣味に言つタイガ。

その返答に満足したのか、セシルは口元を緩ませる。

「ただ。」

۷۰

「ただ……今一度仲間に会わせてくれないかな。少しの時間

ああ、いいとせ。別れの挨拶は必要だからねえ。それじゃ、さういふが、

第50話～やむづなら。そして……

現在、セルリアは『グリーンヴェル』内を迷走していた。
なにせ町中を動き回るのはこれが初めてだからだ。

（ああ。スピルさんも連れてきた方が心強かつたです……。）

1人だと心細い。

何も知らない町中では、その心細さもなおいつそう強まる。おまけに今セルリアは裏通りにいた。

・・・・と、そんなとき。

「セルリアッ！」

少女の名前を呼ぶ声。

そこには、少女がよく知っている青年、『タイガ・ウナバラ』がいた。

「ウナバラさん！」

セルリアが寄ろうとしたが、途中でそれを止める。

なぜなら、タイガがどこか悲しげな顔をしていたからだ。

「・・・・・・・」

「ウナバラ・・・・・さん？」

セルリアの名前を呼んでから、まったく何も話さないタイガ。

「ウナバラさん。どうかしたんですか？」

「セルリア。・・・・・君に、言わないといけないことがあるんだ。

「？」

何だかわからなかつた。

だが、タイガの表情を見ればだいたいやなことを言われる」とくらいいはわかつた。

タイガは必死に隠そうとしているようだが、少女にはわかつてしまふ。

「・・・・・悪い・・・・知らせですか？」「

单刀直入にセルリアは問う。

「半分はね。もう半分は……僕にはわからない。」

半分はわかった。

だが、もう半分のほうは全く見当がつかない。

「……どちらから言つてほしい？」

「それでは……悪い知らせから、お願ひします。」

「……やうやうなら。」

一瞬、何を言われたかわからなかつた。

あまりにも唐突過ぎて。

「あの……もう一度、言つてくれませんか？」

「さようなら。」

同じフレーズ。聞き間違いではなかつた。

「どうして……ですか？」

「……爆発音が聞こえたでしょ？ その元凶である人たちに、『仲間になれ』って言われて……それで。」

「どうしてですかッ！…どうしてそんな人たちの仲間になるんですかッ！」

セルリアが叫ぶ。それを見てタイガは驚いた。当然だらう。

普段温厚な彼女が、こうして激昂しているのだから。

「最初はもちろん断つたよ。だけど……仲間にならないと、君たちに被害が出すつて言われて……。」

要するに、タイガは仲間を盾にされたのだ。

「でも……だからって……。」

「僕があいつらのところに行つても、僕を取り戻そんなんて思わないでよ。」

「どうしてッ！？」

普段の温厚さが本当に嘘のようだ。
裏通りに響くセルリアの声……。

「僕を取り戻そうとすると……あいつらが君たちを殺してしまうちから。現にラピスも……。」

「ラピスさんが、どうかしたんですか？」

「僕が一度誘いを否定したから、ラピスを瀕死の重傷を・・・。今は、病院に送られたはずなんだけれど。」

病院となると、カイル、ゴルドー、ティレクがいる場所だ。
「だから・・・・もう我慢ならないんだ。これ以上、君たちに被害を出すわけには行かない。」

セルリアは言葉が出せなかつた。

自分がもしタイガの立場なら、同じ行動をしていただろうから。

「・・・・それじゃあ、もうひとつ知らせは何ですか？」

「・・・・もう会えないだろうから、言わないといけないことがある。」

そのときだけ、タイガは柔らかなやさしい表情を出しながら・・・

そして言つた。

「君が好きだ。」

—

「お、来たよオーライト。

「うむ。おまえの心が、おまえの心を知る者には、おまえの心が、おまえの心を知られる。」

『グリーンヴェル』の外に、一人出てくるタイガ。近くに仲間の気配はないようだ。

「ふふ・・・。少し暗い顔してるね。・・・・ははあんさては、大切な人に別れでも告げて来たのかい？」

らみつけた

なろうよ、タイガ。

「好きで仲間になつたんじゃなしに」とね」「

ラピスに瀕死の重傷を負わされ、拳句他の仲間も同様の苦しみを経るといつれたのだから・・・。

それに比べたら、自分がこいつらの仲間になるだけでそれがなくな
るのだから、条件としてはやすいのかもしれない。・・・。

「あ、行こうか。」

そう返事するタイガの足取りは重かつた。

カイル、ミラージュ、シャープがいるピロティで3人に向かってブイサイン。

恐ろしいほどの再生能力。実はボ
モンの『じきせい』とか覚
えていいるのではないだろうか。

「つたく、心配せんじやないわよ。」

「心配のもとを二三た張本人であるミトニーがテイレクに言った
「はははははー！俺様は、全世界の女の子のためにも、そう簡単
にくたばるわけにはいかないのさあー！」

١٩٦

一輪廻転生しても、俺様の性格は変わらないぞ！絶対ツ！！
むしろ今までよりやかましくなったのは気のせいだろつか。

そんなことを思しながら、シーローは自分で人れた紅茶を一服した。「そう言えども、タイガはどうに行つたんだろうねえ。」

と思つたんだけど。」「

「いなかつたよ。部屋にも。」

「じゃあ・・・。まだ『グリーン・ヴォル』にいるとか・・・。」

「そ、た、ど、い、し、ん、た、け、と、ね、え、そ、れ、に、お、か、し、の、は、そ、れ、た、け、し、や、な、い、さ。」

と、シャープはカイルに言った。

その内容は、カイルにもわかつていた。

「ああ。あの子が瀕死の重傷なんて、絶対ただ事じゃないことが起

「きたつて事だよ。」

「そりいえば・・・・・何か爆発音が聞こえたけど・・・。

「アタシも聞こえたよ。あれが何か関係あると考えるのが妥当だろうね。」

ついでに言えば、ラピスがティレクが入院していた病院で入院することになったので、『ラグナエース』の出発は先延ばしされていた。

「……それで、もうひとつあるんじゃない？ シャープ。」

「へえ～。わかつてたかい。」

「内容はわからないけどね。」

「セルリアのことさ。」

「セルリア？ たしかに、ここに来てないけど……。」

「あの子は部屋にいるよ。呼び出そうとしても返事のひとつ返つてこないのさ。」

「ふうん。珍しいね。」

カイルは紅茶を一服。普段は何も言わずともセルリアが紅茶を用意してくれるのだが、いまは部屋の中。

「ただ、壁に耳を澄まして聞いてみると『ウナバラさん、ウナバラさん・・・。』って涙ぐんだ声で聞こえるのさ。」

つていうか、そんなことするのかこの人は・・・と、口には出せないが思うカイル。

「じゃあタイガにも何かあったのかなあ。」

「このまま『ラグナエース』に帰つてこなかつたら、何かあったと考えるべきだろうね。」

ことが予想以上に重大な感じがしてくるカイルとシャープ。そんな2人をよそに、ティレクとミラージュは互いに言い争いをしている。

『色魔男』と『怪力女』の言い争いである。

「まあとにかく。アタシはこれからセルリアの部屋に行つてくるよ。」

「オレも行こうか？」

「女同士の話に、男は邪魔ぞ。」

「そうか。じゃあ頼む。くれぐれも手荒な真似はしないでよね。し

ないと思つけど。

「わかつてゐるつて。」

シャープはそう言つと、セルリアの部屋に向かつた。

ピロティに残つたのは、カイルと『色魔男』と『怪力女』の3人である。

シリアルスなムードが、『色魔男』と『怪力女』のせいであつしにならのだつた。

そこは荒野だつた

ただ、灰色の地面ではなく赤く血で染められた地面・
血の臭い・・・。気分のいいものではない。

その血の発生源であるたくさんの兵士たちの死体がとゝるどゝるに

それなりに、
青い

て向き合っていた。

銀色の髪の少女が青年に言った。

「だから自分の効率がより素晴らしいのならは、周りの者の意見は耳を傾ける必要はないのではないか？」ルシア。

「アーヴィングはこの本の著者だわ。

そして、銀色の髪の少女はルシアという名らしい。

「そんなことはありませんッ！素高かどうかは自分の意思だけではなく、周りの者の意見も必要ですッ！ましてやこれから本当の戦いが始まりますッ！おそらくは今回起きた戦争よりも大きな戦いが！」
「そんなことくらいわかっている。だから僕は最も優良な方法を民に教えるつもりだ。」

「それは自分の意思しかないではありませんかッ！」

「それでかまわない。」

「…………夢、か。」
目を覚ますと、タイガはベッドの上で眠っていた。
(それにしても…………ずいぶんとリアルな夢だった。たしか……
……。)

タイガは夢の内容を思い出せつつある。…………だが、なぜか思い出せない。

頭の中にもやがかったようだつた。
なにかとても重要なことだつたと思つ。
なんかこいつ…………夢とこいつよりは、記憶を眠つている間に再生させたような……。

と、そんなところに「ンンン」と扉のノック音がした。

「…………だれだい？」

カチャリと扉を開けて出てきたのは……

「ハロ――タイガくん ひつむしつぶりい――」

扉を開けるなりなれなれしく抱きついてくる魔女。

その魔女には、タイガは見覚えがあつた。

「き、君は確かウイズ！」

抱きついてきた魔女を引き剥がしながらタイガは言った。

「ピンポオーン 大正解ツ！」

「なんで君がここに？」

「そりや私もセシルとオーガナイトと一緒に組織の人だもんねえ！」

まさかこんなところで会つとは・・・。

驚きを隠せないタイガ。

「あ、そうそう。ちょっとタイガくんにこれから私たちのリーダーに会つてもらいたいんだ。いいっしょ？」

現在タイガはこいつらの仲間。従うしかないと想い、じくじくと頷く。

「じゃあけつて~い じゃ、ついて来て。」

そういうウイズに、タイガはついていく」としたのだった。

第53話 ルシア

「……」とウイズについて来ているタイガ。

自分が寝ていた部屋を出て、歩き続けて5分ほど。まだ場所には着かないようだ。

また、歩いていのうちにわかつたのだがこの場所はかなり広い。
タイガにはどうじだかわからない

そして、広いゆえにしてしまうことがある。

もしかして……。

「ねえウイズ。」

「なになに？？」

「迷った？」

間。

「……そんなことないよ」

さつきの間は何だったのか？と、問い合わせたいタイガだが、無駄な時間は今のところつくりたくないので、間については軽くスルーすることにした。

ただ、言葉で言わない代わりに田代「さつきの間は？」と質問することにした。

そのことに気づいたのかウイズは「さあ～て。ひとつと行こつか。

寄り道せずに。」と言つてさつきよりやや早歩きになる。

こんな道案内で大丈夫なのか？と思いつつタイガはその後をついて行くことにした。

「はい、タイガくんここだよ」

ウイズが案内した先には、他の部屋の扉より少しばかり大きい扉があつた。

「この先に私たちのリーダーがいるよ サ、はいってはいって。」
そう急かすウイズに、しぶしぶタイガは従い扉を開けた。

扉の先の部屋は、大広間だつた。

とにかく大きい。『グリーンヴェル』の城にあつた大広間より大きいかもしない。

「やつと来たね。待つてたよ。」

そんな大広間のちょうど中心あたりに、その声の主がいた。
銀色の髪を腰あたりまで伸ばし、白色メインの服装をした少女が。
ウイズはタイガを案内だけすると、大広間から出て行つた。

現在、大広間にいるのはタイガの銀色の髪の少女だけである。

「君は？」

当然ながらタイガは名を聞く。

その言葉を聞くと、少女は嘆息まじりのため息を出す。

「やつぱり、覚えてないか。」

タイガは首をかしげる。

一度も会つた覚えがないからだ。

だけど

なぜだろ？どこかで会つたような覚えもある。

「まあいいよ。ボクの名前はルシア。」

丁寧に自己紹介をしてくれる少女ルシア。

ルシア？

どこかで聞いたよつな…………。

「ボクはキミの事を覚えているのに、キミはボクのことを覚えていないんだね。ちょっとばかり残念だよ。」

「…………あのや。僕と君は今現在はじめて会つたんじゃないの？」

「いや。大昔に一度会つてゐるよ。キミは単に忘れているだけだよ。」

『大昔』というレベルで会つたことがあるようだ。

「まあいいや。ルシア、僕は君にいくつか質問がある。」

「いいよ。ここにはボクとキミしかいないから、遠慮なく言つてくれ。」

答える気は十分にあるよつだったので、タイガは遠慮なく質問することにするのだった。

第54話 質問タイム

「それじゃあ第1の質問。『Jijiはビーべー』

窓越しから見ても砂嵐一色。ほつきり言つてどこだかわからなかつた。

「Jijiは、人類の母星『カムラン』だよ。今ではとてもじやないけど、人の住めるような惑星ではないけど。」

これが『カムラン』。聞いたことはあつたけど、実際に田の当たりにするのは初めてだつた。

「じゃあ続けて質問させてもらひよ。人が住めそうにない惑星に、なんで君たちは住んでいるのさ。」

「簡単なこと。見つかりにくいからだよ。敵にね。」

敵……この人たちの言う敵とは僕たちのことなのだろうか。

「その敵つてさ。僕たちのこと?」

「いや。少し違うね。」

意外な回答。

「そもそも、キミはもうボクたちの仲間じゃないか。まあキミの言つている『僕たち』はたぶんつい最近まで共に行動をしていた人たちのことだらうけど。」

無論だ。

そもそもタイガは、完全にルシアたちの仲間になる気はなかつた。半ば強引……………といつより強引に仲間にされたのだから。

「じゃあ君たちの敵とは何なのさ。」

その質問に、ルシアは少し考へるよつたじぐをする。

そして…

「Jijiめん。それだけは今のところ教えられないな。」

「どうして?さつきなんでも答えてやるつて言つたばかりじゃないか。」

「今言つたところで変な人扱いだらうしね。」

十分変じやないかといつシッ『ミ』は伏せておく。

話は続く。

「まあ、ボクたちの敵は『ラグナエース』の人間たちじゃない。本当の敵は別にあるんだ。『ラグナエース』の人間たちはあくまでオマケの敵って感じだよ。」

「オマケって……。」

タイガは『ラグナエース』の人たちの強さを知っている。

少なくともほとんどの人たちは並の人の戦闘能力を凌駕していた。

戦闘員たちの戦闘能力は今はなんとも言えないが。

そんな人たち相手がルシアたちにとつては『オマケ』レベルなのかと考えると、本当の敵の強さの程がうかがえるような気がするタイガ。

とは言え、本当の敵がなんなのかを聞くには今のところ無理らしいのでひとまず気にしないことにする。

「それはそうとタイガ。『ラグナエース』は何のために旅をしているのか知ってるかい？」

「え？」

そういうえば前、カイルに聞こうとしたのだが結局聞けなかつたことだつた。

「いや。知らないけど。」

「じゃあここで教えてあげるよ。」

「……なんで『ラグナエース』のこと知ってるの？」

「オマケの敵とは言え、敵のことはちゃんと調べないといけないからね。」

『オマケ』といつ言葉がつくだけでここまで腹が立つものなのか……。

タイガは今、それを感じている。

次にルシアから発せられた言葉は意外なものだった。

「簡単に言つと、『ラグナエース』がキミに出会うまでは調査していしたものと、ボクたちの敵は、実は同じ可能性があるんだよね。」

第55話／回答の意味

「なッ。」

ルシアの言葉に、さすがに驚くタイガ。そりやそりや。

「その『ラグナエース』の調査の内容は、『死んだはずの人人がどこからともなく現れる』というものなんだ。」

「…………。」

タイガは「は？」と言いたげな表情をしていた。

「とある実例を教えてあげるよ。」

そのタイガにわかりやすくするためにルシアは実例で教えてくれる

ようだ。

「ちょっととした二コースでやつてたんだけど、とある人の葬式をやつているとき、突然その葬式に乱入してきた人がいるんだ。その乱入した人が葬式をしている人と同じ人物だつたつてものだよ。」

「単に似ている人なんじやない？」

その言葉にルシアは首を左右にふる。

「同じだつたのさ。声も身長も体重も年齢も指紋の形も……。ただ、唯一違うところがひとつあつたんだ。」

「違うところ？」

「性格さ。それだけが違つっていた。」

「そんなことつて…………。」

だいたい、指紋が同じといつ時点でもその人が同じ人物であることが証明されているわけだ。

まるで同じものを複製できるコピーのよ。

「…………クローンとか？」

「クローンなら、一から育てないといけないから、同年齢にはならない。」

「からというのは赤ちゃんからということだろう。」

「とにかく、『ラグナエース』が調査していることは以上だよ。」

「君たちの目的というか敵もそれじゃないの？」

「あくまで可能性だからね。ほほ確實だらうけど。」

「だったらそいつが敵決定と言つてるものじやないか。」

「まだ聞きたいことがあるんだけど。」

「なんだい？」

「君たちは、なんのためにその敵たちを倒そうとしているんだい？」

「最もタイガが聞きたかったこと。」

おそらく自分がここに連れてこられたのはその敵と戦わせるためだ。けど、疑問がひとつ残る。

なぜ自分なのかということだ。

この『タイガ・ウナバラ』でないといけないのか。

なぜ『ラグナエース』の人たちじやいけないのか。

そんな考えを質問すると同時にします。

「この世界を救うためさ。それ以外の目的はないさ。」

「じゃあなんで僕を仲間にしたのか。」

続けてタイガは質問をする。

「そうだねえ。…………なんて言えばいいのかな。正確には『タイガ・ウナバラ』ではないんだ。」

「？」

わからない。

自分は『タイガ・ウナバラ』だ。

それなのにルシアは仲間にした『タイガ・ウナバラ』を仲間にしてないと言つている。

「まあ、じきにわかるよ。今は意味がわからないだらうけどね。」

大広間が沈黙につつまる。

「質問は以上かい？」

「今と同じはね。」

「そう。まあ今の同じように仕事はないから部屋でゆっくりしてよ。」

「もうせてもいい。」

タイガはそう言つて、大広間から出て行くのだった。

第56話『仲間』のもとへ

ここで時間をさかのぼり、真夜中の『グリーンヴェル』。敵の仲間になつたタイガはこのとき眠つており、カイル、シャープ、ミーフージュにティレクはピロティで会話をしていたときのこと……。

あれ。

生きてるのか、おれ……

場所は病院。少女のいる部屋はベッドがひとつあり、そのベッドで少女が眠つている。

個室で、人気は少女以外誰もいない。

窓があつたので、少女はまだ意識がはつきりしていないような目で窓の外を見る。

夜……

ベッドの横に机があるのだが、その机においてあつたデジタル時計

をその後見る。

2時……

完全に深夜。

深夜になるまで、自分はいつたい何をしていたのだろうかと、少女は記憶をまき戻す。

まず爆発音。

人一人。

そのうちの1人に、自分の胸を……

串刺しにされた……

まだはつきりとしない意識の中での、少女は串刺しにされた箇所を素手で触つてみる。
包帯が巻かれていた。

…………不思議だ。

かぎりなく心臓に近い部分を刺されたのにあれはまだ生きてる。

自分の生命力に少女は一人、感心した。

…………眠いな。少し寝るか。

現在時刻は2時10分。

寝て当たり前の時間だ。

少女は、それ以上何も考えずに眠りに着いた。

少女は夢を見た。

青年がおれを串刺しにしたやつらと一緒に、どこかに行く夢を……

青年はおれが知っている人物。

出合つたころは敵同士だったが、いつの間にか『仲間』になつてて

ただのお飾りの『仲間』かと思つたら、そうじやなくて……

決して、城にいるだけじゃ手に入らないものをおれは手に入れないと。

そして、おれを『仲間』とはつきとさせてくれた青年が、どこか遠くへ行こうとしてこの夢を……

……………いや、『夢』じゃない。

「されば、おれの田の前で起つた

『現実』だ。

そしておれは

同じ『仲間』として

そいつを

連れ戻す。

翌朝、個室はもぬけの殻だつた。
窓が開いているところから見て、そこから抜け出して、目指したの
だうひ。
。

第57話 少女の決意

一方こちゅらは、惑星『スレイニア』の首都『グリーンヴェル』で一夜を過ごした『ラグナエース』。

一夜過ごしたことで、カイルたちはひとつわかつたことがある。

タイガに何かあつたといふこと。

結局一夜過ごしてもタイガは『ラグナエース』に戻つてこない。そう考えるしかないだろう。

(まったくどうしたもんかねえ……。)

『ラグナエース』内の通路を歩きながらつい思つてしまつSharp。Sharpは朝食を食べた後、セルリアの部屋へと向かおうとしていた。

『ラグナエース』に戻つてきてから全く出合つていない。中からわずかに聞こえる言葉から、原因はタイガがらみといひことがわかつている。

もつとも、その肝心のタイガはここにはいないのだが……。

ピンポン

セルリアの部屋の前に来ると手始めに部屋のチャイムを鳴らす。

……………。

返答なし。

出てくる気配もなし。

ただ、部屋には鍵がかかっていないようだった。

「……………入らせてもらうよ、セルリア。」

そう言つと返答を聞かず、セルリアの部屋に入るシャープ。

「……………あ、シャープさん。」

ベッドで寝ていたセルリアは、やつまつと起き上がった。

ひどく元気がない様子……。

「单刀直入に聞かせてもらひナビ。どうしたんだい？」

「……………。」

その質問を聞くとセルリアはややうつむいてしまった。

「……………タイガのことかい？」

ピクリとセルリアの肩が動いた。

図星のようである。

「タイガのやつ、昨日から全く戻ってきてないんだけど……何かあつたのかい？」

「……………やつまつて。」

「え？」

あまりに小さい声だったのでシャープには聞こえなかつた。
いや、それとも自分の身体が無意識に聞かないようになしたのか……。

……………。

「さよならつて……ウナバラさんに言われて……。」

「……………だい？」

「でもじやないけど信じられない。」

「昨日、爆発音がありましたよね？……………その元凶の人たちにウナバラさん、『仲間になれ。』って言われたらしくて……。」

声はやはり小さくて弱々しい。

「……………けど、なんでタイガはそんなやつらの仲間に……。」

「仲間にならないと、私たちに被害が出すつて言われたらしくて……。
それで……………。」

小さくて弱々しい声がやや涙まじりの声になつた。

「あ、なるほど……………。あのバカのことだ。」

仲間に被害を出したくないと思つてやつらの仲間になつたのだろう。
特にタイガは、その想いが強い。

「どこに言ったのか、わかるのかい？」

「わかりません。『ようになら』って言われて……それだけでし
たから……。」

やつぱりタイガのやつが教えるわけないか…。

だけど、だからといってこのままほいつておくわけにはいかない。

「探すよ、セルリア。タイガをね。」

「無理ですよ。場所さえわからないんですから。」

「そりゃそうだけど、このまま見捨てる気がい？」

「違いますッ！けど……。」

そう言いかけたとき、セルリアの部屋の扉が開いた。

そこにいたのは

「ラピスッ！？なんでこんなところに？」

「あんなところでのんびり寝てられるかッ！そんなことよつ
……。」

ラピスは病院から勝手に抜け出し、ここまでやつてきた。

傷口は、ラピスの超人的な回復能力のおかげで見た感じではふさが
つていいようだ。

そんなラピスは入つてくるなりセルリアの傍まで近づく。

「おめえ、タイガを探さねえのか？」

「探したいんですけど……。場所が……。」

「場所なんてしらみつぶしに探せばいいだろ。それに、だいたいの
場所がおれには想像がついてんだよ。」

「でも……。」

「でももクソもねえよッ！！だいたい、タイガに直接別れを告げら
れたのはおめえだけじゃねえかッ！！おれたちはそれすらなしにあ
いつと別れちまつたんだぞッ！！

「……」

言われてみれば確かに……。

「つらいのはおまえだけじゃねえんだ。直接別れを告げられなかっ
たおれたちもつらいんだッ！それくらいわかりやがれッ！！」

そうだ……。

私はまだマシなまづだ。

他のみんなは、『さよなら』すら言わっていないのだから……。
「聞かせてもらひませ、セルリアさんよ。おめえはタイガにもう一度会いたいか？」

「…………はい。」

セルリアは涙を堪えきれなかつた。

だから涙声になつてそう言つた。無論、瞳からも涙を流して……。

「私、もう一度タイガさんに…………会いたいです。」

それは、少女の本心であり、決意だつた。

『さよなら』と言わても、やっぱり別れたくないものは別れたくない。

そしてその言葉に、ラピスとシャープは満足するのだった。

余談だが、セルリアがタイガのことを『ウナバラさん』から『タイガさん』に変わっていたことに気づいたのは、その数十秒後である。

第58話「これからどうしようか…」

セルリアを部屋の外へ連れ出して、現在主要メンバはピロティに集合していた。

主要メンバ というのは、カイル、ティレク、セルリア、ミラ、ジユ、シャープ、ラピスのことである。

ピロティに設置されているテブルの上には、いつものことながら菓子類と紅茶入数分がセッティングされていた。

ちなみに『ラグナエス』は、ラピスも戻ってきて、補給も終わつたので再び宇宙を航海中である。

「ところでラピス。アンタ、だいたいの場所は想像がついているって言つてたけど、どこなんだい？」

「ああ。そのことが。あくまで推測の話になるが、それでもいいから？」

ろくな情報がないので、ラピスの言葉にその他全員はうんと頷く。
「はつきり言うとすごい単純と言えば単純な考え方なんだけどな。ああいうやつらはたいてい自分たちの存在をなるべく知られないように、人目に付かないような場所に本拠地があるはずだ。例えば……

……人が住めそうにないところとか。」

「たしかに、その通りかもしないねえ。アンタに致命傷を負わせられるほどの凄腕のやつらなのに、知っている人がいないんだからね。」

「まあとにかく。まずは人目につかないような場所で人が住めそうにない場所を探せばいいんでしょ？」

と、ミラ、ジユ。

「よし。それじゃオレはブリッジに行つてレダで調べてみるよ。

「レダでそんなことまで調べられるのか。」

さきほどから菓子類をパクパクを食い荒らしているティレクが言つ

た。

「ああ。この『ラグナエス』はそこらの戦艦よりはるかに優れているんだ。それにこの『ラグナエス』は、『超高度先史文明時代』の產物だしね。」

そう言つとカイルはブリッジへと向かつた。

そして再び菓子類を食べ始めるティレク。

「…………あんたさあ。自分の親友がどつかいちゃつたつていふのに、よくもまあのんきねえ。」

おもわずそう言つてしまつミラ・ジュ。そりやそりや。

「大丈夫だつて。タイガのやつなら大丈夫だ。」

「なんでそんなこと言い切れるのよ。」

「親友兼心の友だからさ。」

どつちもほほ同じような気がするが。

「親友だから、あいつを心から信じてやれるのさ。心から信じないと、7年間も一緒に流浪の旅なんてできないしな。」

「…………。」

「ああ、そうか。」

こいつは心から信じているから、タイガは無事だつてはつきりと言えるんだ。

と、つこミラ・ジュは思つてしまつ。

「さてとそれじゃ、俺様はトレーニングルームにでも行くぜ。」

菓子をさんざん食つた後、ティレクはピロティから出て行つた。

「…………じゃ、あたしもトレーニングルームにでも行くわ。じ

やあね。」

ミラージュはそう言つとティレクの後を追つよつこにして出て行つた。

残つたのは、シャープ、ラピス、セルリア。

特に何もすることがない3人は雑談でも始めるのだった。

一方こちらはタイガ。

どういうわけか、タイガはウイズの部屋にいる。

「やつほ、タイガくん 頼みがあるんだけどさ

大広間を出ると、ウイズに話しかけられる。

どうやら外で待ち構えていたようだ。

「なに？」

普通に言い返すタイガ。

いい加減タイガはこのウイズの扱いに慣れ始めていた。

敵なのに。だけど、今は仲間。

「まあまあ、ここで立ち話もなんだしさ 私の部屋に来ない?え、
なに来てくれるの!?それじゃレツツゴ ッ!」

勝手に一人で決定すると、ウイズはタイガを引っ張つて自室へと連れ込む。

……………そして現在の状況へと至る。

（なんだか調子狂うなあ。）

ついそんなことを思つてしまつ。

ウイズは、自分が仲間になつてから普通に話しかけてくるし……。
だいいち、もともと敵同士だったのにウイズはそんなこと全く気に
していない様子である。

なんて言つか………… 天真爛漫。

そのため、下手な情が入りそろになるタイガ。

「……みんなどうしてるかなあ。」

ふとそんな言葉を口にするタイガ。

怒つてるんじゃないだろうか。……いや、怒つてるだろうなあ。

ろくにせよならも言わずに、ここに来たんだから……。

「はあ～。」

ため息をひとつ。

考えたところで、タイガにはわからない。

無情に時間が過ぎていく…………。

第59話 タイガとウイズの会話

「はいはーい、タイガくん まずはティ をどうぞ」「
ティ … 紅茶をタイガが腰掛けているソファ の前にあるテ ブル
に置くウイズ。

そして自分のをテ ブルをはさんだ向かい側にあるソファ の前に
置き、そのままソファ に座る。
ついでに言うと、テ ブルの上にはそのほかにもお菓子が大きな皿
に山のように積まれている。

紅茶を差し出されたので、まずは一口飲む。

…なんかこうしているとピロティでみんなと一緒に雑談をしていた
ときのことを思い出してしまった。

実際雰囲気と状況なんてそれにはるかに近く、相手がティレクたち
の代わりにウイズがいるようなものだった。

「…ん？私の顔に何かついてる？」

ずっと見られていることに気づいたウイズ。
気づかれて顔をそむけるタイガ。

バリボリバリボリ

ズズ

…

。

菓子食べる音。
紅茶をする音。
そして沈黙。

「静か過ぎるんじやあああああああああああああああ

!!!!!!

飲みかけてた紅茶をつい噴き出してしまったタイガ。静寂をものゝ見事に粉砕するワイズの声。

「タイガくんッ！何か話題とかないの！？なんでもいいからさあー！」

一
え
あ
く
：

政治小説の歴史

じばりへもえひ

「そういえばさ、ルシアって何者なの？」

リジンサルト酸の過剰は、かにうる。

「ルーニーなもんじゃねーじゃ。その……エリからやられてきたのかとか……。」

あ、そゆこと。とばかりの表情になるウイズ

「アーティストの心」

「…………」だよ。惑星『カムラシ』出発。

「そんなバカなッ！『カムラン』は、だいぶ昔から人が住めないよ
うな惑星じゃないか！」

一七、二二

「でもこれだよ。『カムラン』出身だって本人からちやんと聞い

てるんだから。」

▪ ▪ ▪ ▪ ▪

一
いづから?

「から」で、「か」と書いたよ。」

「アーティストの心」

司馬文正公集卷之三

「それでもいいからや。」

タイガのしつこさに観念したのか、ウイズはこう言つ。

「約550年。」

「……は？」

「いやだから、約550年前から。」

…。

…。

…。

…。

「うそでしょ。絶対。」

「ホントだつて！やつぱりタイガくん信じなかつたあ～。」

やや怒り口調になるウイズ。

「だつて約がついてても550年だよ？そんなに生きられるはずないじやない。」

「生きられるんだよ。ルシアちゃんはねえ～。」

その言葉の後、ウイズはこう言った。

「人間じゃないんだよ。私と同じでね。」

第60話 タイガとワイズの会話②

「人間じゃないって……どういう意味？」

「どういう意味も何も、そのままの意味だけだ。」

たしかに……。

それではとタイガは言い方を変える。

「じゃあ、人間じゃなかつたらいつたい何なのさ？」

「…………。」

少し間をおいて少し冷めた紅茶を一服するワイズ。

そして言った。

「『エルフ』って知ってるかな？」

「『エルフ』？」

少しだけ聞いたことがある。

『エルフ』はかつて生きていた伝説上の生き物だと……。

そう。あくまで伝説。実在するとは聞いたことがない。

「で、でも『エルフ』って伝説上の生き物なんじゃ

「いやいや。実際こうして君の目の前にいるじゃないの 魔女ワイズ様がね」

たしかに見た目こそは魔女……というか『エルフ』だ。

『エルフ』の典型的過ぎるほどの人より長いとんがつた耳。肌が漆黒でもなく褐色でもないところを見ると『ダクエルフ』ではないようだ。

ただ、『エルフ』の典型的な例として長くとんがつた耳とだけでなく、細身の身体と切れ長の目もあるのだが、切れ長の目のほうはワイズには当たまらない。むしろその逆かもしない。

つぶらな瞳……といったところか。

細身の身体のほうはといふと、服を着ているので正直わからないがおそらくそういうなんだろう想像がつく。

タイガは前回戦つたときに吹っ飛ばしたわけだが、そのときワイズ

はあつけないほどに簡単に飛ばされたのだから…。

「『エルフ』は実在するよ。最も、自然の中で暮らす種族だから人目に付かないだけだよ。また、『エルフ』の集落付近には結界が張つてあるからね。それでなおさら見つからないんだよ。結果として、人間たちの間では『エルフは伝説上の生き物』となつたわけ。」

「へえー。」

おもわずそう口から出てしまうタイガ。

エルフは賢明だと聞くが、その点でもウイズは当てはまるだろ。

「……てことは、ルシアも『エルフ』なのかい？」

「せいいかーい『エルフ』はすごく長い寿命だからね。おまけに見た目に全く老いがこない。ある程度、成長すると100～25歳くらいの若さで見た目はほとんど変わらなくなるよ。それで死期が迫り始めたら老人みたいになるんだよ。」

「へえー。……てことはウイズもルシアも若いほうなんだ。」

『エルフ』のなかでは……と言つ部分はあえて言わない。ということはルシアは見た目こそ15歳ほどだが、550年前から生きているつてウイズは言つていたから実際の年齢は……。

「じゃあルシアの歳つて550……。」

ドゴオオオオオオオオン

ウイズからの強烈なストレートパンチが破裂。そのまま、見事にぶつ飛ぶタイガ。

「なにすんのヤツー！」

「女の子の年齢を口に出すとするなんてタイガくんサイテッ！……。」

「こういう考えは人間も『エルフ』も変わらないのか。」

「……すみません。」

もと座っていたソファに座り、とりあえずあやまるタイガ。

「よしよし。いい子いい子」

(僕は子ども扱いかよ。)

「ま、私はタイガ君が思っているほど生きてないけどね~。」

「……。」

歳を聞くとまたぶつ飛ばされるだろう。

口で言わない代わりに目で言ひ。

「私は15歳だよ

歳を聞くとまたぶつ飛ばされるだろう。

わかつたのか自分の年齢を言ひウイズ。

15歳つて……自分と2歳しか変わらない。

ルシアもパツと見た感じ15歳だったが、年齢は軽く500オバ

。それで15歳の若さを保っている……。

『エルフ』の血は偉大だ。女性の方々はなぜ『エルフ』がうらやましいと思うだろ?。

「……それでさ、タイガくん。ちょっと私の相談に乗ってほしいんだけど……。」

「相談?」

ウイズの表情はどこか違っていた。

なんていうか……真剣。

もとよりこのためにタイガを呼んだんだろ?。……といふか強引に連れてきたのだろう。

「うん。僕でよかつたら、相談に乗るけど。」

ウイズは自分に『頼みがある。』と言っていた。

おそらく頼みとは『相談』のことなのだろう。

それ抜きでも、困っている人をほうっておけない性格のタイガは、ウイズの相談に乗ることにしたのだった。

第60話「タイガとウイズの会話2」（後書き）

エルフ

伝承におけるエルフの姿は、基本的に人間に近い姿をしている。大体の伝承において自然と共に暮らす種族であり、住まう自然について深い知識を持ち、これを齎かすものを許さず、妖術をもちいる。エルフは一般に、不死もしくは非常に長い寿命を持ち、事故に遭つたり殺害されたりしない限り、数百年から数千年生きるといわれている。ただし、徐々に活力がなくなるなど、「枯れていく定め」にあることは確かなようだ。

ダークエルフ

特殊なエルフの種族としてダークエルフ（闇エルフ）を登場させている物語やRPGは少なくない。そのような作品では、普通のエルフは光や善、秩序の体現者、ダークエルフは闇や悪、混沌の体現者と定義されていることが多い。容姿については、ほぼエルフと同じだが肌の色だけが漆黒（あるいは褐色など）であるとするのが典型的である。そして大抵は、普通のエルフと強く敵対する存在で、エルフと同等の能力や洗練された文化を持つものとされる。

参考サイト

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%A8%E3%83%95>

第6-1話「揺れるタイガ」

「それで、相談つて何？」

「……………タイガくんはさ、『エルフ』のことをどう思ひへ？」
「？」

唐突に言われて返答に困るタイガ。

「どう思つて…何も思わないけど。」

心底から思つてることを言うタイガ。

タイガにとつて、相手が人間だろうが『エルフ』だろうがどうでもいいことである。

「ホントに？」

「うん。」

そう言つと、タイガは残りの紅茶を飲み干した。

それを見てウイズは

「どうするタイガくん。」

「なにが？」

「いや。紅茶をまだ飲むか飲まないのか。」

「えへっと…。」

正直タイガは、自室として用意された部屋に行つても特にやる「こと

なんてない。

やることがなくそのまま食つちゃ寝みたいな行動をするよりもウイズと会話をしていたほうがいくらか暇つぶしになる。

「うん。じゃあお願ひしようかな。」

「りょくかくい じゃ、まつててね」

ウイズはタイガのティ カップを台所まで持つていった。

……………。

なんだかつ。この感覚は……。

一秒でも早くここに彼らのもとを離れたいという気持ちが徐々に薄れ始めていた……。

なんだか、自分の思つているような場所ではなかつた。てっきり自分はここで殺されるんだと思つていた。仲間にすることは口だけで……。そして自分を殺した後、邪魔な『ラグナエス』の人たちを殺すのだと。

けど、違つていた。

少なくとも、ルシアとウイズは自分に危害を加える気はないとわかる。

特にウイズはこうして僕と会話までしてくれる。

『仲間』と僕を認識して……。

なら、僕はどうしたらいいんだろう。

『ラグナエス』の人たちは僕のことを『仲間』として受け入れてくれている。

けど、ルシアたちも僕のことを『仲間』として受け入れてくれる。

そして僕は今迷い始めている……。

ここに初めてきたときは『ラグナエス』に帰りたいと思つていた。

だけど、ここにいる人たちも心底から悪い人じゃないとウイズと会話していくわかつた。

別段悪い人たちと戦う必要なんてあるのだろうか。

ルシアは「『ラグナエス』の人たちと自分たちの敵は同じかもしない。」と言つていた。

なら、共に手を取り合つて共通の敵を倒すことはできないのか。

……できれば戦いたくない。

「はいは～い タイガくん 紅茶持つて来たよ～……って、あれ
れ？タイガくん、やけに変な顔になつてるよ。」

「へ？」

ウイズに言葉をかけられ考え方を止めるタイガ。
よほど悩んでいるような顔をしていたのだろうかとウイズに言われ
て思うタイガ。
だけどこの悩みは、とても大切なことだ。
人が死ぬか死なないかがかかるつている悩みだ。

タイガは揺れる。

第62話～夢、ゆめ、ゴメ～

「んで、話つてのはなんなんだよ。」

それがラピスの第一声。

現在、ティレク、セルリア、ミラージュ、シャープ、ラピスはブリッジにいる。

その理由は、カイルが「話がある。すぐに来てくれ。」と艦内放送で呼んだからだ。

「もしかして、タイガのことか？」

ティレクの言葉に、カイルはこくりと頷く。

「そう。実はタイガの居場所と思われるような場所が特定されたんだ。場所は惑星『カムラン』。人が住んでいないはずの惑星なのに、なぜかレーダーで確認したところ生命反応があった。」

「だからと言つて、それでタイガがいるかどうかは別だとアタシは思うけどねえ。」

たしかに。人が住めそろにない場所にタイガがいるとは限らない。「だけど、オレは行つてみる価値はあると思うんだ。せっかく見つけたんだしさ。みんなはどう思つ？」

「どう思うも何も、可能性があるなら行つてみるべきだと思つわ。ね、みんな？」

ミラージュの言葉に、反論するものはいない。

「よし、決定ッ！『カムラン』に着いたらまたみんな呼ぶから、それまで自由にしててよ。」

そつとカイルに、他の一同は従つことにしたのだった。

そこは荒野だつた。

ただ、灰色の地面ではなく赤く血で染められた地面…。

血の臭い…。気分のいいものではない。

その血の発生源であるたくさんの中の兵士たちの死体がとにかく山積みにされていた。

……また、……この、ゆ、め……。

そんな感じで、青い髪の青年と銀色の髪の少女が互いに剣を交えていた。

……ああ、あのコメの…ひづ、せか……。

青年と少女は互いの身を削りあつ。

青年の腕に少女は「」の持つ剣をかすらせ、青年は少女の頬の肉を裂く。

そんな戦いが続き、少女は青年の攻撃で吹き飛ばされて死体の山に埋もれるが、少女はその死体を足蹴にしてその場から力づくで退か

す。蹴つても退かすことのできない死体は自分の持つている剣で5体にバラして退かしやすくした後、再び雑に退かす。

周りに積み上げられている兵士の死体は2人にとってはもつただの『風景』なのだろうか。

少女の行動は、まるで小さい子供が小石を蹴つて遊んでいるようこすら思えてしまう。

それを感情が無いような目で少女を見る青年。少女の行動が、さも当然のようにこの青年は思っているようだ。

「わざわざ障害物を退かしてくれて…感謝するよ。」

青年の口が開いた瞬間に言つた言葉がそれだ。

……なん、で。

何で僕が

こんな、

クルッタ、

コメを、

みなきや、

いけないんだ…。

早く…

せやく…

ハヤク…

田貢めん…

わざわざ…

メガメロ…

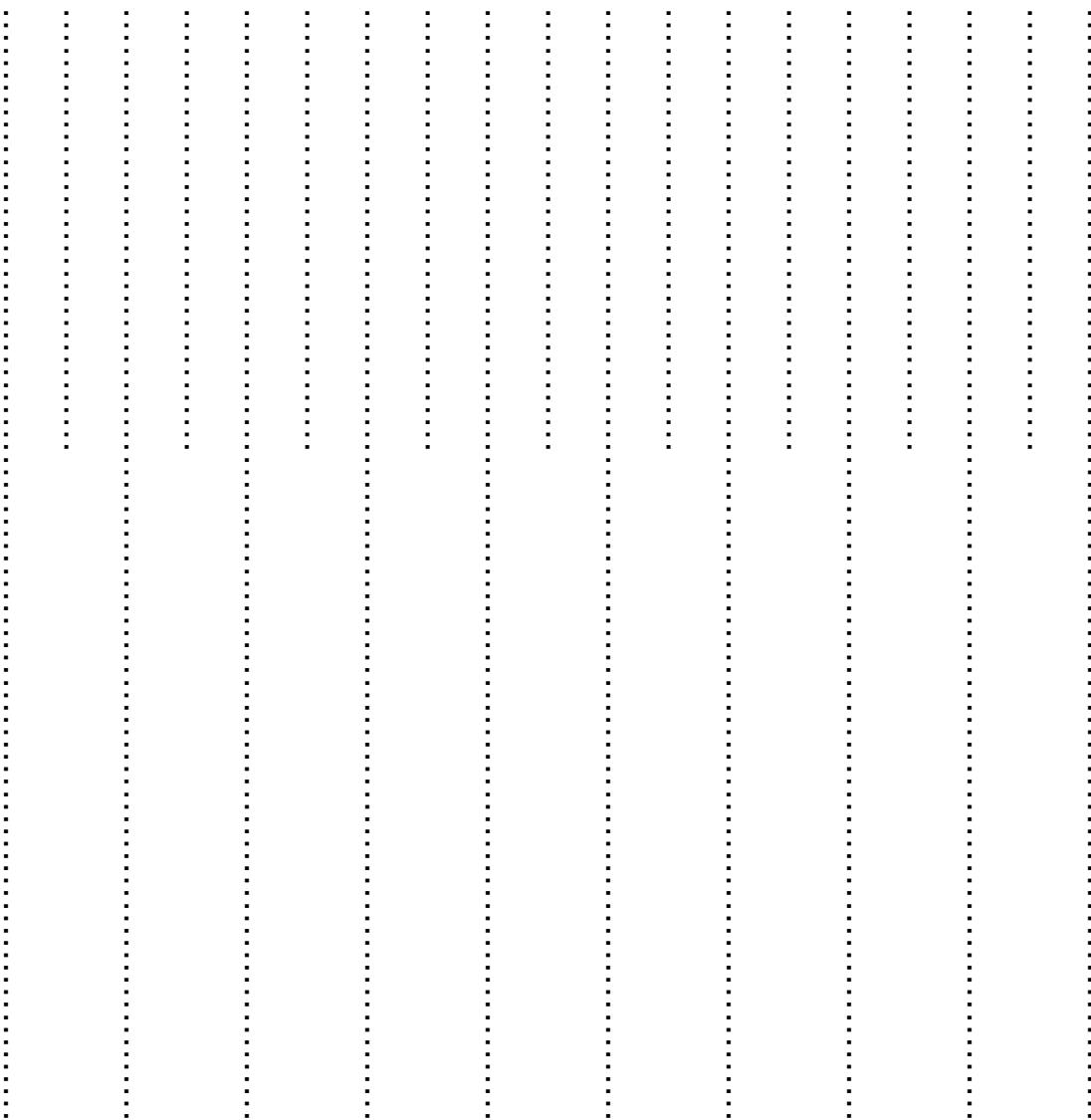
僕、

ぼく、

ボク、

こんなの…

גָּתָה...



.....

気持ち悪い

第63話／声

はあ……はあ……はあ……

タイガはベッドから起きると、まるで全力疾走でマラソンをしてきたかのように呼吸をしていた。

着ていたシャツは冷や汗でびちょびちょ。手は汗で濡れていた。

最近、やけにあの夢を見る気がする……。

荒野だけど、灰色の地面ではなく赤く血で染められた地面で、リアル過ぎるくらいの血の臭い……。

それから、

たくさんの兵士たちの死体がところどころ積みに……

そこまで回想して、タイガはそれを止めた。

はつきりいつて気分にいいものでない。思い出すだけで吐き気が感じるような内容の夢だった。

「……ああ、たしかここって自分のために用意された部屋だっけ。今気づいたようにタイガは呟く。

タイガはウイズの部屋を出るとまっすぐ自分に用意された部屋に戻つて、そのまま何もすることが無いので眠つたのである。（その結果がある夢か……）

はあ～、と深いため息をひとつ。気が落ち込む。なんとなくタイガは窓から外を見る。夜だ。

さきほどまでの砂嵐がうそのように止んでいた。

どうやら『カムラン』の砂嵐は、夜には起きないようだ。

「…暇だし、外に出てみよつかな。」

沈んだ気持ちも元に戻したいし…と考えて、タイガは一人外に出てみることにした。

外ははつきり言つと「寒い」の一言。だが、タイガにとつては落ち着ける寒さだ。

タイガが現在住んでいる塔の辺りはすべて砂。砂漠である。

そんなところで、タイガは一人寝転んでいた。

寝て視界に入つてくるのは星の絨緞。

明かりが塔以外からはどこにもないので、はつきりと星が見える。

広大な宇宙。

そこには、

数え切れない数の星があり、

惑星があり、

命がある。

そして、

その命の数だけ、

喜びが存在する。

また、悲しみも

……………。

「…………。」

そんなことを思いながら、タイガは星空を見ていた。
そして、自分でその通りだなあと思つてみたりもしていた。

人間の母星『カムラン』。その母星を人間は捨てた。

母星を殺すほどまでに成長した技術。それを平然と人間は今現在も使い続けている。

おそらくそうしていられるのはたとえ自分の住んでいる惑星が滅んでも「代わりの惑星があるから」だと思つてゐるからであらう。

今はあるかもしれない。

だけど、形あるものすべて有限だ。無限など無い。

『何か』と競い合つよう、文明は進化し続けている。

その『何か』とは、恐怖、不安と言つた類のものかもしれないけど、そんなものは僕にはわからぬことだ。

ルシアたちも、『何か』と戦おつとしている。

『ラグナロス』の人たちも、『何か』と戦つてゐる。

……なんだか。僕はこの『何か』が全部違うものとは考えられない。

全部同じに思える……。

ドクンッ

突然、タイガの鼓動が高まつた。
それと同時に、凶悪なまでの頭痛がタイガを襲つた。
ハンマ か何かで力いっぱい殴られたような痛み。

メザ、 ロ。

だ れ ?

だ れ な ん だ ?

ザ メロ 。

ザメ ロ。

ワガ キオ メ

ダレカ キいて るツ。

ダ。

ボ ハ、 オマ

?キコエ ない。

ボクハ 、 オマエ

ダ。

シらないッ。…………シらな

ワガ…………キオ…………ク

「知らないっていつてるだろおツツ！――――――」

大声で叫ぶと、タイガはその場で氣を失った。

砂砂漠に響く青年の声。

聞いている者は、誰もいなかつた。

青年以外は。

第64話／避けられないもの

僕は7年前、自分の家を出た。

家に居続けると、ホンモノの殺人鬼になりそうな気がして……
いや、もうすでに殺人鬼だ……

今でも疼く、その感覚……

今まで近づくに仲間がいたから、なんとかそれに耐えられていた。
ただ、今回は殺人鬼としてだけではない、何か別のものも表に出ようとしていた気が

「タイガくんッ！」

甲高い女性の声でタイガはうつすらとまぶたを開けた。
タイガが最初に見たのは、魔女ウイズの見下ろす顔だった。
なにやら心配そうな表情をしている。

「…………。」

「よかつたあ。目を覚ましたんだ。」

ウイズはそう言つとタイガを見下ろすのを止め、ホッと一息つく。
タイガは自室のベッドにいた。

だけどタイガは、さきほどまで外にいたはず

「…………なんで、僕はここに？」

「タイガくん。私が外でちょっと気分転換しようと出てみたら倒れてるからびっくりしたよ。」

「倒れて…………。」

ああ、あれか。頭痛と同時に変な声が聞こえ始めたあの……。

僕は知っている。ときどき、昔の自分に戻りそうになり、声が聞こえることがある。

他の誰でもない。自分の声が自分の頭で響く。

だけど、今回のは少し違っていた。

それと一緒に、何か別の声も聞こえたような……。

「タイガくん？」

考え込んでいるタイガを見て、ウイズは声をかける。

「え？……あ、ごめんね、ウイズ。なんだか迷惑かけちゃって……。

「ああ、うん。私は別にかまわないけど

他に何か言いたそうなウイズ。

「僕なら大丈夫。僕にかまわないので自分のやりたいことをしてきなよ。」

「ああ、うん。それじゃあね。」

ウイズはそう言つとタイガの部屋から退室した。

それからしばらくすると、今度はルシアがタイガの部屋に入ってきた。

「ルシア？どうしたの？」

「気絶していたようだね、タイガ。」

「まあね。」

事実なのだから否定はできないと思ったのか、タイガは单刀直入にかつこまかすような返答は避けた。

「それで、僕に何か用があつてここまできたんじゃないの？」
「まあん。キミにとっては、喜ぶべき状況か、それともそれとは逆か……。」

タイガは首をかしげる。そんなことを言われただけじゃ何か見当がつかなかつた。

「……なんなの？それって。」

「……。」

ルシアは少し間をおいて、いつの間にか

「『ラグナエス』が、惑星『カムラン』に近づいてくる。」

「なッ。」

「おそらくキミを追つてだらうね。始めに言つておくれば、やつらが攻撃を仕掛けたらこいつも全力でやつらを倒させてもいいつよ。」

「……。」

言いたいことだけ言つて、ルシアは退室した。

戦いは避けられないのか……。

第65話「通信での会話」

現在『ラグナエス』はタイガがいる塔より200メトルほど離れた場所で着陸している。

下手に近づきすぎると攻撃されるかもとカイルが思ったからだ。その意見にみんなも賛成している。

辺りは砂嵐でほとんど見えない。ときどき塔の影が見えるくらいだ。ちなみに主要メンバはブリッジにいる

「こんな状況じゃあ下手に外に出れねえな。」

。ボソリとぼやくラピス。敵の本拠地らしいものが田の前にあるのに、攻め込むことができないので少し苛立っていた。

「待つしかないねえ。それにまだ敵と決まつたわけじゃないし。人が住んでいるかも疑わしいよ。」

そんなことをシャープが言い終わると同時に

「艦長ッ！」

「ん？ どうした？」

オペレタがカイルを呼ぶ。

「通信です。発信源はある塔の中からです。」

「…………さて、相手は人違いか、それとも敵か……。」

そう言いながら、カイルはオペレタに通信をつなげるように指示する。

「モニタに映せ。」

「はい。」

通信をつなげモニタに映つたのは

「やあ。『ラグナエス』のみんな。遠方からはるばる来てくれて『ぐるつさま。』

銀色の髪の少女。

「あ、ボクの名前はルシア。」

「わざわざ自己紹介『ぐるつさま。オレは『ラグナエス』艦長。」

カイル・クロードだ。」

「ふうん。

キミたち、タイガを追つてここまで来たんでしょ？」

「てことは。」

「うん。ここにタイガは居るよ。」

「タイガさんは無事なんですか？」

ルシアの言葉を聞いて、言葉を荒げながら質問するセルリア。

「安心しなよ。タイガはボクにとつて大切な人だ。傷ひとつ付けてはいないよ。」

その言葉を聞いて、とりあえずホツと一息ついたセルリア。

「質問させてもらつ。タイガをなぜ連れて行つた？」

あくまでも普通に質問するカイル。相手に対する怒りを殺して…。

「さつきも言ったとおり、タイガはボクにとつて大切な人だからさ。」

「どういう意味だ？ もつと詳しく言つてくれないか？」

長年からボクと同じ立場の人間だからさ。もつとも本人はすっかり忘れてしまつているようだけれどね。」

「同じ立場の人間つてどういうことだ？」

「…………。」

モニタ上に映るルシアは少し考えてからこう言つた。

「单刀直入に言うと、ボクとタイガは『英雄』なのさ。」

「英雄？」

「理解できていないうだね。なら、説明してあげるよ。」

今から550年前、この惑星『カムラン』で『崩壊戦

争』が終戦したことは知つているよね？」

その質問にカイルたちは頷く。

「その『崩壊戦争』の後、2人の英雄が現れた。」

「…………まさか。」

「そう。英雄ヴァインとルシア。その英雄ルシアとはボクのことさ。そして、キミたちだけに言つておくけど、タイガは英雄ヴァインの

生まれ変わりだ。」

「なッ」

カイルだけじゃなく、ブリッジにいた全員が驚く。当然だろ？
「で、でも歴史ではヴァインとルシアは相打ちになつたって

」

「はつきり言えば、あれは嘘だ。」

おそろしいほどシンプルな答え。

「歴史改变さ。おそらくキミたちは学校の教科書とかで勉強したんだろうけど、歴史改变なんてざらにあるよ。それにこれは当時を生きていた本人が言つているんだ。うやむやな教科書に書かれているものより、当時を生きてきた本人に聞いたほうが確実な歴史だらう？」

「仮にそうだとして、ルシア。君はどうしてそんなに長く生きられる？」

「それはボクが『エルフ』だからさ。」

「『エルフ』つて、あの……。」

「そう。ファンタジ 小説や伝説や神話とかに登場する種族のことさ。キミたちの言いたいことはわかるよ。だけど事実さ。『エルフ』は存在する。」

。

しばらく静寂がブリッジを包み込む。

「質問は以上かい？」

「まだあるよ。英雄ヴァインの生まれ変わりがタイガなんだろ？ だったら、そのタイガに何の用があつて連れて行つたんだ？」
「協力して欲しいからさ。」

「何に？」

「…………悪い言い方をすると、人殺しかな。」

。

どうせならもうと控えて言つて欲しいものだとかいるは思つ。

「だけど、これはこの世界を存続させるために大切な試練さ。」

「どうじうじうことだ?」

「言つてもわからないだろうからこれ以上は言わないわ。ただ、世界の存続にかかることで、タイガ…………いや、英雄ヴァインに協力してもらひのや。」

「…………それで、肝心のタイガはそれを承諾しているのか?」

「まだ迷つてるね。けど、『NO』とは言つてないよ。」

「せうか……なら、タイガを返してもらひ。」

「…………。やつぱり、そう来ると思つてたよ。それじゃあ、キミたちは今夜に攻め込むんでしょう?なら、たっぷりと歓迎してあげるよ。」

ルシアはやつぱりと、通信を切るのだった。

今夜、最後の戦いが始まる。

第66話／今夜にも…

僕はどうしたらいいんだ。

ドウスルコトモナイ。己

ノ本能ノママニ。

このままじゃあ、『仲間』が…。

本能ノママニ行動セヨ…。

だけど、僕が行っている『仲間』は、
どちらの『仲間』のことを言っている
のだろうか…。

三。

己ノ本能、『殺戮』ヲセ

敵モ味方モ関係ナク…。

……さつきから変な声が聞こえる。

ダ。

オマエハ所詮『殺人鬼』

ソレハ、他ナラヌオマエ

自身力

知ツテイルコトダ。

止めてくれ。

僕はあのことを思い出したくない。

オマエノ『血』ガ

思イ出シタクナクトモ、
他人ノ血ヲ求メテイル。

…違う。そんなはずないッ。

ソンナコトアルサ。

サア、7年間抑エテキタ

『本能』ヲ解放セヨ。

したくない。僕はもう……。

よハみ解が放えテるキガルよハイズダ。

嫌わ、デガモき今お夜ぐ二

解放スル氣ニナツタカ？

嫌だ。

ツ
！
！

ソウカ。

ダガ、先程モ言ツタヨウ

二、今夜一ハ嫌テモ解放スウダロウ。

「だからそれが嫌なんだよッ！！」

血ヲ持ツテイル。

無駄だ。才前ハ呪ワレシ

逃げラレナイ。

よトみキが力えラる、オガマヨエイハ『殺人鬼』ナソダ。

「その言い方は止めてくれええツ！！！」

自室の隅々にまで響き渡るほどのタイガの大声。

途中感情が高ぶりすぎて同じようなことをしたのだが、それ以上だつた。

ぜえはあと、肩で息をするタイガ。

「　また、あの声……。」

気がおかしくなりそうだった。

さつきのでも半狂乱状態だつたのだから、これ以上こんなのが続くと本当に

嫌^テモ今夜二ハ解放^テキルハズダ。

あの言葉と同じになりそうだった。

さきほどまでタイガは一人ベッドに腰掛けっていた。

そんなときに、あの声が聞こえたと言つわけだ。

けど、前もそうだったけど、声が2つ聞こえたように、タイガは思つていた。

ちょうど、声が重なつてうまく聞き取れなかつたが…………。

そんなとき、自室の部屋の扉がノックの後開いた。ルシアだ。

「…なんだい？今、気分が悪いんだ。」

「うかうか。だけど、さらに気分が悪くなるようなことを言わないといけないんだ。」

「…………なに？」

「今夜、『ラグナエス』のやつらとボクたちが戦うことになる。以上だよ。キミはそのとき好きにしていいよ。戦闘に乱入するのもよし。やつらのところへ帰るのもよし。ただ、そうした場合、ボクたちがまた取り返すまでだけど。」

ルシアはそう言つと、部屋から出て行つた。

嫌^テモ今夜二ハ解放^テキルハズダ。

…………。
本当にそうなりそうだ。

第67話／最後の戦いの幕開け

星空が見えるようになる。

辺りは月明かりと星の明かり、そして塔から漏れる光。砂嵐は治まり、ひんやりとした空気が惑星『カムラン』を包み込んでいる。

夜だった。

『ラグナエス』から数人の人が現れる。
ティレク、セルリア、ミラ・ジュー、シャ・ブ、ラピスの5人。
カイルは戦艦の見張りである。

「……みなさん。タイガさんを連れ戻しましょう!」

「「「おお ッ!!!!」」

セルリアの一言で、最後の戦いが幕を開けた。

「始まつたね。」

応接間で、ティレクたちの行動を監視しているルシアがそう言った。

「みんなたちにタイガくんは渡さないんだからねえ」

「その傍らにはルシアの親友と呼べる存在、ウイズがいた。

その他の者たちはすでに自分たちの持ち場に行っている。

「当たり前さ。タイガは渡さない。英雄ヴァインの生まれ変わりなんだからね。記憶もあの様子じゃ戻つていないようだし、仮に戻つたとしたらタイガはこちらに加担するだろうね。これから本当の戦いが始まる买东西を思い出せば……。」

塔内部。ひたすらに螺旋階段を上るティレクたち。

ちなみに塔に侵入してからすでに10分ほど経過しているが、敵という敵には全くあつていなかつた。

そして、ようやくひとつある部屋に到着する。戦闘するには十分すぎるくらい広い部屋に。

その部屋の中心に、1人の男がこちらを見据えていた。

「……」

シャープはその男を見て驚く。いや、その男に面識があるものは全員驚いた。

「 来たか。」

「 ジ クフリ ト…………。」

蒼い長髪をし、腰には長剣をぶら下げている男。そつ、傭兵ジ ク フリ ト。2つ名を『冷氷のジ ク』。

「 なんでアンタがここに？」

と、シャープ。目付きは鋭い。殺氣を感じるほどだ。

「 依頼だ。」

たつたそれだけ……だが、ジ クフリ トの職業は傭兵だから納得できた。

「 アンタ。こんなやつらの加担するなんて、よっぽど性根が腐ったんだねえ。」

「 おまえと別の道を歩んでから数年経っているんだ。いくらでも性根なんぞ変わるだろ?。」

「 アンタの場合。腐って変わってるけどね。数年の年月は、人を腐らせることができるって、アンタを見てよくわかつたよ。」

それだけジ クフリ トに言つて、ティレクたちに振り向き、こう言つた。

「 アンタたちは先へいきな。こいつはアタシが相手をするからさ。」
シャープの気持ちに搖らぎは無かつた。本気だということがわかる。
「 わかった。だけどシャープ、俺様たちとタイガを悲しませんよう
なことにはなるなよ。」

「 ああ。言われなくてもね。」

その返答に満足したあと、ティレクたちは先へと行つた。

「 …さて、はじめようか。ジ ク。」

「 そうだな。邪魔はいなくなつたしな。」

互いにそれぞれの剣を構える。そして、互いに本氣で戦つ氣でいる。
言い換えれば、互いに互いを殺す氣で。

第68話 それぞれの戦い

ティレクたちは再び、螺旋階段を上つていく。

敵は今どのくらい地雷を設置したのか。」

たか 気に抜けない

そして再び先程のよつた大きな広い部屋にたどり着いた
そこにも敵が一人。全身鎧の男が……。

どうやら、1つの部屋に1人敵が居

第一印象。むせい。

むをい男が叫んでいるのをねらだ。

そして、自分の背をティレクたちに向けながらいひついへ

「おれに任せな！」
後で絶対追い戻してやるよお！

ティンクのその言葉を聞くべし、なぜかさうしたナムのペス。

「少しうらや、止めるよつた声をかけて欲しかつたな。」

「ラビズは」んなやつに負けるほり弱くは無いだろ?」

「……」

「どうせんだろ？ も、いつたいつたあ！」

テビアはそう言われテイレクたちはむさい男…才ガナイトの後

らを犠牲にして、仲間を先に進めるとは、さすがは俺のライバルだ

ツ！ツ！ツ！ツ！ツ！

「だれがおめえのライバルだ。おれはなあ、おまえみたいなむせこ
やつは嫌いなんだよッ！」

さきほどまでの心配そうな態度がうつるようだ。

「な、なにがおかしいのよッ！！」

「なんで俺様がおまえの心配しなきゃなんねえんだよ。おまえがこんなところでくたばつちまつたら、タイガに言い訳すんのが面倒になつちまうからだよ。」

「あつそツ！ いらないお世話よッ！ あんたなんかに心配されなくつてもねえ、あたしはそんなに弱くは無いわよッ！ だからせつさと先に行つてッ！！」

「はいはい。 いくぞ、みんな。」

ティレクたち と言つても残りは3人。

とにかくティレクたちは次の螺旋階段を進んだ。

「 オレ相手に1人とはな。どうやら本当に死にたいようだな。」

「死ぬのはあんたよ。」

「やあ、やつときたね。待ちくたびれてたよ。」

そこには、槍を玩具を扱うかのように振り回している槍使い、通称

『人斬りセシル』がいた。

セシルを見るや否や、ティレクはセルリアにこう言った。

「ここは俺様に任せとけ。」

「ティレクさん……。」

「残りはおまえ一人で先を行け。」

「ですけど ッ！」

「セルリア。おまえは絶対にタイガに会わないといけないんだ。この場にいる……いや、『仲間』の中のだれよりもな。」

何かを言おうとしたセルリアの言葉をさえぎり、そう言葉を述べるティレク。

「…………わかりました。ティレクさん、死なないで下さいね。」

「当たり前だ。タイガのバカには、俺様のよつな親友がついてなきやいけねえからな。」

満足したのか、セルリアは先に行く。

「…………へえ。ティレクっとか言つたつけ？君、タイガの親友なの？」

「まあな。」

そう返答しながら、自分の得物を構えるティレク。

「親友だから、あいつを最後まで見届けねえといけねえんだ。あいつの良き理解者としてもな。」

「ふーん。…………でもさ。残念だけどその願いはかないそうに無いよ。なぜならばくが相手なんだから。この『人斬りセシル』がね。」

「だからどうした？相手が人斬りだろうがなんだろうが、俺様の壁になるやつには容赦はしない。」

第69話『死』の恐怖

「「はあああああツ！」」

シャープとジクフリート、2人の声が重なる。

そして同時に剣の刃と刃が交じり合うときに響く金属音。

そのまま力で押し合う。

「こつのツ！」

「…………。」

うなるシャープ。一方、沈黙したままうなり声ひとつ出さないジ

クフリート。

沈黙でシャープにフレッシュヤーを『えている』ようにも思えるだけではなく、おまえと私の実力はこれほどに差があるので。と言つていよいよだつた。

そして力勝負は徐々に結果が見え始める。

シャープが押されていた。

単純にいえば腕力である。ましてやシャープは女性。

鍛えも男性よりは筋力の発達がやや遅いのが仇となつていて。

そして、ジクフリートは剣を大きく振るうと、シャープはの拍子で体勢が崩れてしまう。

やばい……と思つたときにはすでに手遅れだつた。

ジクフリートが情け容赦なしにシャープをちょうど胸部と腹部の境目を真横に斬りつけた。

「…………ツツ！……！」

声にならない悲鳴を上げるシャープ。

そして左手で斬られた部分を押さえるシャープ。だが、そんなものでは血は止まらない。

蛇口をひねると水が出るよう、斬られた部分から血が流れ出している。

左手も血で染まる。短い時間のうちに

。

かろうじて心臓という人体のHンジンとも言えるモノにあ傷ひとつ付かなかつた。

わざと外したのか。

シャ プにはすぐにわかつた。

相手を『殺す』氣で戦つているやつが、一番手つ取り早く相手を『殺せる』心臓を狙わなかつたのだ。

心臓じやなかつたら首筋を狙うだらうが、ジ クフリ トは狙う気はないと氣配でシャ プにはわかつた。

「 アンタ、アタシを『殺す』氣で戦つてるんじゃないのかい？」

「 ああ。そうだとも。」

「 だつたらなんで急所を狙わない？」

「 『死』の恐怖を、おまえは味わうべきだ。」

なるほど。

ついそり思つてしまつシャ プ。

よつするに、急所を狙えば相手はほぼ一撃で『殺せる』が、その代わりに相手に『死』の恐怖を体感させることができない。なにせ一瞬で相手を『殺せる』のだから。

そうではなくジ クフリ トは、相手を痛めつけるだけ痛めつけて、しだいに近づいてくる『死』の恐怖を体感させた後、『殺す』氣でいるのだ。

ふ。

1人シャ プは口元を緩ませる。それは決して、自虐的な笑みではなかつた。

むしろ逆だ。相手をあざけ笑つているのだ。

そして傷口を押さえるのを止めて、ジ クフリ トと真正面から向き合ひ。

『死』の恐怖を味わうべきだと……ふざけるなよ。

アタシはもう飽きてんだよ。『死』の境界線に行くのはよ。

モノホンの戦争でアタシは戦つたんだ。『死』の恐怖なんてそのと
きに味わったし、なによりもう飽きてんだよ。

アタシはもう飽きたから、今度はおまえに体感させいやるよ。

一度も『死』の恐怖を味わったことのない……

アタシの戦いの友……

ジ クフリ ト。

少しばかり、ジ クフリ トは背筋が凍つたような感覚を覚える。
殺氣だつた。それも、さきほどまでの殺氣とは比べ物にならないほ
ど……。

目の前には一人の戦友、シャ プ。

「ジ ク。」

「なんだ？」

「『死』の恐怖を体感させてやるよ。」

刹那の間だつた。ジ クフリ トの視界が赤く染まる。

赤く、紅く、あかく、アカク.....。

その紅いものからは鉄の臭い。なにが起きたかジ クフリ トには
わかるまい。

自分の身体がズタズタに、紙がはさみで切られるようにズタズタに

。

そのまま仰向けに倒れるジ クフリ ト。

ふ。

今度はジ クフリ トが笑みを浮かべる。

『死』の恐怖を体感させてやると言つたわりこな、できなかつたなあ。あまりにも一瞬で。

ジ クフリ トはまぶたを閉じる。

それが、最期にジ クフリ トの思つたことだつた。

第70話 アカイフンスイ

「あらはラピスとオ ガナイト。当然ながら、戦いは始まっていた。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおッ！……やるなああああああああああああああああああ
ツツ！……さすが俺のライバルだああああああああああああ
あああああッ！……」

いちいち大声で叫びまくるオ ガナイト。獣の咆哮と思われても仕
方がないくらいだ。

そしてラピスを真つ二つにしようと大剣を振り回す。

はたから見ればオ ガナイト優勢。ラピスはひたすらに相手の攻撃
を避けるだけ。

だが……

いけるな。

思わずそう思つてしまふラピス。

なぜならオ ガナイトの攻撃方法は、大剣をとにかく振るつて相手
を一撃で仕留めるもの。

ただ、その代わりに大剣を振り回すときに大振りしなければならな
いので攻撃前後の隙が大きい。

拳句に攻撃方法がほとんどそれしかないと言つてもよい。

それに対してもラピスの攻撃方法は、一撃必殺ではないが小回りが利
くうえ、隙がほとんどない。

それに盗賊として鍛え上げた足の速さやアクロバティックな動きが
あるので、オ ガナイトの攻撃は非常に避けやすい。
つまり、ラピスにとつてオ ガナイトのような力で押していくよう

なやつは敵ではないのだ。

「おりやああああああああああああああああああああああああ
ツ！――！」

大きく大剣を振りかかるオ ガナイト。当然ながら隙ができる。
無論、ラピスはこれを逃がさない。

これ以上こいつの遊びに付き合つていられないのだから……。

瞬く間にオ ガナイトの背後に回るラピス。そしてそのまま相手の
首筋を

じゃあな、デカブツ。

短剣で斬りつけた。

「つ…………おおおおおおおおおおお…………おおおおおおおおお
おおおおおお ツツ。」

噴水だ。

ただの血管ひとつ傷つけただけで紅い水が人体から噴き出していく。
そして噴水を出している大男は死に際だからなのか痙攣していた。

あの獣の咆哮のような声を出しながら

第7-1話／対面

セルリアがひたすら螺旋階段を上ると、ようやく階段の出口にたどり着いた。

階段が終わつた先には大きな長い通路が続いていた。床には赤い絨緞が敷かれており、その先には大きな扉がある。

この先に、タイガさんが……。

セルリアは一人、大扉に向かつて歩み出す。とにかく絨緞にしたがつて進む。ところどころで分かれ道のようなところがあるが、セルリアはまっすぐ先にある大扉を目指す。

自分はどうなるかわからない。

ただ、返事をしなくちゃいけない……。

そして会いたい

やがて大扉の前までたどり着いた。

開けばもう後戻りまできないう。

いや、もうすでにここまで来てしまったのだから後戻りはできない。意を決してセルリアは大扉を開けた

「 驚いたなあ。まさか1人でここに来るなんて。」
「 ホントホント。さすがの私もビックリ仰天つて感じだよ。」
そこには2人の少女がいた。
その2人と真正面に向かい合うセルリア。
「 ルシアさん。それと……。」
セルリアは魔女の少女を見る。
「 あ、私? 私はウイズ。魔女だよ。」
視線に気がつき、ウイズは自己紹介をする。
「 単刀直入に言います。 タイガさんをかえしてください。」
「 通信でもボクは言つたけど、それは無理だね。ヴァインは……いや、キミたちの言い方にあわせようか。タイガはボクの大切な人だ。かえすわけにはいかない。」
「 たしかにタイガさんは確かにヴァインさんだつたかもしれませんッ! ですが、今はヴァインさんではなくタイガさんなんですッ! 生まれ変わつて……タイガさんは英雄ではなく……。」
言葉が詰まる。それ以上は大声で言えない。いや、人前ではなかなか

か言えないことだった。

「『なく……』　なんだい？」

問うルシア。だけど、セルリアは言えなかつた。

なぜなら、一番初めに言わなければならぬ相手にすら、言つてい
ない言葉なのだから

だから、セルリアはだんまりしてしまつ。

「あれ～？急に黙つてしまつたよ～？ルシアちゃん。」

「　乙女の悩みだよ。」

セルリアには聞こえないように、ウィズの耳元でそつ囁くルシア。
言つてピンときたのか、ウィズは「あ～、なるほどねえ。」みた
いな顔をしている。

「そつか～。たしかにそれは私たちには言つづらいかもね～。」

「ウィズ。」

「は～い。これ以上は言ひません」

意地悪な笑みを浮かばせながらセルリアにそつ囁くウィズを黙らせ
るルシア。

以後、沈黙が続く

第72話 オマエハボク、ボクハオマエ

素直二ナレ。樂二ナルゾ。

だからあのときだつて
嫌だつて言つたじやないか。
これ以上僕を惑わすな。

マリ、迷ツテイルト言ウコトカ。

…………つるせい。

『惑わすな』？ソレハツ

オマエハ迷ツテイルンダ。

『殺人鬼』デアル『昔

ニモドルカ……。

違う。

ダ。オマエガボクラ否定ス

身ノ存在ヲ否定スルコトニ

ハナイ。少シ『デモ』昔『ニモドリタイト思ツテイルノナラ、モドレ
バイイ。

本能ノママニ行動セヨ。

ツナガルンダ。迷ウコト

ルトイウコトハ、自分自

違ワナイ。ボクハオマエ

嫌だ。

。 。 。

ワリオマエ自身ガ壊レルダケダ。

どうして僕が壊れるのさ。

マエハモドリタイト思ツテ

ノ身体ガ我慢シテイルノダ。

オマエハ救ワレルゾ。

テレバ、後ハボクガヒキウケヨウ。

。 。 。

否定ヲスルノカ。ソノカ
我慢シテイルカラダ。オ
イナクトモ、オマエ自身
モドルガイイ。モドレバ

善人トシテノ生キ方ヲ捨
オマエノ身体ヲ
。 。 。

。 。 。

我慢シテ疲レタダロウ?

ナラバ、ボクニ任せロ。

君に任せれば、
僕は救われるのか?

アア、救ワレルトモ。自

分ノ身体ガ
。 。 。

昔ノヨウニ、人ヲ殺シテ

殺シテ殺シマクツテ、自ラ

ノ欲望ヲ満タセ。『殺人

鬼』トシテノ欲望ヲ。

目覚めよ。記憶……。

サア、欲望ヲ満タセ。』

殺人鬼』トシテノ欲望ヲ。

目覚めよ。記憶……。

欲望ヲ満タセ。

記憶よ目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

疲れたなあ。ホントに……。

ドウスル?

疲れたつて、
言つてるぢゃないか。

ソウカ
……………。
。

第73話「その人登場」

「それで、ここまで来たってことは、それなりの覚悟はできているんだよね。」

しばらくの沈黙の後、ルシアがセルリアに問う。

「あなたたちと戦うってことですか？」

「まあ、そんなところかな。キミがタイガを取り戻したいって言うんなら、それくらいしか方法は無いけど。」

戦い。最悪のバターンだった。

もしそうなれば、セルリアにははつきりいつて勝ち目は無い。

セルリアの武器は弓矢。弓矢というものは遠距離から前衛を補佐する……はつきり言って護衛的な役割になるものだ。

今、前衛はいない。なにより、セルリア一人で戦わないといけない。仮にそれをなしとしても、2人は戦いのプロ的存在。

勝ち目はゼロに等しい。絶望的だ。

「……んで、どうする？私たちに勝負を挑む？」

「挑みます。　もとより、私は戦いを覚悟でここまで来たんです。」

勝ち目はゼロに等しいしれない。けど、ゼロではない。

0、00000001%でも勝算があるかもしれない。なら、セル

リアはそれに賭けた。

「そうかい。　なら、キミの望みどおり戦つてあげるよ。」

「せめて痛みはほとんどなしであの世に送つてあげるよ。1人で私たちに戦いを挑むからね。」

セルリアは手始めに魔力で矢を生成して相手を射る準備をする。ルシアとウイズはまるで『一度だけチャンスをあげよう』とばかりにまつたく攻撃をしてこようとはしない。

なら、そのチャンスをものにしよう。

セルリアは弦を千切れるかと思えるくらい強く引き、そしてルシア

めがけて射る。

音速ともおもえるほど疾きでルシアの心臓部分めがけて飛んでいく矢。

だが空しくもルシアに当たる直前で矢がはじかれてしまう。結界だ。

「残念だったね。でも、なかなかの攻撃だったよ。」

ルシアは指をパチンと鳴らす。するとセルリアめがけて一筋の雷が落とされる。

魔術『ライトニング』だった。

どうやらルシアもウイズと同じく、下級魔術程度なら無詠唱で発動できるようだ。

「 ッ！」

一瞬だったので何がおきたかわからないセルリア。

だが、倒れて少し時間が経てば自分は攻撃されたとわかった。わかつたところで何もできない。

雷を受けたせいで、身体中の筋肉が硬直し、思うように動けなくなつていたからだ。

ものの数十秒。1分はおそらくかかっていない。それだけで、セルリアは自分の負けを確信させられた。

そんなとき……

バーン

と、景気が良すぎるくらいの勢いで大扉が開いた。

そこには1人の青年の姿。

それは、セルリアが最も会いたかつた人物だった。

タイガ・ウナバラその人の登場である。

第74話『殺人鬼』

「タイガ……さん。」

倒れた身体を少し起こしてセルリアが言つた言葉だ。

「タイガ、どうしたんだい？」

ルシアがタイガに問う。

「獲物がいっぱいだ

。」

その言葉を聞いて、ルシアはタイガに身構える。腰にぶら下げていた鞘から剣を抜いて……。

それと同時に、タイガはルシアに斬りつける。

ほぼ一瞬。さきほどまで大扉の前にいた青年が、一足飛びでルシアの目の前まで迫つたのだ。

かろうじて受け止めたルシア。そのまま力比べになる。

「ど……どうしたのさ。…………タイガ。」

「どうもしない。ただ、欲求を満たそうと思つただけだ。」

そう言うと、タイガはルシアを弾き飛ばす。

「つッ！」

大きく飛ばされるルシア。飛ばされた後、再び構えるルシア。

「欲求つて……。」

「僕の……タイガ・ウナバラの『殺人鬼』としての欲求さ。550年来に会うルシアさん、わかるかい？」

「……タイガ……キミ、記憶が戻つたのか？」

「まあね。『殺人鬼』としての欲求を満たそうと思つたら、記憶が戻つたみたいだ。一種のシヨツク療法かな？善人としてタイガ・ウナバラは生きたかったみたいだけど、なんだかんだ言つても『殺人鬼』の家庭で生きてきた人間はやっぱり『殺人鬼』なんだって思つてね。善人になるのをやめたのさ。」

「……。」

久しぶりに出会つたタイガ。だが、セルリアの知つてゐるタイガと

は違ひすぎていた。

目の前にいるのは、ひたすらに血に飢え、生き物を殺すことを自らの糧としている『殺人鬼』。タイガのうちに秘めていた『殺人鬼』としての人格がよみがえっているもの…………。だが、セルリアの知つているタイガは、こんな血生臭い人間ではない。

誰にも優しくて、眞面目で、必死に仲間を守ろうとする人間……。それはセルリアから見て決して偽善ではなかつた。立派に善人。「タイガッ！！　いや、ヴァインッ！！記憶が戻つたのなら知つていいだろ？ボクたちが殺し合いをする暇はないってことをツ！」

「『崩壊戦争』よりも大きな戦いが近い将来始まるってやつだろ？いいじやない。たくさん的人が死ぬなんて。人が死ぬ分だけ僕は快感を覚えることができるしね。たくさんの鮮血、散らばる肉片、そして死に際に人間が上げる断末魔が戦場に響き渡る……最高じやないか。人間が理性を捨て、ライオンやトラのように野生の本能のままに殺し合つなんて。」

セルリアは信じたくなかつた。

タイガの口から、そんな殺し合いが最高だなんて発言を聞く羽目になるなんて。

「ヴァイン……本氣で言つてるのかい？」

「当然だ。細かいことを言うと僕の人格はヴァインじゃないけどね。れないか？」

「ルシアちゃんは？」

「時間稼ぎをする。こいつは危険だ。」

そう言うとルシアはタイガを睨む。

だがタイガはその睨みを何とも思っていないようだ。

「暇があつたら、下で戦っている人たちを呼んできてくれる助かる。」

「うん。わかったよ。…………死なないでね。」

「簡単には死ないよ。」

それを聞いて満足したのか、ウイズはこくりと頷くとセルリアの傍まで駆け寄る。

セルリアは放心状態で床に座りきっていた。

「セルリアちゃん。一時戦場離脱だよ。」

それだけ言うとウイズはセルリアの有無も聞かずに大広間から出て行つた。

「獲物が減つちまつたな。」

「大丈夫さ。ボクはキミの言う得物100人分にはなるはずだからさ。」

「そうか。…………それじゃあ、殺し合おう。」

第75話／狂っているけど狂っていない

「そうか。 それじゃあ、殺し合おう。」

瞬間、タイガの姿がルシアの視界内から消える。

すると瞬時に身体を横に移動させるルシア。すると、スパンと音が聞こえた。

（疾い。）

早く動いたのにもかかわらず、ルシアは自分の髪をタイガに斬られる。

正直、タイガの足の疾さは異常なほどである。
もともとタイガは足が速いほうだったが、速いというレベルを超えて疾いくらいのレベルだった。

即座にタイガとの距離を離すルシア。だが、距離を離そうとしているルシアにすさまじい疾さで距離をつめるタイガ。

次の瞬間

カン キン ギン カキンッ キンッ……

互いに剣術の撃ち合いになつた。

互いに揺れる髪を散らしあがらも、一撃を口の肉体に入れさせようとはしない。

入れさせたら最後、完膚なきまでに……おそらく死ぬまで、いや死んでも殺し続けるだろ？

「ぐ……ッ！」

一撃を入れさせはしてないが、徐々にルシアが押され始めていた。

英雄すらも梃子摺らすほどの剣術と戦闘力。

いや、それを言つならタイガ自身も元英雄なんだけど。

しかし、ルシアは英雄のときのままの身体だが、タイガは生まれ変わつて全く違う身体……それもさきほどまで記憶を忘れていた人間がここまでルシアを梃子摺らしていることがはつきりいつですごいことである。

ルシアはオガナイト、ジン、セシル、ウイズと強者を従えている人物。そのことからしても、ルシアの戦闘力はすさまじいだろうと予想ができることからもすごいことだとわかるだろう。

しばらく剣術の打ち合いをするとタイガは急にルシアと距離を置く。

さきほどまで休む間もなく剣術を繰り出していた彼がだ。
おまけにタイガは息1つきらしてなかつた。

一方ルシアはと言つと、女性にしてはさきほどの戦いで髪は乱れ、息を肩でぜえはあといいていた。それに汗。剣術を打ち続けた上に、動き回つたせいでもあるだろうが、冷や汗もかいていた。

はつきり言つて強すぎるのだ。

「どうした？ もう疲れたのか？」
「別に……。」

本当の答えは無論疲れている、だ。

だが、下手に弱みを見せると確実に仕留めに来るだろう。

「そうかい。……それにしても楽しいなあ。殺し合つのって。」
「…………。」

昔のタイガからは想像できない発言だ。

「楽しいだろ？ 生と死の境の遊びつて感じで。勝つたほうが生き、負けたほうが死ぬ。最高だな。これほどわかりやすいルルの遊びはないな。ホントに。」

「………… 狂つてるね。タイガ。」

「そうだな。僕は狂つてるかもしれない。だけど、これが人の本来の姿もあるんじやないのか？」

「どういう意味さ。」

「簡単なこと。………… 人間は生きるために植物を摘み取り、魚や動

物を自らのササとするべく肉塊にする。なぜそうするのかというと理由はただひとつ。

生きるために、生きるために、植物と動物を殺す。僕はただ、その標的を人間に変えていけるだけのことだ。そして、その理由も生きるため。なぜなら僕は人殺しをする職業をする家庭のもとに生まれてきたからだ。」

「……。」

「『崩壊戦争』のときも同じだ。自分という生き物が生きるために戦争で他人を殺す。違うかい？」

違わなかつた。

だからルシアは反論はできなかつた。

「だから僕は、正しくは『狂っているけど狂っていない』。

まあ、そんな感じになるな。」

「……。」

「…………さて、話は終わりだ。再び殺し合おうか。生と死の境の遊びの続きだ。」

第76話「槍対槍」

ウイズはセルリアを引き連れてひたすら螺旋階段を下りていく。セルリアはと言つと、未だにタイガの変貌ぶりが信じられないのか放心状態である。

だが、ウイズにはかまつてあげる暇が無かつた。とにかく一秒でも早く仲間を引き連れてルシアを援護する必要があつたからだ。何とか間に合わせようと螺旋階段を下り続けるウイズ。
放心
状態のセルリアと一緒に。

「いやあ～。やるねえ～ティレク。」

「おまえもな。『人斬りセシル』。」

お互いの得物である槍が、何度も何度も交差する。

そのたびに火花が飛ぶ。決定的と言えそうな一撃は2人とも出でない。

ただ、互いに切り傷が身体中に付けられていた。

服を裂き、服の先にある肉を裂き、
骨まではいかないような傷。

そのような傷が、互いの頬、肩、手首、胸部、腹部、脚……

場所という場所にそれはあつた。

そこから生きているモノの証である血が流れ出ている。
赤い色から紅い色まで……いろんなアカ色の血が……。

「てやッ！」

セシルがティレクに向かつて鋭い突きを放つ。狙うは腹部。最も狙いやすい場所だ。

そして、狙いややすいわりには致命傷になりかねない場所もある。それをティレクは瞬時に見切り、とつさに突きの軌道上から身体を逸らせる。

だが、それをセシルは突きから薙ぎ払いに攻撃方法を変える。

「なッ。」

気づいたときにはすでに遅い。

ティレクの腹部に見事な『一』の字が描かれた。

そこから一気に鮮血が流れ出る。

「…………ぐううう…………。」

激痛にその場に跪くティレク。

「どう？わかつたかいティレク。君がいかに優れた槍使いだとしてもだ。この僕に勝てるわけが無いのさ。僕は『人斬りセシル』。人を斬るのが専門なんだからね、僕は。」

セシルの槍の刃先がティレクに向けられ、とどめをさそうとするなんときだった。

「ちよつとまつたあああああああああああああああああああああツツ！！！」

血生臭い戦場と化した場所に、（ばかでかい）女性の声が響き渡る。その言葉に耳を貸したのか、セシルはティレクにとどめをさそうとするのをやめた。

「ウイズかい？」

「そうそう セシル君だいせいかい！」

あいかわらずテンションが明るいウイズ。戦場には似合わない。

そして、その傍らにはセルリア。

「……おまえ、セルリアに何をした！！！」

セルリアを見るや否や、ウイズにそう問うティレク。

自分の傷のことを忘れてしまっているかのようだ。

「まあまあ、ちょっと落ち着いて。えへっと……前なんかあつたことあるよつな」

「ティレクだつて。ウイズ。」

「そうそう。ティレク君。とにかく落ち着いて。頼むからさあ。」

「落ち着いてられるかッ！－セルリアに何をしたかつて聞いているツ！－」

食つてかかりそうな態度のティレク。

「だからちょっと落ち着いて。」

「俺様は質問していんんだぞッ！－」

それを聞いて、ウイズは、はあ…とため息ひとつ。そしてトコトコとティレクに近づくと

「落ち着けつて言つているだろうがああああああああああああああああああああああツツツ－！！！！！」

ティレクをアッパ カットで打ち上げる。

華麗なまでに宙を舞うティレク。その華麗さは放心状態だったセルリアの意識を復活させ、おまけに口をあんぐりとせるほどだ。そのまま重力に従つたまま地面上にたたきつけられる。着地はほめられたものではない。

「ち、ちょっとウイズさああ～んツ－！」

「ん？なにセルリアちゃん。」

「なにやってるんですかツ－－－．．．」

「鉄拳制裁。」

「…………私の仲間なんですけど。」

「仲間の中にも鉄拳制裁は必要だよ、セルリアちゃん。」

「じぶめをしてしまったよつても思えますけど。」

「へ？」

ウイズはティレクを見る。

ピクリともしてない。まるで人形のようだ。

そんなテロップが出てきてもおかしくない状態。

それを見てウイズはセルリアにこう言つ。

「セルリアちゃん。仲間との別れはいつかは訪れるんだよ。」

「『まかさないでくださいッ！』

とつあえずこの後、ウイズはティレクに治癒魔術をし、からつじて命をとどめさせることに成功したのだった。

第77話／格闘戦／

しばらく経つて、ティレクが復活しウイズたちはさりに螺旋階段を下りようとしているとき

ガン、ギン、……キン、……ギンッ

鈍い金属音が響く。互いの得物がぶつかり合つたびに打撃音とともに。

ミラ ジュとジンである。

ジンの武器は鋼鉄でできたガントレット。それに魔力や気を宿らせ、通常の威力より数倍から数十倍に格闘技の威力を引き上げていた。一方ミラ ジュの武器は握り懐剣と呼ばれるものである。

古武器の一つで鉄拳の先端に鉈刃などの肉厚の刃をつけた物である。その威力は人によつては腕の一本は正拳ですつ飛ばすほど。また、頭を割ることも可能といつほどである。

おまけにミラ ジュは魔力こそ使えないが気は使えるのでジンと同じく技の威力を数倍から数十倍に引き上げることができるのと、まさに攻撃力は折り紙つきである。

握り懐剣の威力の大きさと氣での能力アップ。まさに鬼に金棒である。

「てやああッ！…」

ジンの姿を捉えるとミラ ジュは一気に距離をつめ、するどい鉄拳を飛ばす。

握り懐剣の刃が風を切ることで聞こえる風切音。

ジンはそれを瞬時に避ける。疾さはタイガとほぼ互角とも言える疾さだ。

そのままやや棒立ち氣味のミラ ジュとの距離を狭め、鋭い蹴りを放つ。

当たったかと思われたが、ミラ ジュはそれを紙一重で避ける。そのかわり脇腹部分にかすつたため、そこから鮮血が噴き出す。しかし、それだけではミラ ジュはひるまない。
いや、ひるむような姿を見せたらジンは確実にとどめをさしにかかる。ひるむだらう。 と、そんな考えがあつたからだ。
痛くても死ぬよつはずつとましだ、と自分に言い聞かせるミラ ジュ。

「…………思つたよりやるな、おまえ。」

攻撃を中断し、ジンが自分の口を開く。

あいかわらず淡々とした口調。

「当然じゃない。あたしはこんなところで死ぬわけにはいかないのよ。もう一度あいつの顔を拝みにいくためにもね。」

あいつとは無論タイガのことだ。

「そうか。……だがオレたちも後には退けない。実のところ、オレたちはおまえたちとこうやって戦つていられるほど暇ではないのだがな。」

「…………なによ、それ。それじゃああんた、あたしと仕方ないから戦つていいのってこと?」

「当然だ。」

腹が立つ。

そんな言葉が第一に思えた。

「…………いいわ。それじゃあもう一度はじめましょう。『仕方ない戦い』を。」

再び戦いが始まろうとしたとき、あの声が響いた。

キンと、部屋が響く。リリ・ジユとシンは堪らず耳を塞いだ。

「君たち戦には中止中止ッ！緊急事態発生だよッ！…」

ウイズだ

2人にとってはウイズが出てきたこと自体、緊急事態なのだがウイズは気にしてない様子。

「…………なんだ。」

いつかおのりの淡々とした口調…………なのだが、エリカ苛立つてい

「……」

説明というのは無論タイガのことだ。

「タイガが
。」

「信じられないかもしませんけど」「 ジュさん。ウイズさんの言つた通りなんです。私も実際見てしましたし。」

「それで、原因は？」

「原因は、俺様が知ってる。おそらく衝動だな。」

徳重にてなに？

「あらか。お世話をちこねた話になかつたつた。少しばかり

長い話になるが、それでいいか?

ミラ ジュ、ジン、ウイズ、セルリア、セシルはこくりと頷く。

それを確認して、ティレクはこう言った。

「タイガの家は、人殺しを仕事としていたんだ。」

第7・8話／衝動の理由

「 タイガの家は、人殺しを仕事としていたんだ。」

「……………。」

一同の頭が真っ白になる。

理由は簡単だ。ティレクの言つた言葉のせいだ。

「……………は、ははは…………。ちよつとあんた、『冗談きついわよ』と、ミラ ジュ。」

ちなみに対ジン戦で受けた傷はウイズに癒してもらっていた。

同様にジンも癒してもらっている。

「冗談よりもタチの悪い現実は、いくらでもあると俺様は思うけどな。」

それを聞くとミラ ジュは黙ってしまつ。

たしかにそうだった。

ましてや今はそのタチの悪い現実が実際に起きているのだから……。

「……………ティレクさん。続けて下さい。」

「ああ、そうだな。 タイガは人殺しの家庭で生まれ育つたやつだ。それは、長くからのやつの親友である俺様が一番よく知つていてる。ちなみに言うと俺様たちの故郷はとある小さな村なんだ。タイガは初めのころは俺様にいろいろと愚痴をこぼしていた。内容は『どうして他人を殺さないといけないのか?』って感じのものが大半だった。幼いころから……俺様が知つていてる限りでは5歳くらいの時にはすでにあいつは剣を握っていたな。5歳の子供がだぞ? 竹刀とか木刀とか、そんなレベルじゃなくていきなり真剣を5歳の

子供が握っているんだぞ？

5歳から小学1年生になるま

では俺様はそれつきりタイガに俺様の親からも、タイガの親からも会わせてもらえなかつた。』

…………。

「…………そしてあいつが小学1年生のとき、やつと俺様はタイガに会えた。だけど、正直あのときのあいつは俺様の知つてゐるタイガじやなかつたな。」

一言で言えば、常に周りに殺氣を漂わせて、触れば斬れる剣のようになつちまつてやがつた。変わつてしまつてた。小学1年生のときすでにあいつは『殺人鬼』になつちまつてたんだよ。』

。

「それで意を決して俺様はあいつに聞いた。『俺様と出会わなかつた間、何をしていたのか？』ってな。するとあいつは口元に笑みを浮かべながらこう答えた。

数人ほど人間を斬つた。

…………正直俺様は信じられなかつた。だけど、あのときのあいつを見れば本当の話だということが嫌でもわかつた。『殺人鬼』になつていた。そのあとタイガのやつは、俺様に聞きたくも無い詳しい話を聞かせた。初の自分に与えられた仕事だつて。仕事だから、人を殺したつてな。』

。

「そしてあいつが10歳になつたとき、俺様はタイガにこう尋ねたんだ。『他人を殺して楽しいか？』ってな。するとあいつは『樂しい。』と言つたんだ。そう言つたから俺様はさらにこう質問した。『殺しの対象が仲間であつてもか？』。するとタイガは考えたそぶりをしてから『確かめる。』って言つたんだ。』

「そしてその翌朝俺様はタイガに出会ったんだ。……普通じゃない出会いかたでな。　　タイガの衣服は血で染まっていたんだ。ただ、その血はタイガのものじゃなかつた。当然ながら俺様は『どうしたんだ?』って声をかけるとタイガは『……楽しくなかつた。』って言つた。俺様はその意味が最初わからなかつた。そしてそのあとタイガが『殺しの対象が仲間であつてもか?』ってティレクが質問したから試したけど、楽しくなかつた。』って言つたとき、やつと意味がわかつた。　　そのあと俺様はタイガの家に向かつた。そこにあつたのは…………　　家族の死体。無論、タイガの死だ。」

「俺様は責任を感じた。どうしてあんな質問をしたんだろうってな。あんな質問をしていなかつたら、タイガが自分の手で家族を殺すことなんて無かつただろうにってな。　　その出来事があつてから、タイガは俺様が住んでいた村から追放された。ほとんど島流しみたいなものだ。10歳の子供を村を追放するなんて。

それからのタイガの選択肢は、そのまま餓死するか、それとも『殺人鬼』として生きていくか、それしかないつて俺様はわかつた。あいつが1人のままである。」

「そして俺様は、1人のままでその2つしか道がなくとも、手助けしてやれるやつが近くにいたらそれ以外に道が増えるかもしれないって思つたんだ。だからあいつが村を追放されるとき、俺様はあいつと共に行動することにした。　　あいつの可能性を広げるため、そしてあいつの居場所を見つけるためにな。」

「たぶん、今のタイガはそのときの感覚が衝動でよみがえつてしまつたんだと思う。追放されてしまらくの間はショッちゅうそんなことがあつたけど、最近はなりを潜めていたからな。俺様自身、もう

「大丈夫だとおもつたんだけど、まだだつたようだ。」

「タイガは悪いやつじゃないんだ、ホントはな。ただ、生まれた場所が偶然人殺しの家庭で、そこで生き方を叩き込まれただから、それを取り除けばタイガはホントにいいやつなんだよ。」

「わかつてゐるよ。そんなことはさ。」

突然、部屋の入り口から声が聞こえたかと思つと、そこにはラピスの姿があつた。

「2人とも、無事だつたの？」

「ミラ ジュ。」

「ああ。それより、さつきまでの話、全部聞かせてもらつたよ。なにやらたいへんなことになつていよいづだねえ。」

「ティレク。」

ラピスはティレクを呼ぶ。

「なんだ？」

「さつきからぐだぐだと言つてたけどな、おれたちは過去のタイガなんてどうでもいいんだよ。」

そのラピスの言葉に、一同は頷いた。もつともセシルビジンは頷かなかつたが。

「おめえがどう言おうがな、おれたちが知つて初めに出会つているのは『殺人鬼』のタイガじゃなくて『善人』のタイガなんだからな。」

「そういうこと。　わかつたらさつとタイガを助けないとね。」

「シャープ。」

さきほどシャープはタイガを『助ける』と言つた。『倒す』ではなく。

それは純粹に『仲間』としてタイガを元に戻したいという気持ちの表れでもあつた。

……もう、タイガの居場所は見つかっていた。

宇宙を漂流し、救助されたそのときから

あとは本人を元に戻すだけ

。

「よし、タイガを助けに行くぞッ！！」

「「「おうッ！！」「」「」

」

一同の声が重なる。しかし、やはりそのときもノリの悪いセシルとジンの声は重なっていなかつた。

最後の戦いが始まる。

第79話／殺人鬼は…

部屋にはいたるところに紅い血が飛び散っていた。

部屋にある大きな白い石柱、白い壁、白い床……

それはもう、純粹な白ではなく黒く、そして紅く変色していた。

吐き氣を誘う鉄の臭い。人間を興奮させる紅い色。

以上が地獄絵図となるべくとしている部屋の説明だ。

「てやッ！」

剣を一閃させるルシア。

だが、タイガは口元を緩ませるとそれを容易くかわす。

ルシアは続けざまにタイガが逃げた方向に向かつて風と同様の疾さの突き。

「ふ。」

それも氣づかれていたのか横にずれてかわす。

そしてルシアの背後へと移動するタイガ。

「はああああああああああツツ！…！…！」

ルシアは振り向きざまに剣を一閃する。

が、タイガの剣に受け止められてしまう。

どれだけ攻撃してもこの調子だった。

流れるように攻撃してもタイガはすべてをよんでいるかのように次から次へと、繰り出す技をすべて避ける。

「ぬるいな。」

一言タイガはそう発するとルシアの腹部に痛烈な蹴りを一撃。その

ままルシアは飛ばされた。

「がはッ。」

そのままつ立っている石柱に直撃する。

直撃した振動で一時的に肺に酸素が行き届かなくなる。が、すぐに立て直す

ドゴッ

いや、立て直そうとしたがタイガがすかさずルシアの腹にもう一撃蹴りを入れる。

「ぐ……うう……。」

倒れこんだルシアの顔を驚掴みになるとそのままルシアの身体を持ち上げる。

「どうした？せっかく相手をしているのだ。あまり僕を失望させるな。」

「…………。」

「もつと本気を出せ。そして僕に一撃くらい入れてみせる。これでは戦いにすらなっていない。ただの虐殺になつてしまつだろ？？」

そう。戦いが始まつてからルシアはタイガの一撃すら入れる事ができていなかつた。

ルシア自身本気を出している。だが、タイガの……いや、殺人鬼の実力がそれをはるかに上回つているのだ。

「ぐだらんな。」

そう言つと殺人鬼はルシアを投げ捨てる。それこそ、ゴミを捨てるような乱雑さで……。

すでにルシアは虫の息。一撃受ければほぼ確実に殺されるだろ？

「せつかく楽しめると思ったんだがなあ。英雄と謳われている者がこの程度の実力とは。」

「

ゆっくりと歩み寄る殺人鬼。一步一步歩むごとにルシアの死期は近づいてくる。

「これで終わりだ。安心しろ。死なんて所詮一瞬の痛みだ。後は本当に生まれ変わつて終わりだ。」
振り上げられる殺人鬼の一撃

「 まったく。邪魔をしてくれる。僕の最高の至福のときを。」

「 邪魔はあまり好きじゃないんだが、仕方ないな。今回ばかりは。剣と槍。互いに交差する。」

扉の近くにはたくさんの人間がいた。

その人間たちに、瀕死状態のルシアがまざつていた。
やがて、得物の交差が終わり殺人鬼はティレクと距離をとる。
「おや。誰かと思えばティレクじゃないか。久しぶりだねえ。
もしかして、僕を助けに来てくれたの？」

「 生憎だが俺様はおまえを助けに来たんじゃない。おまえの中にいる、善人のタイガ・ウナバラを助けに来たんだ！」
「ああ.....僕の中の善人の僕ね。殺人鬼の僕じゃなくて....。」
「わかったなら、大人しくしてくれ。そして、俺様と旅をしたあの善人のタイガに戻つてくれないか。」

「 ティレク。」

「 なんだ？」

「 。」

しばらく黙り込む殺人鬼。そして.....

「殺人鬼の家庭で生まれた人間は、所詮殺人鬼なんだよ。」

第80話／最終決戦

「殺人鬼の家庭で生まれた人間は、所詮殺人鬼なんだよ。」

そう言つたタイガ 殺人鬼の表情は、何か悲しそうだった。
まるで、『殺人鬼の家庭でなんか、生まれなかつたらよかつた。』、
『どうして自分は、殺人鬼として育てられたんだ。』とでも言いた
げな……。

そのときだつた。

ティレクは瞬時に元いた位置から離れる。すると殺人鬼は一足飛び
で斬りかかってきた。

「くそッ。」

ティレクを槍を構え直す。

カンカンキンカンキンキン…………

連續で刃同士が交差し合つ。

互いに攻撃しては受け止められ、攻撃されては受け止める……。

他の人たちとは、その戦いにとてもじゃないが入れなかつた。

いや、入つた時点で餉食になるだろう。

だから、残りの人たちはただただ見守るしかなかつた。そして、祈
るしかなかつた。

タイガが元に戻るよつに、と。

「さすがだなあ、ティレク。」

「……おまえは」

斬撃の打ち合いの隙をみて、ティレクは殺人鬼を槍を振るつて吹っ飛ばすと

「……………どうして元に戻つてしまつんだよッ！…変わるんじゃなかつたのかッ！」

「変わるだつて？殺人鬼からか？」

「そうだ。おまえ、氣づいてるんだろ？『殺人鬼から変わりたい』っていう自分の心情の変化がッ！」

そう言われると、殺人鬼は眉を微妙に動かす。

「氣づいていたから、おまえは村を追放されてから5年間必死に変わらうとしたんじやないかッ！」……………おまえはそれを全部捨てるつて言うのか？」

「……………くせに……………」

小さすぎてよく聞こえない声。それはタイガの身体を借りた殺人鬼の口から出ていた。

「何もわからないくせに勝手なこと言つなッッ！……………」

あまりに大きな声。あまりの大きさのあまり、部屋中に響き渡る。

「おまえにわかるか？ティレク。殺人鬼から必死に変わらうとも、その衝動が時々襲つてくる辛さを…！他人事だからそんなことが言えるんじやないのか？」

「そんなことないッ！！俺様はちゃんとおまえが辛いことを知つていたッ！だから…………俺様はおまえと一緒に村を出たんじやないか。おまえ一人だと辛いから、俺様が少しでもその辛さを和らげようと思つて…………」

「そんなのただの同情と同じじゃないのかああああああああああああああああああああッッ！！！！！」

そう叫ぶと、殺人鬼は感情のままティレクに向かう。

その感情とはもちろん、怒りだ。

ティレクはそれを避けようともせず、ただ槍で受け止める。

殺人鬼のありつたけの怒りを槍を通じて感じ取らうとするティレク。

「…………同情じゃ」

そして渾身の力で

「…………ないッ！！！」

タイガを吹っ飛ばす。

「同情なんかじゃないッ！！同情なんかじゃおまえをここまで迎えに来るわけ無いだろッ！！！わざわざ宇宙中を飛び回って、おまえを迎えて来るわけ無いだろッ！！！」

「！！」

再びティレクに刃を向けようとした殺人鬼の動きが止まった。

「タイガ…………おまえ『殺人鬼の家庭で生まれた人間は、所詮殺人鬼なんだよ。』って言つてたけど、少なくとも俺様と旅してた5年間は『殺人鬼』なんかじゃなかつた。」

「…………。」

「どこから見ても立派なやつだと俺様は思つてた。お人よしで、バカだけど俺様の自慢の『仲間』だと思ってた。」

「…………。」

「だから、おまえの言つたことは間違つてていると思うぞ。変わらうと努力すれば、変われるんだ。『殺人鬼』でもだ。」

「…………。」

「だから…………もう一度やり直そう。やり直して、殺人鬼から自分のなりたい自分になるんだ。」

「…………。」

長い沈黙。

そして

「…………迎えに来たぞ、タイガ。」

いつからだろうか、俯き気味のタイガからは涙がこぼれていた。

殺人鬼の濁つた心ではなく、タイガの透き通つた純粋な心のように。その涙は透き通つていた。

最終話～ヒロ グ～

澄み切つた蒼い空。

その蒼い空に、白い雲が泳いでいる。

うらうかさが平和になつたと実感をさせてくれる。

何もかも元に戻つたんだとこうことを

ここは『ラグナエス』の内部にある公園。

公園の中央には噴水がひとつあり、熱いときは水浴びできるようになっている。

そしてその周りは芝生の絨毯。昼寝には絶好だ。

そのほかには、入り口から道になるように並べられているたくさん の花が植えられている花壇。それに芝生のところには小さな木が何 本か植えられている。そのほかには茂みがいくつかある。

はつきり言って、町とかで見かけられる公園より設備がいいほうかもしれない。

補足で言うと、蒼い空も白い雲は全部映像で映し出されている。さら に言うと、夜にはちゃんと星空が映し出される。

そんなところに1人の青年、『殺人鬼』から立ち直つたタイガ・ウ ナバラがいた。

タイガは1人公園で散歩していた。正直タイガはみんなと居すらか つた。

その理由は無論、『殺人鬼』としての人格を一時的に衝動で起こしてしまつたからだ。

「ここには居場所が無い。」

そんなことを考え始めていた。唯一居場所があるとすれば、タイガにとつて人目がつかないところだ。

そのため『ラグナエス』に戻ってきてからのタイガは人との接触を極力避けていた。

『また衝動が襲つてきたら……』、『今度は元に戻れるんだろうか。』……そんな考えが、タイガに人を避けさせる……。

「タイガさんッ！」

ふとタイガは公園の入り口を見ると、そこからとある少女がタイガに向かつて走つてきていた。

タイガが今一番会いたくない人物でもある。

嫌いだからという理由ではなく、別の理由で……。

「……セルリア。」

「タイガさん。こののところどうしたんですか？」

不意にそんなことをセルリアから聞かれるタイガ。

「どうしたつて……なにが？」

「こここのところタイガさん、ずっと暗めの……といつよりどこか辛そうな顔をしていますよ。」

事実上その通りだった。

暗い考えや辛い考えがタイガの頭の中に渦巻いているからだ。

「だから……どうしたんだろうって……。」

「…………セルリア。この『ラグナエス』での僕の居場所なんであるのかな？」

今一番聞きたいこと。それをはつきりセルリアに質問をした。

「どういう意味ですか？」

「言つたとおりの意味だよ。僕はあのとき、『殺人鬼』としての人格を呼び起こしてしまった。なんとかあのときは治まつたけど『殺人鬼』としての人格がまだ消えたわけじゃない。今度は治まるなんて保証も無い。…………下手をすると、今度はこの『ラグナ工ス』に居る人たちを…………。そんな危険人物に、居場所があるのかなつて。」

「そんなの…………あるに決まつているじゃないですかッ！…この『ラグナ工ス』自体、タイガさんの居場所じゃないんですか？過去がどうであつたとしても、今のタイガさんは間違いなく良い人ですし、少なくとも今のタイガさんは危害を加えるような人じやありませんッ！」

「今はそうかもしねないけど、もし『殺人鬼』としての人格がまたよみがえつたとき…………。」

「そのときは私たちがとめてみせますッ！今はセシルさんやジンさんやウイズさんやルシアさんも居るんですから…………。」

そのとき、タイガとセルリア近くにある茂みが「そつと動いた。

「「へ……？」

タイガとセルリア、2人そろつてやや抜けた声を出す。
それから数秒後……

「だあああえが少し動くからばれちまつたじゃねかッ！…」

「うつさい色魔男ッ！…あんたに言われると3割増し怒りが増量するわッ！…！」

「やれやれアンタたち。ばれたとわかつたら急にうるさくなつたねえ。」

「…………ばれたのか？」

「つてジン。君わかつてなかつたのか？」

「ジンつて言つたか？おめえつて冷静沈着なふりしてつけど結構ボ

ケキヤラジヤ　ね　のか？」

「そうそう　ジン君は意外と抜けてるんだよねえ～　」

「へえ～。新メンバ　の意外なところ発見つて感じだな。」

「それより2人がこつち見て固まつているように見えるのはボクの
氣のせいか？」

出でくる出でくる。

小さな茂みから異常なまでに出でくる人間たち。

ティレク、ミラ　ジユ、シャ　ブ、ラピス、カイル+新たに加わったセシル、ジン、ウイズ、ルシア…………計9人。

その9人を見て、口をあんぐり開けたまま固まつてしまつたタイガとセルリア。

「…………ビ、ビビビ、ビビ、ビビビビビ、…………ビビしてみん
ながここに居るんですかあッ？」

ようやく言葉を発することに成功したセルリア。

「どうしてつてそりゃあ…………かくれんぼだよ、な？」

ティレクがそう言つとコクコクと首を縦に振るその他8名。

「かくれんぼなのに鬼がいないようですけど。」

「鬼なしかくれんぼだよ、な？」

再びその他8名は首を縦に振る。

「まあまあそんなことよりせつかくみんな集まつたんだしさ、この公園でピクニックとかしない？」

いとあやしげばかりに視線を向けるタイガとセルリアからなんとか逃れるべくウイズは超強引に話をそらす。

「お、いいねいいね　そんじやあ早速準備しにいこ　か、みんなッ。」

「

そう言うとカイルは一目散に公園から退場。それに続くように残り8名が出入口に向かつた。

「タイガ君とセルリアちゃんも準備しなよ　ツ！…！」

出入口から叫ぶウイズ。どうやら本当にピクニックするようだ。

「……なんだつたんでしょう、あれ。」

「

「僕に聞かれてもなあ。」

公園に残された2人。

「…………タイガさん。」

「なに?」

「『殺人鬼』の人格がよみがえつてしまつたら……てタイガさん言つてましたけど、そんなものは仮定の話なんですから、今は考へないでおきましょう。」

「…………だけど…………。」

「仮に本当によみがえつてしまつたら、さきほども言つたとおり私たちが何とかしますよ。今のタイガさんは『殺人鬼』のタイガさんではなくて、『善人』のタイガさんなんですから大丈夫なんですし…………それに…………。」

ふとタイガはセルリアを見る。

セルリアは微笑んでいた。とても優しく……そして、とてもうれしそうに。

そしてこう言った。

「私は今のタイガさんが好きなんです。」

好き…………。

それはタイガが昔、セルリアに言つた言葉。

それも『殺人鬼』としてのタイガではなく、『善人』としてのタイガが…………。

「だから、ここにいて欲しいと私は思います。タイガさんにとって『居場所』かどうかはわかりませんけど、少なくとも私はここに居て欲しいです。この『ラグナエース』…………いや、私のそばに。」

「…………怖くないのかい？」

「ぜんぜんと言つたら嘘になります。ですが私、信じていますか
ら。」

信じている……。

それはおそらく、タイガが『殺人鬼』の衝動に負けないことを信じ
ているのだろう。

なら、タイガ自身それに答えないわけにはいかない。

「…………うん。信じて欲しい。」

「それと…………。」

少し間をおいて、セルリアはこう言つた。

「おかえりなさい。」

その言葉は、居場所がある人間に言われる言葉。

返す言葉は決まっている

「ただいま。」

LEGEND『伝説』【輪廻の出来事】

THE END . . .

最終話～HAPPY END（後書き）

LEGEND『伝説』【輪廻の出合】全80話超完結です。
約2ヶ月ちょっとの連載の間、読んでいただいて本当に感謝しています。

初小説ということもあって緊張していましたけど、みなさんが読んでくださったおかげでめでたく終了できました。
それでは、また機会があるときお会いできれば幸いです。

2006年平成18年9月24日

LEGEND『伝説』【輪廻の出合】

完結

byなかたく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7016a/>

LEGEND『伝説』【輪廻の出会い】

2010年10月15日21時38分発行